日夜に罪をつくりつゝ
安樂世界を願はぬを
靜につく〳〵案ずれば
落つる淚ぞとゞまらぬ
苦しき惡趣に入る時は
隨ふものは罪ばかり
これを法然上人も
思ひあはれみ死して後
我身にそふる實には
南無阿彌陀佛にしくなしと
詠じたまひし御歌を
よく〳〵心に思惟せよ
其の時誰をか賴むべき
たゞ願はくば阿彌陀尊
無他方便の惡人を
早々救はせたまふべし

第六　無常迅速なるを明にす
拠又露命のはかなさは
思ひのまゝに長らへて
日數の知れし事ぞかし
老少不定のありさまは
今までそひし妻子にも
別れてなけく世の習ひ
これ生滅のかなしみは
貴賤上下をきらはずに
夢とさめ行く哀れさは
目に見る前の敢果さぞ
みづから常なき理りを
よく〳〵思ひ今よりは
あしかる業を皆すてゝ
日夜に取作の功をつめ
はや夕ぐれの旅のみち
今をかぎりに息絶えば
拙き我等諸共に
安樂國に生れなん

三三　歸命本願和讃

無能上人作

南無至心歸命禮
西方極樂彌陀尊の
因地は金輪王として
一四天下を領しける
果報いみじく在せども
世自在佛の法をきゝ
心をおこし國を捨て
位をさりて比丘となり
初地の證を得玉ひて
法藏菩薩と號しける
一子の慈悲のわりなくも
かゝる拙き末の世の
我等ごときの罪深き
衆生を濟度せん爲に
五劫の間思惟して
選擇攝取したまへる
六八弘誓の其中に
第十八の本願は
十方衆生へだてなく
南無阿彌陀佛と口稱して
助け玉へと念ずれば
洩らさですくひ玉ふ也
つく〳〵我等來し方を
思へば實にも罪咎の
深く重きが故により
三世の諸佛悉く
御手を放ちて捨玉ひ
十方淨土おしなべて
扉を閉ぢて入れられず
三途苦難の火の中や
人天有爲の浪のうち
さしも險しき六の道
幾廻りてはてしなき

常沒流轉の身なれども
拠もこりせぬ心から
起惡造罪とゞまらず
惡をなすには寢食も
なほ忘れつゝ善事には
暫の勤もいのうきを
思ひとくにぞ我ながら
出離のえにし無き身には
あらそふ所あら海の
難波の水に惡き身に
蘆かることの積りなば
悲しきかなや後の世は
又も炎に燒けこがれ
厚き氷にとぢられて
辛き憂目に逢ふ時は
天によばひ地に伏して
嘆き悔ゆとも返らじを
いかにす可きと思へる
しかるを獨り我彌陀は
いかなる大悲や在しけん
彼佛因中立弘誓
聞名念我總來迎
不簡貧窮將富貴
不簡下智與高才
不簡多聞持淨戒
不簡破戒罪根深
但使廻心多念佛
能令瓦礫變成金
とてもかくても世の人の
機の善惡の嫌ひなく
救ふ誓ひをたて給ふ
惠の程ぞたうとけれ
因位法藏比丘のとき
御願成就の爲にとて
難行苦行したまへる
中にも布施と忍辱の

修行をきけば有難や
衆生の望に任せては
命も身をも願りみず
堪へ難きをもよくたへて
忍ぶも衆生の爲なれや
若も願の滿てずして
衆生濟度の叶はずば
唯諸共に沈みなん
衆生を捨てて我ひとり
成佛せんは本意ならず
衆生濟度の爲ならば
たとひ我身を諸々の
苦毒の中に置くとても
など苦しみと思ふべき
我精進を行じつゝ
忍びて終にくひしめて
數もしられぬ兆載の
永き劫波に身を盡くし
たてし誓ひの橋ばしら
洩らさで渡し給はんと
ふかく願はせ給ふゆゑ
世に超え玉ふ大願も
願ひも既に成就して
十方淨土に勝れたる
極樂世界を莊嚴し
十劫已前に阿彌陀佛と
ならせ玉ひし其時に
我等が心行具足せば
往生すべきに定りぬ
けにや異國の孟宗が
深き願ひに筍の
雪を穿ちて生ひにける
例も思ひあはせては
佛の弘誓を身に掛けて
忝なくも賴もしや
我等罪障ふかき身の
此度生死を出でんこと
雪の中なる筍の
生ゆべく無きに似たれども
佛の悲願ふかくして
叶ひし故にやすゝと
報土に往生する事は
只管他力の恩ぞかし
今や佛は極樂の
上品花臺に安座して
光明普く十方の
世界を照し念佛の
衆生攝取の御手を垂れ
佛眼遙にみそなはし
待ちわび給へる裝ひを
思ひやりつゝ諸人よ
勤めて御名を稱へなば
遂に命の終るとき
佛と聖衆に誘はれ
極樂淨土に生るべし
唯願はくば阿彌陀佛
打任せつゝ賴む身を
大悲の願に修めとり
順次に引攝たれ玉へ

三四　淨土生蓮和讃

無能上人作

此界一人念佛名
西方便有一蓮生
但使一生常不退
此華還到此間迎
娑婆に念佛勤むれば
淨土に蓮ぞ生ずなる
花には黃金の札有りて
其人々の名を記し
身はまだ娑にあり乍ら
心はすでにかの國の
花に形をあらはして
聖衆の數に入るとかや
一生常に退せねば
華もます〳〵成長し
其人一期の終りには
此花歸りてむすぶ也
若も念佛怠らば
蓮やうやく枯しほみ
或は念佛すたるれば
種さへ池に朽つるとや
蓮ひらけば佛菩薩
歡喜の裝ひ類なし
花しほるれば極樂の
聖衆の悲しみ限なし
構へて念佛する人は
生ひし蓮のよく開け
遂に迎の夕べには
其花の上に實のるべし
一世の勤修は須臾の程
衆事を投捨て願ふべし
願はゞ必ず生れなん
ゆめ〳〵怠る事なかれ

三五　攝取不捨和讃

本覺無爲の都をば
一念迷ひいでしより
六賊五欲に誘はれ
生死流轉の身となりて
幾百劫をかさぬらん
地獄鬼畜に生をうけ
見佛聞法縁うすく
今まで迷ひきたりしぞ
十惡五逆のみならず
一切不善の我なれば
またも地獄は必定よ
諸佛大悲のちからにも

見捨てられたる此身をば
あら有難き彌陀の慈悲
十劫已前の其のむかし
別願超世の本願は

助け玉へのこゝろにて
南無阿彌陀佛と唱ふれば
聲に應じて來迎し
これまで作りし罪咎の

重き輕きも問はずして
かならず西方極樂へ
導きたまふのみならず
苦を抜き樂を與へんと

功德莊嚴微妙なる
淨土を西にかまへつゝ
我等がかたへ打ち向ひ
夜晝護念したまへり

かゝる不思議の恩德を
いかなる罪の報ひにて
しらず過ぎにし愚さよ
此の度かゝる本願を

聽きうる此の身の仕合を
能々思へ諸人よ
此の世は無常の境にて
夢幻の身なるぞや

貴賤貧愚のへだてなく
老ひも若きもあとや先
何の頼みとなるべきぞ
忽ち無常に逢ひぬれば

花の盛のわかき身も
風に吹かるゝ朝貌の
露よりもろく散るも有り
昨日見し人今日はなし

野邊の烟ときえて行く
あら頼みなき身の上や
斯るはかなき命にて
欲しや惜しやの煩惱や

惡し可愛の執着に
いつまで夢を結ぶぞや
常住不退の寶國は
一心專念阿彌陀佛

易行易往と說きたまふ
早くも願へ彌陀の慈悲
十聲一聲猶捨てず
若しも衆生の生れずは

不取正覺の誓ある
本願不思議の光明に
胸の雲霧晴れわたり
南無と唱ふる聲につき

攝取の中に住む身とぞなる

三六　無常和讃

一心歸命阿彌陀佛
二世安樂の御誓
諸佛菩薩に勝れたる
大悲の本願有難き

あはれ拙き我等かな
娑婆の暇のあきやらず
かゝる浮世に長らへて
樂しむ心にまかすとも

人間わづか五十年
頼み少なき浮世なり
花にたとへて朝顏の
露より脆き身を持ちて

五欲に心をひかされば
奈落の底に沈みなん
定めなき世の習ひにて
生れて其日に死ぬもあり

五つや十の蕾の花
二十や三十の花ざかり
尤も若きは妻も子も
一夜の風に誘はれて

花も紅葉もちりぢりに
おくれ先だつ世の習ひ
高き賤しきおしなべて
無常の嵐逃れなく

終にはかなき仇野の
草葉の露にきえぬべし
魂さりて屍は
野邊の烟となりにける

漸く知邊の卒都婆のみ
見るも悲しき次第なり
生れがたなき身を受けて
また逢ひがたき本願を

願はでこの儘終りなば
ついに冥土へおち入て
劍の山の死出のたび
三途の河原のがれなく

閻魔の廳にひきだされ
獄卒呵責のおそろしき
洞燃猛火のなかに入り
苦むことのはてしなく

紅蓮の氷に閉ぢられて
骨身をくだく苦しさよ
血汐の涙にそめながら
いかに後悔するとても

最早かへらぬ事ぞかし
一百三十六地獄
巡り〳〵て出る期なし
聞くさへ胸もふさがりて

身の毛もよだつばかりなり
こゝに大悲の彌陀如來
かゝる罪人たすけんと
難行苦行の厭ひなく

本願成就し給へり
我名を唱ふるものあらば
善惡男女の隔なく
洩らさで救ひたまはんと

誓ひ玉ふぞ有難き

いざや厭はん有爲の娑婆
願ひ求めん極樂を

三七 無常和讃

靜に無常を觀ずるに
有爲轉變の世のなかは
電光朝露のごとくにて
夢幻泡影まことなく
一切すべてとゞまらず
泉下のながれ速かに
盛者必衰世のならひ
浮雲の榮花ほどあらじ
旦に紅顏うるはしく
世路にほこる人の身も
ゆふべは野邊の白骨と
朽ちてはかなき命なり
後生と聞けば遠けれど
知らずや今日も其日なる
魂籠の鳥ならで
開くを待ちて飛びさりぬ
身は風前のともし火の
しばしの中も危し
頓死眼に遮れど
掴き心おどろかず
むかしの友を算ふれば
みな露霜と消えはてゝ
僅か此の世に殘る身の
昨日も今日もいたづらに
あかし暮して思ふこと
みなこれ惡趣の焰のみ
朝より暮になせる業
多くは地獄の薪木なり
息胸臆に止みぬれば
屍は野外におくらるゝ
妻子珍寶及王位
臨命終時不隨者と

示す御法も他に聞く
名利の紲に繫がれて
憂世をめぐる小車の
法の道には趣かず
無明の雲の晴れやらで
くらき闇路を迷ひなば
泣々ひとり行く道は
誰問ふ人もあらずして
業力引きて行くさきは
三途の河や死出の山
閻魔の廳にひざまづき
呵責の責を蒙ふりて
阿房羅刹の手に渡り
無間の炎に身をこがし
天に仰ぎ地に伏して
恨み悔ゆるも益あらじ
急いで淨土を願ひつゝ
彌陀の悲願を憑むべし

賴む甲斐ある御佛の
弘誓の船は隔てなく
洩らさで渡し玉ふぞや

三八 無常和讃

生死事大おそるべし
無常迅速とゞまらず
光陰惜むべしとかや
時人待たぬ世の中の
月日に關守あらされば
死期のみ近くなる神の
憑くよりも怖しき
冥途の迎ひ責めくれば
玉の臺を磨きつゝ
錦のしとねかざる身も
無常の嵐はげしくて
花の客もちりうせぬ
妻子眷屬あつまりて
屍を懷きて悲しめど
とても歸らぬ死出の旅
綺る絹のよしなし
麻の衣のたゞひとへ
身に添ふ物は影ばかり
親しき限りなけゝども
冥途へ伴ふことぞなき
千筋と摩でし黑髮も
蓬がもとに散りみだれ
夕べの煙と身は消えて
名さへ朽行く淺茅ヶ原
塔婆の文字も見え分かず
後れ悲しむ人もまた
程無く空しくなりぬれば
その塚さへもあと絕えて
苔のみのこる果敢さよ
わが身もそれと顧みず
子孫を愛し財寶を
積み貯へて惜みても
ながき黃泉の糧ならず
魂うかれさまよへど
影よりほかは連もなし
たれか哀れを訪はん
死出の山路は嶮しくて
三途の川もほとりなし
すゝめば水火の波荒く
かへれば劍巖聳へたり
進退怖畏の中に居し
天に叫び地をたゝき
嘆き悔めど返らじや
切にこの土を厭離して
はやく淨土の門に入り
彌陀の悲願を賴みつゝ
稱名怠ることなかれ

三九 無常和讃

生者必滅皆人の
老いて逃れぬ死出の旅
老少不定世のならひ
親に先立ち子に別れ
身を萬世と祈るとも
命は蜉蝣の暮待たじ
心は千代を期すれども
すがたは槿花の朝の露
生は日々遠ざかり
死は念々にちかづけり
駒の足なみ急がしく
羊の歩み暇なきも
世路の繁きに紛れては
めぐる月日も忘れつゝ
次第に衰る魂の緒の
いとゞ危き身ながらも
末頼むこそ果敢けれ
昨日の友も今日は無く
無きは數添ふ夢の世を
いつとて覺むる心なき
夜な夜な胸を傷ましむ
無常の烟船岡の
山にたちつゝ消えやらず
朝な朝なに袖しぼる
泪は玉や鳥部野の
草葉に結び絶ちもせず
もとのしづくや末の露
おくれ先だつ世の中の
瀕を湍淵と爲しぬとも
命をとむるしがらみは
なしと知るべし人の身の
終には魂はさりて後
行衛もしれぬ浮雲の
定めなき世は何事も
皆僞にたゞひとつ
死するばかりは誠なり

四〇　無常和讃

凡そ諸行は無常にて
これ生滅の法とかや
萬法ともにあとなきは
水に映せば影にして
紅顔往きて還へらねば
衰老來たりて且さらず
鏡をてらし眺むれば
知らぬ翁影なれや
死して歸らぬ身なれども
行きて留まる西の空
わが染めなせる索の
雲を迎へし色を見む
稱名一乘多善根
罪障殘る雲もなく
一念十念佛來迎
本願誤る事ぞなき

面にたゞむなみの紋
腰におびたるあづさ弓
頭の雪や眉の霜
四季の轉變身に移り
眼に春の霞たち
耳には秋の蟬のこゑ
身の一重なる皮衣
夏の日にまし黒みつゝ
肌はかじけ冬の夜の
さむき嵐や荒屋の
筋骨あれてあさましき
行くもかへるも千鳥足
鳩の杖にし助けられ
老曾の森の老いぬれば
若きはうときいつしかに
兒に歸りておのづから
智慧の鏡もくもりつゝ
もとの姿もいづち行き
盛りの色はうつろひて
わづか梢に散りのこる
花の嵐を待つ命
徒なる老の隱れ家を
とやせんかくと計らふは
雪の佛のいとなみの
やがてはかなき例なり

四一　厭欣和讃

厭欣心のなきものは
生死のさかひ出でがたし
發心修行する人は
六趣の輪廻觀ずべし
知らで愛するこの身にも
佛の種は備へつと
說ける御法の花の枝に
結ぶ誓ぞたのもしき
まづ第一は地獄道
一百三十六地獄
八寒八熱そのなかに
焦熱無間の苦しみは
炎を家となしぬれば
全身猛火に燒爛し
火焰にむせび聲いでず
紅蓮の氷の淋しさは
皮肉五體も裂け破る
餓鬼は千萬歲のうち
飮食名をだに聞かずして
水に臨めば火となりて
飢渴の苦痛たへがたし
畜生道は目のまへの
牛馬と生れ重荷負ひ
羽毛鱗甲そのたぐひ
殘害殺戮いとまなし
修羅の闇に迷ひては

三熱日々に身を攻めて
瞋恚の焔胸をやき
闘争堅固ひまあらず
ことさら人界四苦八苦
貴賤のくるしみ品替り
無量の苦患謀りなく
天は色界無色界
三禪天の妙樂を
五衰退没のがれなし
すべて三界火宅なり
何くか安き事あらん
斯る苦界に無始以來
千生萬生沈む身の
此の度御法にあふ事は
渡りに船を得るとかや
乘り後れなば如何して
無爲の都に歸りなん
歸去來魔境と誘へど
入被涅槃の思ひなし
懲りずやまたも怖しき
闇魔の盧にいたりつゝ
功徳いかにと問はれなば
無き善なにと答へなん
倶生神の鐵札は
讀めど盡きせぬ其の中に
重き十惡正されて
いつはり覆ひ隱すとも
業の秤のつみおもく
玻璃の鏡にうつる過
聊か曇りなき影を
何と爭ひのがるべき
手械足械にかゝり
獄卒瞋れるまなこより
鐵火の炎ほとばしり
呵責の口より火を吐きて
所感を知れと打つ杖の

其の數々のかなしみは
洞然猛火の暇もなし
受苦の年月久しくて
親兄弟もたすけ得ず
妻子眷屬かはらめや
たゞ賴むべし彌陀如來
かの玄進が極惡も
其佛本願力と說く
文には浮ぶためしあり
淨敎流布の世に生まれ
寶の山に入りながら
信心の手を空しくも
舊の三途に歸りなば
誰かあはれみ加へなん
流石岩木に有らぬ身の
好めば發心すると聞く
心の駒にむちうちて
菩提の道に進むべし
願へば淨土遠からず
唱ふる聲は下にあり
信行はげむその人の
直至道場たのみあり

四二　歡喜踊躍和讃

思へば浮世は程もなし
榮花は皆これ春の夢
名利の心をとゞめて
いそいで淨土を願ふべし
願ふ淨土は他にあらず
聖衆の來迎をまつ
死する所は二つなし
最後は念佛ばかりなり
あらありがたの法の聲
人間界に生れ來て
末法なれども自ら
念佛行者の身とぞなる
觀音勢至の來迎は
聲を尋ねて迎へある
十惡五逆の雲はれて
未は蓮花の開くなり
未の法はもろともに
解脫は何れも劣らねど
末代慈悲の御敎は
念佛往生すぐれたり
念佛十念種として
往生淨土の花開く
菩提と此身なるをりは
利益修行も成就する
八万四千の經文は
無明滅せんためなり
利劍卽是の名號は
唯一聲に罪消ゆる
女人が佛にならぬとは
難行道の言葉なり
されども彌陀の誓には
女人惡業えらばれず
攝取不捨の光明は
念ずる所を照すなり
遍へに彌陀を賴むべし
遍へに彌陀を賴むべし
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀
南無阿彌陀

四三　觀音和讃

歸命頂禮觀世音
歷劫久遠の其むかし
阿彌陀如來の第一子
不思太子と申すなり
西方淨土を立ち出て
娑婆に出現し給ひて

此界因緣ふかきゆゑ
衆生を導き給ふなり
頭に寶冠いたゞいて
親孝行の身を現じ
またあるときは蛤に
影を移して化度し給ふ
楞嚴會上に在して
等覺無垢の諸菩薩と
二十五種の圓通に
ひとり正界をとり給ふ
法性無漏の大海に
欲の釣拋て
恒沙の鱗を籃に入れ
魚籃となりて賣り給ふ
隨緣眞如の月の夜は
大悲微妙の粧ひに
馬郎が家に嫁いて
愛別離苦を示し給ふ

一度我名を聞く者は
漏さず救ふ有難し
さて此界の有様は
熟々思ふにゆめの夢
哀れ拙きわれらかな
生死の海に浮き沈み
いつか般若の船に乘り
菩提の彼岸に至る可き
嗚呼末法の惡しき世に
福緣うすく生れ來て
日々夜々の煩惱を
吾々苦しむ火宅ぞや
行末はかなき悲しさよ
早く出離を求むべし
此世の樂は暫しぞや
未來の苦患如何ばかり
一念迷ひし其ときは
三毒鬼とも蛇身とも

六趣輪廻は外に無し
みな唯心の作事なり
一念不生と悟るとき
況や女人の身の上は
三從五障の隔て有り
朝夕撫でし黑髮も
いつか頭に雪つもり
比翼連理の語ひも
無明の眠り夢ぞかし
吹き驚かせ松風よ
闇地をてらせ峰の月
山よりたかき父の恩
海なほあさし母の愛
身を寸々に碎きて
酬ゆる時はなかりけり
貯へ置きし財寶も
馴れ睦じき妻子をも

あるか無かの世の中に
無常の嵐ふくならば
仇野の露と消え失せて
鳥邊の烟行衞なし
眷屬多き人々も
獨りも隨ふものぞなき
親に先だつ子も有れば
子を捨てて行く親もあり
老少不定は習ぞや
會者定離を辨へよ
死出旅路の伴とては
血脈一本珠數一連
その時魂獨り行く
貴賤上下の隔て無く
三途の大河浪たかく
劍の山も風あらん
一百三十六地獄
一つも緩き事はなし

名を聞くだにも恐れ有り
黑鬼赤鬼の有様は
刃と鋒や毛拔にて
身を碎きては舌を拔き
罪の輕重責めありて
後悔懺悔も及ばれず
獨り我身を恨むべし
況や無間の有様は
心も言葉も及ばれず
壽命月日の長きこと
人間世界の千增倍
責や苦患を語りなば
氣も魂もきえうせん
一度人身失へば
萬劫千生かへらずと
尙恐れても懼るべし
こゝろ留むる勿れ此世界
知識經卷そのをしへ

親く受けて勤むべし
坐禪觀法をこたらず
戒行堅くまもりなば
臨終正念うたがはず
諸佛の淨土に生ず可し
其時誓願失へば
またこの界に出生し
三界流轉の衆生をば
補陀落山に誘はれ
唯ねがはくは觀世音
偏に證明なしたまへ

四四　觀音和讃

歸命頂禮觀世音
むかしは正法妙如來
未來は光明功德佛
十大願のうみふかく
今此娑婆に示現して

生きとし生ける者の爲
大慈大悲の手を取り
種々に濟度をなし給ふ
譬へば萬の水澄みて
一の月の映る如く
感應靈驗新なり
聞くに法華の普門品
三十三に身をわけて
十九の說法有難く
七難三毒みな滅し
二求兩願も成就せり
若し人現世は安穩に
後生も善處と思ひなば
常々菩薩を念ずべし
念被觀音の其ちから
如何なる障も除くなり
無量の福德巢りて
春の晨に鳴く鳥も
秋の夕べの虫の音も
究竟梵音海潮音
聞聲悟道の法のこゑ
實にや仰ぐも愚なり
扨また行者の臨終は
蓮の臺をさゝげ來て
隨願往生とけしめり
これ此菩薩を信ぜずば
渡に船を忌むならん
然れば高きも賤きも
童男童女に至るまで
念々疑ふこゝろなく
誠に頂禮致すべし
南無大悲觀世音
奄阿盧利伽娑婆訶

四五 觀世音和讃

歸命頂禮觀世音

娑婆世界度衆生
大慈の大悲の深きこと
遙に餘尊に超え給ふ
無數の菩薩の其中に
施無畏者の名を得給ふ
緣に隨ひ機に應じ
一切衆生を救はんと
六觀音や八觀音
あるひは三十三身と
種々に反現在すも
威力の勝れるゆゑなりき
世間の奇特の新なる
日月星のそのなかに
殊にすぐれし日輪の
本地すなはち觀世音
佛も讃嘆ましまして
經文すでに分け明けん
むかし異朝に玄宗の
聖代に旱のありければ
善無畏三藏勅を奉け
雨を祈りし砌りには
日輪なかより出現し
瓶水洒きたまひしが
甘雨普く潤へり
是れ現證と仰ぐべし
我が朝にては用帝の
太子と降誕し給ひて
釋迦の舍利を將來し
緣機難思の御方便
佛敵守屋を退治して
破邪顯正の願をとげ
四十六所に寺を立て
最初佛法弘通せしは
偏へに大悲の力ぞと
思へば恩德廣大なり
爾來花山の法皇は
救世の菩薩の靈場を
三十三所撰びえて
巡拜し給ふ始より
今に諸人の巡りつゝ
二世の願は懸くるには
必ず利益を垂れ給ふ
是れ又大士の力なり
日本國中大小の
神社の數は三千餘
中にも利生の勝れしは
本地多くは觀世音
無邊の衆生を度さんとて
神と現れ化したまふ
觀音薩埵ぞ有難き
およそ諸人の願には
除病と延壽と厄年と
福德智惠や高官位
力杖害せず橫死せず
毒藥毒虫身につかず
猛獸の怖も更になし
守り給ふは救世菩薩
況や滅罪生善の
途は樣々多けれど
二世の勝利を願ひには
今此菩薩に如くはなし
經文陀羅尼多けれど
觀音神呪ぞ第一たり
每日百八唱ふれば
尊容拜する事をえて
菩薩行者に告げ言はく
何をか願ひ求むるぞ
一切汝に施與せんと
金言ひとへに憑あり
誠に拙き我等さへ
信心肝に銘じてぞ
隨喜の淚禁じ得ず

たゞ一心に願ふなり
大悲臨終の夕べには
五五の菩薩の先に立ち
自ら金蓮捧げてぞ
必ず引接なしたまへ

具足神通力
廣修智方便
十方諸國土
無刹不現身
南無大慈大
悲觀自在尊
心中所願
決定圓滿

四六　觀音和讃

歸命頂禮觀世音
寂光無量の都より
普陀落淨土に出現し
五欲の塵に交はりて
苦界の衆生を度し給ふ
慈悲萬形の菩薩たち
其數限はなけれども
大慈大悲の深きこと
觀音薩埵に如くはなし
三千諸佛の慈悲心に
觀音一人に請けつぎて
普門慈現の妙智力
濟度利生の果もなし
御名を唱へて頼みなば
限知られぬ後世迄も
迷ひの雲を拂ひつゝ
導き給ふぞ有難や
惡業深き罪人を
死出山路の暗きより
闇きにわたる三途川
渡るを小船の無き時は

只因緣をたよりにて
救はせたまふ御誓願
大燒熱の炎には
涙の隙もなき內に
叫ぶ聲さへ盡きぬれば
誰を頼みて逃るべき。
今の因緣あるなれば
忝けなくも觀世音
代りて苦患を受け給ふ
世は渡る業の其中に
怖畏急難のある時は
施無畏の御手に逢はなんを
佛の誓ひたゝひとり
觀音薩埵と極れり
七難障り福德も
一命歸命のあらたには
皆毒解脫の日の守り
三毒禍深くとも
わづかの見聞各身にも
塵勞滅の深き緣と
なるは凡夫の害となる
胸火心浪妄風の
三毒常に起しつゝ
自身の寶宅燒き盡し
自己の心水濁らしめ
心殿日々に朽ちること
皆これ自心の業ぞかし
三毒いかに退治せん
彼の觀音を念ずれば
無量の苦厄を拔き給ふ
觀音妙智の慈力には
諸佛の說化を皆讓る
一切自在の德を具し
大悲の慈眼高ければ
僅に衆生を見そなはし
而爲說をしたまへり

常念恭敬の夕には
便得利益つきつめり
願の品とかわれども
我子なるぞと宣ふて
あはれみ給ふ御誓願
現在西方阿彌陀佛
娑婆に示現し觀世音
三世利益の御容
今世後世を頼みなば
於苦惱死厄まで
能爲作依怙の頼ある
福壽の海は無量なり
童男童女に至るまで
聞きて疑ふ心なく
只稱名唱ふべし
南無や大悲の觀世音
南無阿彌陀佛阿彌陀佛
御詠歌に

あら尊と導きたまへる觀世音
高き賤しき人を選ます

四七　觀音和讃

歸命頂禮觀自在
吾等を惠む父母よりも
慈悲恩愛の深ければ
誰とて歸依を疎んぜん
清淨如來の秘號をは
衆生の爲に隱しつゝ
九界の有情を憐みて
吾等が苦み拔き給ふ
左手の蓮華を觀ずれば
不染の自淨を示すなり
右手の寶印皆人の
心の德をあらはせり
無量の妙相義理あれば
言偏なれば盡き難し

五濁惡世のこの衆生
怖畏急難に沈むとも
須臾に常念すゝむ時
即時に無畏を施與す也
常心不斷の輩は
常念佛の障りなし
元より具足の觀世音
同入解脫の床ならむ
南無や大悲の觀自在
種々の十惡五逆罪
消滅自他平等即心成佛

四八　二十五菩薩和讃

信心常に勤むれば
佛の本願たがひなく
無邊の聖衆諸共に
來迎引接垂れ玉ふ
阿彌陀佛は光明を
放ちて行者を照しつゝ
紫磨金色の御手を延べ
摩頂贊嘆淺からず
觀音菩薩の蓮臺は
我性の蓮華を寄せ玉ふ
勢至菩薩の合掌は
本有の理智を現せり
藥王菩薩の憧幡は
不老不死と飾りたつ
藥上菩薩の玉幡は
住行向地の露をたる
普賢菩薩の寶蓋は
恒順殊勝と差し覆ひ
文殊菩薩の華鬘をば
各得自性とさしかくる
日藏菩薩の瓔珞は
四十一地の露をたる
月藏菩薩の大鼓は
平等大會と打ち鳴す
日照菩薩の鉦鼓は
四土不二と打ちならす
寶藏菩薩の笛の音は
十界十如の聲すめり
金藏菩薩の琴の音は
四十二門と音彈ず
衆寶菩薩の琵琶の曲
元品無明と彈きならす
陀羅尼菩薩の舞の袖
下化衆生と飜へす
獅子吼菩薩の亂拍子
上求菩提と踏み鳴らす
虛空藏菩薩の羯鼓には
第一義諦の響きあり
山海菩薩の和琴は
萬行六度と打ちならす
華嚴菩薩の笙の音は

寂性眞如の聲澄めり
寶月菩薩の鉢の音は
十八不共の響きあり
宿王菩薩のかん弓は
八聖道を音彈し
無邊菩薩の尺八は
四向四果と音を出す
寶性菩薩の銼の音
皆大歡喜と打ちならす
金剛菩薩の燒香爐は
天地四界に匂ひけり
月光菩薩の洒水は
法界心にうちそゝぐ
蓮華菩薩の寶華は
虛空界會に散亂す
無心菩薩の伽陀音は
妄想凡夫の眠覺む
思へば〳〵彌陀尊の
利益に增さる事ぞなし
廣大無邊の御恩德
何の世にかは報ずべき
必ず本願たがひなく
來迎引接垂れ玉へ

四九　因果和讃

南無や本師の釋迦如來
五濁惡世に出現し
說法波羅那にし玉へり
其時御弟子の阿難尊
善惡苦樂の其故に
未來末世の我等まで
一一知しめ給はんと
問ひつこたへつ因果經
今此の經を和讃とす
後世の菩提を願ふ人
老若男女もろともに
唱へて我身にひきくらべて
因果の道理を辨へ
佛道修行を致すべし
現在諸人の有樣は
皆これ過去の報なり
六根器量のよき人は
忍辱柔和の果報なり
生れ醜きそのものは
腹を立てたる其のむくひ
貧乏無福に生るゝは
慳貪邪見のそのしるし
啞聾となるものは
佛法謗つた過とかや
命も短く子もなきは
殺生したる報ひなり
子供男女の榮えるは
物の命を救ふゆゑ
長命無病の其人は

慈悲心深き恵みなり
福徳圓滿なる家は
三寶供養の善根よ
利根發明すぐるゝは
念佛誦經の功徳なり
愚鈍で無智なる其の者は
畜生變化の者ぞかし
下劣で人に使はるは
債(おひめ)をきたる報ひなり
業病惡病わづらふは
破戒で三寶謗る咎
口中臭く劣なるは
惡口兩舌人事よ
眼病いろ〳〵病む人は
佛に燈明をしむ故
下賤で人に愧かくは
憍慢懈怠の心より
高位高官備はるは
禮拜恭敬其の功徳
五逆十惡造るれば
無間三十六地藏
此經聽いてあらためば
卽ち菩薩よ佛なり
是は過去にて現在に
植ゑれば未來の種となる
蓮を植ゑれば蓮の花
看よ極樂に九品まで
因果の道理明らかに
佛は嘘はなきものぞ
ただ一向に疑はず
南無阿彌陀佛と信ずべし

五〇　石女地獄和讃

あら恐ろしや石女(うまづめ)の
苦み語らんやうもなし
阿房羅刹の鬼共が
劍の山に追ひのほせ
獨りは西へ行けといひ
獨りは東へ行けといふ
西へ行かんと欲すれば
東へ歩めと責めるなり
餘り事の苦しさに
暫し絶えいる其內に
又もや鬼が現はれて
糸竹籤へ向はせて
竹の根を掘れ根を掘れと
燈心持たせ責めるなり
娑婆にて二人になるならば
斯る苦患は無きものを
譬へ糸竹の根を掘るも
我子と二人で掘るならば
此の悲しみはあるまじに
丈なる髮を切ほどき
竹の根本に卷きつけて

引けどしやくれど何(いか)な事
根は搖がねど髮は拔け
拔ける苦しみ血の涙
石女地獄は愚かなり
無間三十六地獄
中にも苦しき血の池は
言葉も更なる有樣を
助け給へや阿彌陀佛
南無阿彌陀佛阿彌陀佛

五一　女人往生和讃

抑々女人の苦しみは
後生の山も高ければ
三從の海も深くして
高野のごとく山々も
一足にても登りえず
身の浮雲に誘はれて
月の障りとなる時は
苦しや七日の責ぞかし
さすれば汚れの品々も
塵に交り火にくばり
淨き川にて洗うては
水神火神を汚すなり
其の流をば汲みあてゝ
神や佛にたてまつり
其の罪卽ち身にむくひ
血盆地獄へおちるなり
堅橫共に望むれば
八萬四千由旬なり
血池(ちいけ)の中に落ち入りて
日々苦しみ受けるとき
髮は浮草身はしづみ
浮つ沈みつする中に
其の血を呑む事限りなし
悲しさ云ん方もなし
斯る難儀に是だけの
世々の佛の御誓
様々なれど悲しきは
女人を救ふ願なきを
阿彌陀如來の其の昔
われ佛となるならば
女人の罪も救はんと
五劫に思惟をこめ玉ふ
誓ひ空しくならずして
五七の願を御成就
西方淨土に安住し
我等ごときの罪人を
御身にかへて助けんと
無量の功徳を御名ごめ
此の御名を唱ふる者あらば
一文不知の愚鈍でも
尼入道のともがらも
往生させん願なれば
女人罪人おろかなり
南無阿彌陀佛

五二　曼陀羅供略和讃

発端　南無阿彌陀佛もろともに
歸りなん去來極樂の
花のうてなの曼陀羅は
本覺眞如の故郷なり
其濫觴は日の本の

緣起　人王四十七代に
あたらせ給ふ一人を
大炊の帝と申しけり
時の大臣横萩の
豐成公の御息女
中將の局出家して
法如比丘尼と申しける
御年すでに十七歲
當麻の寺に籠り居て
眞の彌陀を拜せんと
願を起し誓を立て

大意　稱讃經を書寫せらる
佛所護念のちからにて
天平寶字七年に
六月二十三日の
夜半に感得し給へば
當麻の曼陀と申すなり
化尼はすなはち極樂の
阿彌陀如來の化身にて
惡世の女人をひかんため
假初ながら罪ふかき
比丘尼に樣を變へ給ふ
大悲の程ぞ不思議なり
觀音菩薩は織女にて
蓮糸をくりて繒とし
一夜三時に織りたまふ
三國無雙の靈像なり
西方淨土に緣ふかき
肉眼無證の人をして
但受諸樂の境界を
娑婆に居ながら拜せしめ
見聞信受のともがらに
求生の因を植ゑさせて
欣樂無爲の安心を
決定せしむる方便なり

三緣　右の緣には天竺の
王舍城にて釋迦大師
觀經說會の有樣を
織り顯して證據とし
鷲入火宅の門内に
提婆達は飛行して
身上出火の變をなし
阿闍世太子を感ぜしむ
冠匆威儀をととのへて
尊者を殿に請じ入れ
師檀の契約なしてのち
御父頻婆沙羅王を
七重室に籠むるゆゑ
不孝の起惡露顯せり
番兵諸臣を制すれば
供御を進むる人もなし
國大夫人身をきよめ
最期の龍顏拜むとて
乾酪蘇蜜を上げたまふ
口を漱ぎてたちまちに
耆闍に向ひて合掌し
受戒の請をなしたまふ
目連神通不思議ゆゑ
八齋戒をさづけゝる
釋尊父王を哀みて
富樓那尊者を遣はして
自業自得の來緣を
すゝめ給へば大王も
滾受領納ましまして
顏色和悅し給へり

太子白馬に鞭をうち
父王の安否を問ひ給ふ
御母夫人の奉食を
逆鱗ありて僧をめき
邪見の劍を手に提けて
既に害母に及びしを
月光耆婆の二大臣
顏を犯して諫むれば
劍は匣にかへれども
玉殿ふかく閉ぢられて
内官重き勅をうけ
不令復出を守るゆゑ
夫人愁憂に憔悴し
佛を請ずる由もなく
目連阿難を乞ひうけて
釋迦牟尼佛の傳說を
聽受のために稽首して
いまだ禮頭を擧げざるに
佛は耆闍を化沒して
夫人の前に出でたまふ
目連阿難護世諸天
影向供奉の儀式なり
夫人裝束ぬぎ捨てゝ
五體を投けて吾むかし
何なる罪の報にて
惡子を生みし因緣と
提婆達多の惡緣を
聞かまほしとぞ宣べ給ふ
佛默してましませば
厭離穢土の意にて
不樂閻浮とのたまへば
欣求淨土の思あり
佛頂金臺五色にて
十方淨土を影現し
隨心自選の施設にて
夫人の願生極樂の

思惟正受の清觀に
世尊も微笑ましまさば
散善自開の本懷に
阿難傳持の座具をのべ
目連證誠ましませば
佛は耆闍に還御ある
靈山一會の聲聞も
一千二百五十あり
三萬二千の菩薩達
禮佛而退の儀式なり
左の緣に十三段
定善修業のあらましは
方處を示す日想觀
業障識知の色は雲
經釋變相符合して
末世の疑ひ斷ちたまふ
水想觀の浪のうね
觀心凝定の氷想は
瑠璃地の底も輝きて
地上虛空の障りなし
觀成所見の表示には
韋提ひとりを織り給ふ
寶樹寶地寶樓は
共同更用の通依報
華座一觀はとりわけて
願力所成の臺なり
正報都見の方便は
形像觀をのべらるゝ
三尊一化を織り分けて
佛身觀の印相に
りすの草莖見えねども
廢立爲政の習ひなり
觀音擧身の光外に
六趣所現を織り出し
天冠一立化佛には
念報慈忍を顯せり

勢至菩薩の寶瓶は
本師の仕儀を助け給ふ
念佛衆生の照益を
光氣五色に織り給ふ
普觀行者の影現は
思惟の坪にあらざれば
娑婆に念佛する人も
聖衆の數に入りぬべし
雜想觀の三尊は
別機のために開觀し
當機韋提の目前に
觀心凝定の石形を
織り顯はして定散の
得受を示す變相なり
下の緣には散善義
九品の行果を織り給ふ
隨自意隨他の開閉は
廢立爲政の賢たり

一身專稱彌陀名號
三佛大悲の至極なり
上上品の讀誦には
諸大乘經の嫌ひなく
上中解義の悟には
無相理觀を簡別し
上品下生の菩提心
願のみありて行はなし
中上中品聲聞戒
轉向大乘たのみあり
中下の世善孝養も
回向願求の夕あり
下上十惡中破戒
一聲稱念罪皆除
極重惡の下々品は
五逆十惡具諸不善
十念具足の息風に
金蓮夕日に輝きて

一池渠旨

中臺五會の始には
百寶池渠を顯はせり
行者の障りつきぬれば
耳目精明金姿の相
新生舊住の差別なく
初生舞樂の亭には
開花三昧よろこびて
觀音勢至天童子
歡喜踊躍の樂をなし
大悲の安慰限りなく
生死解脫をよろこべり
橋を渡れば相迎會
化鳥數々舞遊ぶ
父子相見の渴仰に
歡喜の涙とゞまらず
諸行往生障りなく
善惡凡夫をすゝめたり

頭面敬禮ときつつり
娑婆長劫の苦を說けば
大會にひいて傷歎し
常住寶國愁なく
火宅の貪瞋聞かせじと
佛告勅ましませば
合掌悲咽の聲たかく
先亡渡滅に再會す
左右の隅に片よりて
男女のかたち織ることは
暫時化相のすがたにて
垢凡の女質なけれども
女人攝取の本願を
示さん爲の施設なり
八功德池の水のいろ
黃金池底を織り給ふ
念佛種子の蓮花には
二人三人托生して

人なき花の限りなく
此華還迎をしめさるゝ
白砂にあそぶ鴛鴦は
宿緣ふかき所表なり
童子竿さす花の船
新生遊戲の利益なり
九品蓮華に額をうち
娑婆因業の手を結び
花合邊地の色相は
實に疑ひの誡なり
もとより信心ある人も
罪障ふかくおもければ
蒼華未出の難におち
三寶不見を歎けども
諸天の樂に彌まさり
一毛髮の苦患なし
上品上生うる人は
金剛臺に座するゆゑ

佛の前に稽首して
花合の障すべてなし
觀音勢至に導かれ
速證佛果の姿なり

二寶樹會　寶樹寶林第二會は
七重行樹操にて
すべて八所に見ゆれども
取わけ樹下の說法は
一佛すでに中座して
新生舊住の六菩薩
說法飡受のありさまは
華嚴會上に殊ならず
一乘究竟の法味には
六識自然の悟りあり
寶樹の中の宮殿は
十方淨土の影現なり
寶樓寶樹の行間に
七寶飛梯の玉の橋

應現自在の莊にと
經行遊履の障りなし

三寶樓會　第三寶樓宮殿に
一重二階の方觀は
高下大小ふりわけて
意樂堂にまかせつゝ
水上虛空に列なりて
起滅自在の國なれば
見佛聞法の道場を
左右に甍を織りわけて
一佛蓮華の座をかざり
皆等作佛の記をさづけ
八九聖衆手をあはせ
供佛の花を盛りさゝげ
中殿二階の上までも
香花を取て招喚せり
歷事供養の朱重殿
うちに正報見えねども

左右願命のになひ花
供養營事の姿なり
飛降の天人葉花をとり
定散自在にとび給ふ
說法集會の講堂は
香花の風に飛ぶひかり
寶樹に和して蓋となり
左右九菩薩恰好し
或座或立ゆきかへり
樹下聞法のすがたなり
飛降の天人顧面して
他方供養の現相なり
讀誦經典戶をとぢて
寂寞無人の有樣を
心靜かに織り出し
色の經卷なけれども
隨意自在の國なれば
經藏所現と拜すべし

聖衆去來の進上殿
主宰なければ往復り
驛舍のごとく開避して
自國他方の障りなし
七寶鉢器の食堂に
禪三昧を飡受して
般若のかわき思ひなく
無生念食上をたち
百味甘露のそなへ物
香を聞き色を見てたりぬ
自國新舊他方來
飛降の天も飽滿す
橫樓閣の中の橋
一佛一童六菩薩
採華供養を顯はして
隨緣利益を示さるゝ
葬地のまるき六面塔
蓮花寶珠の三重輪

法界種相の塔中に
一佛二聖坐する事
行體行相具足して
塔につきての口傳なり
左右にわたる反橋は
觀音勢至を顯はして
當體不離の佛德を
示し給へる變相なり
歡喜踊躍の道場は
各奏伎樂のうてなにて
歌舞囃音の亂拍子
定惠の袖をひるがへし
笛音琵琶の撥の音
定散自在の調べなり
飛檐につりし鈴鐸は
風に動きて商鳴す
左右にかよふ玉の橋
菩薩佛に隨從して

造像功德をすゝむれば
眞假無二の姿なり
道噙がつくる木佛は
光をはなちて空にとび
志法がうつす眞容は
畫像のまゝにて來迎す
左右閉戸の二階殿
念佛定の砌りにて
恒沙の聖衆坐をつらね
智力を盡して專注す
閣前寶階經行の
菩薩沙門の粧ひは
無數の聲聞轉向して
大乘一味の悟りなり
形は剃髮染衣の僧
因果の姿を顯して
爲事の不愁の粧ひは
出家の德の樂しめり

四無生會

中台中心無生會は
十劫覺座の處なり
淨土は無生の國なれど
當代無二の第四會に
究竟解脫は菩薩達
威儀を調へ坐し給ふ
右は勢至を上首とし
十八尊のはじまりは
中尊下坐の前にあり
左は合掌右にむき
蹈跪の菩薩を始として
觀音菩薩に讀みとゝむ
三十六尊優劣なく
六識自爾の境界を
口稱六字の一印に
習ひ極めて拜すべし

本願花王のうてなには
八萬四子の座をかざり
百寶種色の光明は
空に變じて利益あり
如意珠は無漏の表示にて
四柱の寶幢かゝやきぬ
別して高き三尊の
うてなの品は七九重
主從三尊恰好し
本師の化儀を助け給ふ
法王阿彌陀の光明は
十方世界をてらせども
攝取のちかひ一筋に
念佛衆生を捨て給はず
身は黃金の高き山
面相一入やはらかに
螺髮肉髻を卷き籠めて
毫光ことにかゝやきぬ

胸に和らぐ萬字の相
御足の裏の輪文に
光氣を縊むる御手の內
三身具足の印をなし
左は法報自證なり
右は應身慈悲の印
風空二指を結ぶ事
來迎赴機の姿なり
瑠璃壇上の十寶幢
地下映徹を示さんため
蓮花の上の傘幢は
瑠璃の地上を擊ぐなり
光明空に立ちのぼり
虛空無邊に變化せり

五虛空會

中央第五の虛空會に
光雲或合或離して
觀音勢至の寶蓋を
かゝやき徹して殊勝なり

本より光台五色にて
三樓閣をあらはせり
一佛二聖の御後に
隨緣衆生の影を織り
側塞空の說法を
浪受領納するかたち
中尊うしろの光明は
佛頂妙花を覆蓋して
種光異變の花の輪
寶珠をもつて莊嚴せり
本願不思議の施設にて
道場樹光を顯はす事
六根淨の結緣に
皆得無生の悟りあり
光輪一級右ひだり
赤色光の開花あり
中央光台右ひだり
寶階飛悌を出現し

台上二重の寶塔は
寶珠をもつて蓋となし
正面坐像の三尊は
悲智平等の姿なり
塔外左右の二菩薩は
新生供養を顯はせり
左右寶階二重塔
正面坐像の一佛は
遍照無導の自體にて
十方來者違脊なし
塔外往來の四菩薩は
自國他方の供相なり
盛花衣裓の二菩薩を
他方供養に擬し給ふ
玉の幢さす二菩薩は
自國供養のすがたなり
光變寶幢葉花あり
橫笛笙の樂器まで

清風靜かに動かして
空にかゝりて響あり
根本地光開花のうへ
光輪のぼりあつまりて
大壇上の蓮花塔
諸佛の舍利ぞ納むらん
淨土碎骨舍利のこと
應現自在と習ふなり
中央光氣の一佛は
彌陀定印の形なり
中央大壇二重塔
一佛坐して正面なり
惡趣利益の手を垂れて
横超頓斷しめさるゝ
二菩薩坐して相對ひ
寶珠は九輪の蓋として
無垢焔熾の施設こそ
光明攝化の秘牘なり

空正報

虚空飛物いろ〳〵に
依正のすがた雜亂せり
飛騰の童子花をとり
現通飛行の形なり
飛行の天人跪坐の雲
最上飛空の粧ひは
諸聖花報の受樂にて
皆齊天華の供相なり
迦陵頻迦鸚鵡の鳥
白鵠孔雀に至るまで
連聲大悲のさえずりは
珠光變化の所作なれば
實業所生にあらずして
法音宣流の方便なり
化獸は金獅子白象王
着轡の童子鮮かに
化主は蓋下に乘坐して
願生誘引のすがたなり

空依報

一佛四尊の雲の座は
引接迎印和らかに
放光說法かぎりなく
淨土の空に遍滿し
最頂五色の雲のうへ
一佛二聖は來此の相
金剛未敷の手をあわせ
分身無數の加被なれば
現生護念の表相を
影現衆生に示さるゝ
信相信印織り出し
未生凡夫を引たまふ
自然の樂器飛翻して
綾吟箜篌琵琶の撥
鳳音角子音すみて
羯鼓揩鼓鋼拍子
鼗鼗法螺の聲高く
和琴箏琴空にとび

天華變ずる雲のうへ
香焔化鳥むらがりて
正報をつく雲に坐し
乘空無导のすがたなり
寶鑰葉華漂ひて
奇妙難思の莊りなり
虚空ふり花和らかに
雨に喩へて患なし
光澤馨香雜亂なく
色の次第に化沒せり
人天聖衆の經行は
擧足蹈下にさはりなし
虚空標色みだれなく
地大黃色平均に
白色無染の空中は
清淨功德の名を立てゝ
廣濶無邊の表相は
最頂青色かぎりなく

流通分

虚空無邊になぞらへて
無衰無變を顯はせり
中央最上逆蓮華
華藏世界の表示なり
莖上葉下の曼陀羅花
一輪能持の報土なり
廣略相入諸莊嚴
境智不思議に織りとゞむ
末世の疑ひ晴れやすく
緣起を織りて弘通せり
二十一行漢字にて
見聞得益授記せらる

結句

如來巧智の恩德を
報じても猶報ずべし
欣求淨土の本尊は
此曼陀羅にしくはなし
みづから信ずるのみならず
人にをしへてもろともに
歸りなん去來極樂の
華のうてなの曼陀羅を
供養和讃の德により
同得往生さはりなく
引導三有及法界
至心歸命阿彌陀佛

右ノ此和讃武江淺草稱經院ニ曼陀羅供之時雖レ納ニ版於住物一依レ使ニ燒失一今改テ令レ彫ニ書肆一再ヒ印ニ行之一者也

元祿十五壬午年八月　日

一心山院主　聲譽助給謹書

五三　賽の河原地藏和讃

歸命頂禮世の中の
定め難きは無常なり
親に先き立つ有樣に
諸事の哀を止めたり

一つや二つや三つや四つ
十よりうちの幼子が
母の乳房を放れては
賽の河原に集まりて
晝の三時の間には
大石運びて塚をつく
夜の三時の間には
小石を拾ひて塔を積む
一重積んでは父の爲
二重積んでは母の爲
三重積んでは西を向き
樒程なる掌を合せ
鄉里の兄弟我ためと
あら痛はしや幼子は
泣々石を運ぶなり
手足は石に擦れたゞれ
指より出づる血の滴
體を朱に染めなして

父上こひし母戀しと
たゞ父母の事ばかり
云うては其儘打伏して
さも苦しげに歎くなり
あら怖しや獄卒が
鏡照日のまなこにて
幼き者を瞰みつけ
汝らがつむ塔は
歪みがちにて見苦しし
斯ては功德になり難し
疾々是を積直し
成佛願へと呵りつゝ
鐵の榜笞を振揚げて
塔を殘らず打散らす
あら痛しや幼な子は
叉打伏して泣叫び
呵責に墮ぞ無かりける
罪は我人あるなれど

ことに子供の罪科は
母の胎内十月のうち
苦痛さまざま生れ出で
三年五年七年を
繩か一期に先立つて
父母に歎きをかくる事
第一重き罪ぞかし
母の乳房に取りついて
乳の出でざる其時は
せまりて胸を打叩く
母はこれを忍べども
などて報の無かるべき
胸を叩くその音は
捺落の底に鳴響く
修羅の皷と聞ゆなり
父の涙は火の雨と
なりて其身に降懸り
母の涙は氷となりて

其身を閉づる歎きこそ
子故の闇の呵責なり
斯る罪科のある故に
賽の河原に迷來て
長き苦患を受くるとよ
河原の中に流あり
娑婆にて歎く父母の
一念とゞきて影寫ればなう懷しの父母や
飢を救ひてたび給へと
乳房を慕ふて這寄れば
影は忽ち消え失せて
水は炎と燃えあがり
其身を焦して倒れつゝ
絕入る事は數知らず
中にも賢き子供は
色能き花を手折きて
地藏菩薩に奉り

誓時呵責を免れんと
喚き亂れたる大木に
登るとすれど情なや
幼き者のことなれば
踏み流しては彼此の
荊棘の棘に身を刺され
凡て鮮血に染まりつゝ
漸く花を手折り來て
佛の前に奉る
中に這出る子供等は
胞衣を頭に被りつゝ
花折ることも叶はねば
河原に捨てたる枯花を
口にくはへて痛はしや
佛の前に這行きて
地藏菩薩に奉り
錫杖法衣に取付いて
助け給へと願ふなり

生死流轉を離れなば
六趣輪回の苦みは
唯是のみに限らねど
長夜の眠り深ければ
夢の驚くこともなし
唯ねがはくば地藏尊
迷ひを導き給へかし

五四　賽の河原地和讃

歸命頂禮地藏尊
此は此世の事ならず
死出の山路の裾野なる
賽の河原の物がたり
聞くにつけても哀れなり
二つや三つや六つ七つ
十よりしたの幼兒が
賽の河原に集りて
西に向ひて父こひし

東を見ては母こひし
こひし〳〵と泣く聲は
此世の聲とは事變り
悲しさ骨身を通すなり
此世に殘りし幼兒は
母の添寢に幾度の
乳を飲まするのみならず
荒き風にも當てじとて
綾や錦に身をまとひ
其の慈しみ淺からず
然るに冥土の幼兒は
雨の降る日は雨に濡れ
雪降る其日は雪中に
凍えて皆々悲しめど
娑婆と異ひて誰一人
憐む人があらずなの
上にあつまる幼兒は
小石小石を持ち運び
之にて廻向の塔を積む
一重積んでは幼兒が
紅葉のやうな手を合せ
父上菩提と伏し拜む
二重積んでは手を合し
母上菩提を廻向する
三重積んでは古里に
殘る兄弟わが爲めと
晝は各々あそべども
日の入相の其頃に
地獄の鬼が現れて
幼きもの〻傍(そば)により
やれ汝等は何をする
娑婆と思うて甘へるな
こゝは冥土の旅なるぞ
娑婆に殘りし父母は
追善供養は兎に角も
只明け暮れに汝等の

形身に殘せし手遊や
太鼓人形かざぐるま
着類を見ては二親が
酷(むご)や可愛や不憫やと
親の歎きは汝等の
責苦を受くる種となる
必ず我を恨むなと
云ひつゝ金棒さし延ばし
積みたる塔をば押崩す
やれ恐しやと幼兒が
南や北や西ひがし
こけつまろびつ逃廻る
なほも獄卒鐵棒を
振翳しつゝ無慚にも
數多の幼兒睨み付け
既に打たんとする時に
幼兒恐さ遣る瀬無く
各々優しき手を合せ
許し給へと泣き拜む
拜めど無慈悲の鬼なれば
取り付く幼兒撥除けて
汝等罪なく思ふかよ
娑婆にありし其時に
母の乳房が出でざれば
泣く〳〵胸を打つ時は
天地那落へ響くなり
過去の罪科(つみとが)ある故に
責苦を受くると思ふべし
云ひつゝ又もや打たんとす
やれ怖しやと幼兒が
兩手合して伏拜み
許し給へと泣き叫ぶ
峰の嵐がきこゆれば
父かと思うて馳上り
邊(あたり)を見れども父は來ず
谷の流の音すれば
母が呼ぶかと喜びて
こけつ轉びつ馳せ下り
邊を見れども母はなし
幼兒あはれ聲を揚げ
なう父上は在さぬか
此世の親を冥土より
慕ひ焦るゝ不憫さよ
泣々其場に打ち倒れ
砂を褥の石まくら
泣々寢入る不憫さよ
されども川原の事なれば
小夜吹く風が身に泌みて
又もや一度目を覺し
父上なつかし母ゆかし
これが子供の一念ぞ
折しも西の谷間より
能化の地藏大菩薩
右に如意寶の玉を持ち
左は錫杖つきたまひ
動(ゆる)ぎ出させ給ひつゝ
幼きもの〻傍により
あはれ不憫の幼兒よ
汝等いのち短くて
冥土の旅に來るなり
娑婆と冥土は程遠し
いつ迄親を慕ふとも
娑婆の親には會へぬぞよ
今日より後は我をこそ
冥土の親と思ふべし
幼なきものを御衣の
袖や裾にだき入れて
憐み給ふぞ有難や
いまだ歩まぬ幼兒を
錫杖の柄にと取付かし
忍辱(にんにく)慈悲の御肌に

泣く幼兒を抱き上げ
摩で擦りては地藏尊
あつき恵の御涙
袈裟や衣にしたへつゝ
助け給ふぞ有難や
大慈大悲の深きこと
地藏菩薩に如くはなし
之を思へば皆人よ
何程三子の靈とても
念佛供養おこたらず
朝な夕なに怠らず

五五　中將姫號法如和讃

仰いで淨土の曼荼羅の
謂れを略尋ぬれば
人皇四十六代の
孝謙天皇の御時に
右大臣横萩の
豊成卿の御女
中將姫と申せしは
容顏美麗に名も高き
年は三年の御時に
母におくれて繼母の
御手に育ちたまひしが
十三歳の春のころ
繼母君のたくみにて
雲雀山にぞ捨て玉ふ
され共中將姫君は
母をうらむ念なく
大慈大悲の慈悲深く
母やわが身の爲にとて
稱讃淨土の經を讀み
彌陀の名號怠らず
つとめ給ふぞ殊勝なる
十六歳の御時に
奈良の都へ歸りても
出家の願ひ深くして
當麻寺にぞ入り玉ふ
黒の衣に身をやつし
名をぞ法如と付け給ふ
極樂淨土聖身の
阿彌陀如來を拜まんと
願ひ玉へばありがたや
彌陀の菩薩が顯れて
中將法如諸共に
壹丈五尺の曼荼羅に
九品淨土を顯して
極樂界の有樣を
蓮の糸にて織りたまひ
未世に殘しおきたまふ
中將法如そののちに
愈々念佛おこたらず
寶龜六年三月の
中の四日の午の刻

御年二十九歳にて
西に向ひて手を合せ
大往生を遂けたまふ
その時紫雲たなびきて
音樂虚空に響きつゝ
佛の來迎したまひて
迎へたまふぞ有難き
これをおもへば念佛を
うたがふ人は愚なり
起き臥し起居の分ちなく
助けたまへや阿彌陀佛
たゞ一筋に唱ふべし

五六　中將姫和讃

歸命當麻の曼荼羅は
本覺眞如の都なり
時の大臣横萩の
豊成卿の御姫
中將姫と申せしは
正觀音の化身なり
御年五つの夏のころ
實の母君過ぎたまひ
あじきなき世の有樣は
いとゞ憐のをりからに
三年越えたる春よりも
照手の前に付きたまふ
いかなる前世の惡緣か
繼母の讒言淺からず
毒酒をあたへ殺さんと
因果はまはる火の車
銚子の口をとりちがへ
計らず實子に與へけり
忽ちその色かはりける
目に見る前の苦しみは
親の手づから子を害す
親は鬼神で子は佛
豊壽丸こそいたはしや
それより惡心猶つのり
罪なき人に難をかけ
荒き仕置のその中に
鳥も通はぬ紀の國の
雲雀山にぞ捨てられて
おんいたはしの姫君は
昨日の住家と事かはり
西も東も辨ちなく
草の庵もあらざれば
起き臥し辛き山中に
都の空ぞなつかしや
木の實を拾ひて食となし
有爲轉變と斷念めて
先立ちたまふ母君の
菩提のために朝夕は
まさに三經讀誦なし
日夜と變れど懈怠なく

五七　俊寛和讃

歸命頂禮そのむかし
筑紫の果の薩摩潟
人の往來の途絶えたる
鬼界が島の荒磯に
流されたまひし人々は
少將成經檢非違使の
入道康賴いま一人
俊寛僧都の三人なり
憂き艱難を荒磯に
打寄る浪に袖しぼり
淚に月日を送らるゝ
或日はからず大赦の
恩命にわかに下りきて
三人ひとしく磯のうへ
勅使のまへに跪まづき
うや〳〵しくも令狀を
おし戴きて成經は
淚に聲もふるはしつ
讀上け來るおもむきは
中宮御產の御祈禱に
成經康賴赦免さるゝ
されど俊寛たゞ一人
赦免に漏れて殘れとの
御諚を聞いて僧都には
我破と計りに磯に伏し
聲を放ちて泣きたまふ
噫如何なれば我のみは
惠みの露にぬれかねて
濡れるは袖と袂のみ
宿世如何なる罪業ぞ
三人一所にありてすら
いと恐しく凄じき
荒磯島のたゞ一人
梶の絕えたる捨小舟

念佛三昧なしたまふ
十七歳の秋のころ
當麻山にぞ行きたまひ
綠の黑髮切りすてゝ
墨の衣に身をやつし
法如比丘尼と改めて
金剛羅綾の振袖も
今は衣と召更へて
衆生濟度のその爲に
蓮をあつめて糸をとり
極樂淨土の曼荼羅を
一夜の內にぞ織り玉ふ
皆これ彌陀の利益にて
娑婆の輪廻を顯せし
二十九歳の中の春
大往生を遂げたまひ
日本ばかりか異國まで
類ひ無き身ぞ有難き
いつかはならん浪藻屑
なけく甲斐とて渚なる
千鳥と共に鳴くばかり
偖ても時刻は移りきて
楫子の人にせきたてられ
名殘は更につきねども
夜の衾を成經が
法華經一卷康賴が
ともに形見を殘しつゝ
船に乘らんとし玉ふを
俊寛袂に縋りつく
使者は聲を荒らゝげて
叱はぬならぬと叱りつけ
僧都を打たんと爲しけれど
猶も綱にとすがりつく
楫子は手荒く僧都をば
渚のかたにおし倒し
船は次第に沖のかた
返す模樣も非ざれば
渚に伏して俊寛は
過ぎし昔の小夜姫が
石になりたる故事も
斯る歎きにありつらめ
しばしが程は俊寛が
人の心持はあらざれば
時經て沖を眺むるに
船はかすかに人のかけ
消えて見えなくなりにけり
南無阿彌陀佛

五八　敦盛卿和讃

祇園精舍の鐘の音は
諸行無常を告ぐるとよ
さても源平此の度の
一の谷なる合戰に
平家武者はさん〴〵に
源氏のために敗られて
秋の木の葉の散る如く
あるひは討たれ或はまた
捕虜となるも多かるに
こゝに哀れを止めしは
平家方にて母衣つくる
大將方のその一人
無官の太夫に在する
敦盛卿と申さるゝ
御年わづかに二八なる
花の蕾の紅の顏
未だ總角の若武者よ
敦盛其の日の扮裝は
平素に勝れて花やかに
からくれなゐの肌着して
秋草染めし練絹の
御直垂を召されたる
上に着けたる御鎧

萌黄縅のはれやかさ
鍬形打ちし兜をば
猪首にかぶり緒を締めて
鎌倉作り金銀を
ちりばめ飾る細太刀を
佩かせ給ひて箙の
弓を御手にもたれつゝ
連銭葦毛の逸物に
梨地蒔繪の鞍置きて
ゆらりとばかり跨れる
御容いとゞ勇ましく
須磨の磯邊にたち出でて
父経盛の召されたる
御座船さして御駒を
波に乗り入れ玉ひしが
後に呼ばはる熊谷に
呼びもどされて直實と
打物とつて渡り合ひ
幌掛武者を見るよりも
はらりと開けば五本骨
日の丸打つたる扇子にて
やあ〳〵それに打たせ玉ふ
は平家の御公達と
見奉りぬまさなうも
敵に後を見せたまふか
引かへして勝負あれ
かく申すそれがしは
源氏方でかくれなき
しの黨の旗頭
熊谷の次郎丹治直實
見参〳〵と
聲かけられて敦盛は
何か猶豫のあるべきぞ
駒を返して近寄れば
熊谷次郎も進みより
互ひに打ち物抜きかざし

御痛はしや敦盛は
終に果敢なく打たれたり
然れど熊谷舊恩を
忘れぬまゝに弓矢をば
棄てゝ髪を剃しつゝ
都をさして走せのぼり
身は黒谷の上人の
御弟子となりし直實は
名をば蓮生と改めて
わが手にかけし敦盛の
菩提の爲めに姿變へ
訪ひ吊ふぞ殊勝なる

五九　一の谷組打和讃

須磨の浦邊の戰ひに
平家の一門ことゞく
御船にめされて海上を
遙にこぎだし玉ひけり
爰に哀をとゞめしは
經盛公の御末子
敦盛公の身のうへぞ
青葉の笛を須磨寺に
尋ね出してやう〳〵に
駒を渚に進むれば
はや御座船も兵船も
殘らず沖へ漕ぎいだす
乘りおくれたが口惜や
詮方浪に駒を入れ
浪にゆられて漂へり
かゝる折しも後より
熊谷次郎直實は
彼方此方を驅廻り
敵將あらば引き組んで
高名手柄を致さんと
浦邊をさして出でければ
はるか向ふの海上に
熊谷次郎は聲をかけ
いかに若君聞きたまへ
御運きはまるこのうへは
御名を名乘り熊谷に
手柄を讓り玉へかし
尋ねに敦盛優けに
名乘るまじとは思へども
いまは何をか包むまじ
我こそ平家に隱れなき
無官の太夫敦盛と
名乘りたまへば熊谷は
我子の事を思ひやり
御心感じたまひつゝ
人間界に生れきて
子を思ふ身は皆一つ
南天竺は摩訶陀國
釋迦牟尼世尊の古は
上梵王の御子にて

丁々撥し丁撥し
撥つては外しの早業や
陽に開けば陰に閉ぢ
勝負もはてしあらざれば
いざや組まんと敦盛は
打物なげ捨て玉ひけり
げにしほらしと熊谷も
肩押並べむづとくむ
ゑいや〳〵の聲のうち
互ひに鐙を踏み外し
兩馬が間にどうと落つ
すはやと見る間に熊谷は
敦盛卿を組伏せて
能々御面見上ぐれば
年は二八の若武者で
綠の眉墨こまやかに
口には丹花を含みつゝ
芙蓉も猶む風情なり

悉達太子と申せしが
娑婆の無常を感じつゝ
王宮出でさせ玉ふとき
羅睺羅を哀み玉ひしと
未の世までも云ひ傳ふ
頃は十月十五日
檀特山へ登られて
勤苦六年したまふも
衆生濟度の爲ぞかし
かゝる貴き御佛も
御子を憐みたまふなり
序下薄地の凡夫にて
郭盛卿の御心
思ひやられて熊谷は
悲歎の涙にくれけるが
何思ひけん引き起し
鎧の塵を打拂ひ
あたりに敵もあらざらん
早落ちたまへと勸めけり
左右に分るゝ折からに
後の山より聲をかけ
熊谷こそは貳心
平家の大將敦盛を
組敷きながら助けるは
君に二張の弓をひく
熊谷諸共打取れと
呼ばるゝ聲に默然と
思案の內に敦盛は
いかに熊谷よくも聞け
爰は汝が情にて
首尾よく逃れ出づるとも
また行く先に敵ありて
名も無き者の手に掛り
空しくなるも末代の
恥辱となれば今こゝで
我を討ちとり亡跡の

回向をたのむ熊谷と
西に向ひて手を合せ
首さし延べて待ちたまふ
是非も泣く〳〵敦盛の
今は後へたちまはり
口に稱名目に淚
彌陀の利劍と觀念し
首は前にぞ落ちにける
打ち奉りしその日より
都をさして登らるゝ
身を黑谷の上人に
法を授かり弟子となり
蓮生法師とあらためて
剃髮なさるゝその時は
四方淨土と剃りこぼす
昨日の鎧にことかはり
墨の衣に墨の袈裟
手には念珠を携へて
朝夕唱ふる念佛も
敦盛卿の御爲と
唱へ玉ふぞありがたや

六〇　道成寺清姬和讃

歸命頂禮そのむかし
眞名子の庄司と呼ばれたる
紀州において名も高き
弓取る家の愛娘
姿容も清姬と
その名を呼べる女なり
戀の暗路に踏み入りて
熊野參りの安珍と
その名を申す若者の
妙なる姿に思込め
ふかく迷ひて慕ひつゝ
一夜の情に濡れなんと
胸に燃えたつ煩惱の
炎身をばこがしつゝ
口說けど泣けど安珍は
縋る袖をば無情なくも
振り切り拂ひ聞き容れず
かゝる處に長居せば
身の爲ならずと夜に紛れ
安珍家を脫け出でゝ
道成寺へぞ至りつゝ
事の由をばうち語り
鐘の中へぞ隱れたる
清姬かくと知るよりも
心も身をも狂ひ出し
恨みを言はんと思へども
中を隔つる日高川
わたす渡しのあらざれば
しばし川邊に泣き倒れ
果てしもこゝにあらざれば
終にも心をきはめつゝ
たとへ藻屑と化するとも
今にぞ思ひを知らせんと
ざんぶと川に跳り入る
あゝおそろしや一念の
大蛇となりて道成寺
いつの間にかは飛行つて
安珍隱れし釣鐘を
七卷半ぞ卷きければ
瞋恚の炎燃えそめて
さしもに堅き釣鐘も
熔くるばかりの苦しみに
あらあさましや安珍も
ともに蛇道に落ち玉ひ
浮ぶせも無き魔界へと
しづみけるをば御佛の
廣大無邊の御功力
尊き御僧の讀經に
ともに成佛遂げたるは

末世の今日に至るまで
殘る話の因果なり
今に御寺も殘りけり

六一　苅萱道心和讃

筑前筑後肥前肥後
大隅薩摩で六ケ國
探題守護を司どる
文武二道に秀でたる
加藤左衞門重氏は
嫉妬の念とぞ知り玉ひ
無常菩提の道に入り
古郷に妻や殘し置き
直ちに國位をふり捨てて
高野山へと入りたまふ
御臺千里は體内に
石童丸を宿しつゝ
程なく安産ましまして

十三年がその間
重氏公が御行衞
尋ね玉へど知れざれば
石童十三の秋の頃
父は高野と夢の告
爰にあはれを止めしは
母もろともに石童は
父重氏の跡を追ひ
高野山へと尋ね行き
はるかに見ゆる立札は
弘法大師の誡めに
女人禁制したまへば
哀れなるかなこの山は
親子を隔つ女人堂
母を驚の學文路宿
茶屋の玉屋に預け置き
石童丸はたゞ一人
九百九十の寺々を

日毎に尋ねたまへども
おほしき人は更になし
日數をつもるそのうちに
母の千里は女氣の
便り無き身の悲しさに
無常の風にさそはれて
終に空しくなりたまひ
猶いやましの石童は
父にははやく生き別れ
またもや母に死に別れ
いとゞ哀れの增かゞみ
忽ち心もかきくもり
涙に迷る道芝も
空に知られぬ夕時雨
若君歎きのうちよりも
責めて父にぞ廻りあひ
親子の對面いたさんと
またも高野へ登られて

無明の橋にさしかゝり
迎ひにきたる御僧は
吾父上とも吾兒とも
知らねど更に立ちどまり
見上げつ見下す顏と顏
たちまち吹來る川風に
石童丸の振り袖と
苅萱殿の長袖と
縋れあうたる恩愛に
親子の緣とぞ知られける
石童知らずに苅萱の
袂をひかへて尋ねけり
如何に御僧聞きたまへ
吾父上は苅萱の
城を見捨てゝ此の山の
今道心とぞ成りたまふ
御存知あらば敎へてと
尋ぬる顏をすかし見て

懷出せば十三年
過ぎし昔の事なるが
國に殘せし左腹
若しや男子にあるならば
年はも同じ此の兒と
猶もよくゝうち眺め
俗も不思議やこの兒が
腰に差したる小脇差
鞘は朱鞘で消叩き
目貫は孔雀の一つ羽
中身は何か知らねども
彼こそ加藤を名乘る時
頂戴いたせし小脇差
わが子と知れど佛門の
佛の誓ひを破らんと
その時苅萱兩眼に
涙を浮べたまひつゝ

それと覺しき人もなし
口にはいへど心には
我を慕ふて尋ねくる
可愛の者や不便やと
云はねど先に石童は
父上なりと知りたまひ
いかに御僧故なきに
歎かせ玉ふはいぶかしく
父上ならば片時も
早く名乘りたまふべし
御僧涙を隱しつゝ
われは筑紫の者ならず
抑々この山谷多く
數多の人のその中に
尋ね玉へど誰知らず
尋ね甲斐なき事ぞかし
歸らせたまへ御兒と
見捨てて行くを引とゞめ

さらば御僧聞きたまへ
かく孤子となるうへに
今日より後は思ひ止め
父を尋ぬる心なし
なにとぞ我を御僧の
御弟子となして玉はれと
親子諸共山に入り
師匠と弟子の名乗りして
命の終りに至るまで
親子と名乗り玉はねど
親も地藏の化身にて
又子も地藏の化身なり
いま猶昔の物語り
信濃の國に隱れなき
川中島の善光寺
音も名高き石童寺
親子地藏と殘りける

六二　梅若丸和讃

歸命頂禮隅田川
梅若丸のいにしへは
吉田少將惟房の
御臺の花子は胎内に
梅若丸を宿しつゝ
ほどなく安産なし玉ひ
夫の少將惟房は
終に空しくならせける
御臺は歎きのその中に
惟房卿の形見とて
老の杖とも柱とも
頼みに思ふ梅若は
荒き風にも言葉にも
當てず養育なされける
梅若七つの春のころ
御父上のそのために

比叡山へぞ登りつゝ
御年十二の季の春
人買藤太に惑はされ
武藏下總境なる
隅田川原へ迷ひ行き
長の旅路の疲れにも
慈悲も情も辨へず
邪見の杖をふりあげて
歩め歩めと責められて
如何なる前世の宿業ぞ
涙に暮れて居たまへば
思はず急所を打擲し
いまをさかりの梅若も
殺され玉ふ是非も無し
母上これを聞くよりも
狂ひ出でさせたまひつゝ
山城大和伊賀河内
國々のこらず尋ね行く
梅若戀しと泣々も
隅田川原へ着きたまひ
墓の標の柳こそ
さては我子の形見かと
その儘そこへ伏し玉ひ
歎かせ玉ふぞ哀れなる
源忠阿闍梨の勸めにて
緑の黒髪切捨てゝ
墨の衣に身をやつし
追善菩提のそのために
一字の御寺を建立し
念佛修行なしたまひ
晝夜に間なく佛前に
泣く〳〵月日を送らるゝ
隅田川原の木母寺と
今に其名も殘りけり

六三　阿波の鳴戸和讃

南無大悲の觀世音
四國德島順禮子
阿波の鳴戸の難澁を
導きたまふぞ有難や
こゝに哀れを止めしは
三つなる歳に父母に
別れて叔母の介抱で
やう〳〵今年九つで
西も東も兩親の
顔も見しらぬ稚子が
戀し床しの一念で
觀音菩薩に誓して
頼みは大悲の妙智力
軒端〳〵に立寄りて
聲もをしまず張上けて
西國第三番紀州紛川寺
父母のめぐみも深き粉川寺
佛の誓ひ頼もしきかな
唱ふる聲の殊勝さに
お弓は報謝いたさんと
見れば背中の笈摺に
阿波と書きたる懐しさ
ことに濁の稚子に
同行二人と記せしは
定めて連衆は親子たち
問はれてお鶴は涙ぐみ
父は阿波の十郎兵衛
母はお弓と申します
如何なる譯かは知らねども
二人の親は三つの歳
行方知れずになり玉ふ
僅なこの世に生れきて
大恩受けし父母の
顔も知らぬは此の世から
無間地獄の責ときく
何とぞ親に逢はんため

觀音大悲にとり縋り
順禮すれども獨旅
留めて下さる人もなし
夜は野に臥し山に臥し
家の軒端に寢るときは
犬に吠えられ追ひ出され
長の旅路を一夜でも
ゆたかに眠ることはなし
いつか二人に廻り逢ひ
よその子供を見るやうに
二人が中に添寢して
父よ母よと云ひたさに
順禮するのでござります
涙ながらに語りける
聞いてお弓はしやくりあげ
さては我子か懐しや
われは尋ぬる母なりと
飛立つやうに思へども
われら二人が身の上は
仔細あるゆゑ包みしが
これが名乘らで居らるべき
名乘るは却て憂き思ひ
名乘らで歸へす悲しさは
死出三途の苦みも
劍の山もおろかなる
他の目からもみ熊野の
那智の御山に響く瀧瀬
悪右衛門にと狩出され

六四　葛の葉和讃

坂命頂禮葛の葉は
こゝに信田の大社にて
住家をいたす白狐
人に勝れて名をのこす
深い謀叛のある故に
その時信田の狐獄
保名を見るより手を合せ
何とぞ命を御救けと
死する命を匿まはれ
夜晝忘れぬ保名様
いつぞや信田で救けられ
それにどこか病氣とは
いま葛の葉と化けて來て
一夜の看病が緣となり
今日も翌日もと日を送り
胸に手をあて葛の葉が
申し譯ない何とせうぞ
最早この子が宿り來て
無難で産れた其の子をば
童子丸とて名をつけて
蝶よ花よではや五歳
大和の國から葛の葉が
見える噂を聞くよりも
我子を抱へて泣き出す
稚けれども能く聞けよ
母は信田へゆくほどに
あとで惡戲致すなよ
ともかく夫に一筆と
戀しくば尋ね來て見よ和泉なる
信田の森のうらみ葛の葉
障子に名殘を書き殘し
泣く〳〵信田へ立歸る
こゝに龍宮の乙姫は
住吉浦の濱邊にて
童子丸にと扶けられ
錦でかゞやく御座船で
龍宮界へ童子をば
乘せて連行く恩返し
さても龍宮御大將
乙姫御前の手づからも
童子は寶を貰ひ受け
四海の底に藏めたる
龍車の寶を所持いたし
とく我が家に立歸り
御覽なされよ御父上
これが龍車の御寶
聞いて保名は御喜び
時に都の樣子をば
母が鳥と相成りてぞ
鳴いて知らすも可愛さに
童子は華洛へ立ち上り
芦屋道滿光照と
今は御殿で術競べ
始て帝に御目通り
この時阿部の晴明と
なつて帝の御祈禱所
國を騷がす禍が
唐天竺より渡り來て
玉藻の前と化けて居る
俄に后を攻寄せて
晴明が聽れば悲しや
九尾の狐と露顯して
ひとまづ禁裡を逃げ失せて
那須野が原で打捕られ
其の魂魄が石となり
鳥獸をば殺すゆゑ
殺生石とぞ號けたる
この石濟度する人は
玄翁和尚といふ知識
末世に其の名を殘しけり
あら有難や阿彌陀佛

六五　松虫鈴虫和讃

歸命頂禮都にて
清き流れや吉水の
圓光大師の御弟子にて
住蓮上人安樂房
東山なる鹿ヶ谷

草の庵を結びつゝ
不斷念佛證據には
六時の禮賛怠らず
悲喜哀嘆の御聲にて
勤めたまへる折柄に
その頃松虫鈴虫は
容顔美麗に有りしかば
帝の寵愛日々にまし
淺からざりし事なれば
數多の女官の嫉妬より
この世を厭ひ一筋に
菩提の道を求めんと
密に內裏をいでたまひ
鹿ヶ谷へと志ざし
世に名も高き禮賛に
一念心を傾けば
上品臺に座せしむと
唱へ玉へる殊勝さに
松虫鈴虫二方は
聞法十日に信心を
起したまひて其の儘に
剃髪禪衣を願はれば
住蓮上人安樂は
詞をそろへて御年は
何歳にならせ玉ふぞと
尋ね玉へば松虫は
年は十九に鈴虫は
十七歳ぞと宣へり
花の蕾の身をもつて
出家を願ふ志
いとも殊勝な事ながら
宮仕へなる御方を
このまゝ出家を許しなば
帝の逆鱗あさからず
先々時節を待ちたまへ
わが勤むるは他力にて
出家在家の擇みなく
本願力にすがりてぞ
一念歸命のあしたより
臨命終の夕べまで
南無阿彌陀佛と唱ふれば
往生疑ひ無き由と
示したまひて剃髪を
止めたまへば二方は
我々出家かなひなば
あはれ貴き法の道
夜半にまぎれて鹿ヶ谷
暇を告げてたち玉ふ
綾や錦を脫ぎすてゝ
墨の衣に身をまとひ
松柴を取寄せ顏燻べ
紀州粉川へ落ちたまふ
その後住蓮安樂は
出家を許せしその咎で

遂に重罪になりたまふ
御痛はしやわが祖師の
圓光大師もろともに
七十五歳の老の春
念佛停止とさだまりて
蒙り玉ふその上に
衣に變る狩衣を
慈悲の御身に纏ひてぞ
勿體なくも土佐の國
流罪にならせたまふ由
紀州粉川へ聞ゆれば
心もと無き二方は
かだの浦より船に乘り
御跡慕ひ申さんと
行方もしらず出で給ふ
南無阿彌陀佛

六六　八百屋お七和讃

哀れなるかなお七とて
類ひ稀なる娘あり
委しくあけて尋ねれば
ところは本鄕二丁目の
八百屋お七の其の館
始めて急火の難に遇ひ
菩提寺なる吉祥寺
親子三人假住居
其の頃寺の小姓にて
吉三郎と申せしは
世に類ひなき美男にて
花をあざむく姿なり
お七は戀の念深く
吉三を見染めて思ふやう
夫婦の契を結ばんと
人目を忍んで居間に入り
心を通はす暇も無く
花に戯れ蝶々の
交ひ離れぬ睦言の
堅き約束二世の緣
話も盛きぬその內に
もはや普請も成就し
我家へ歸るその時に
お七は名殘をし鳥の
言はず語らず目に涙
親子諸共かへりける
吉三はお七を見送りて
ともに涙の增かゞみ
また我家へ歸りても
焦れて暮す羽拔け鳥
心のうちの戀櫻
吉三が姿幻の
どうしたならば逢れよう
娘の心一筋に
身は空蟬の後や前
思案盡くせし折柄に

押分け來たる母親は
お七を見るより歎きつゝ
その悲しさはいかばかり
現在この世の火の車
吉三戀しとばかりにて
花の姿も散りはてゝ
炎と共にたち登り
吉三はこれと聞くよりも
さては實や不便やと
緣の黒髪切り捨てゝ
さらば菩提を祈らんと
剃髪染衣の身となりて
腰に四寸の鉦をかけ
いとも哀れの姿にて
八百八町の他力にて
六躰地藏を建立し
朝夕唱ふる念佛も
たゞ一筋の戀に

お七菩提と回向する
末世の今に至るまで
知らぬ人こそなかりける

六七　心行自然和讃

心行自然和讃念佛目錄

第一　念佛大綱
第二　女人疑滯
第三　女人求法
第四　女人往生
第五　安心決定
第六　臨終正念
第七　光明攝取
第八　念佛生蓮
第九　至心發願
第十　至心勸請
第十一　至心廻向
第十二　歡喜踊躍
已上
附
○祭文
○一枚起請
○講會讃
○滿散
首尾總附
隨喜證讃
和讃緣起
古今讃例

虚字付助
跋并附錄

○和　讃

句ごとに念佛をそへて、音頭同行異口同音常には、和讃ばかりもつとむべし。（一本ふしは陰陽自然の調子をやはらの義理ありならひあり。）

○踊

音頭はさきにたち、右にめぐりて、ひきまはし、中に立てをどるべし。上下の句頭に身と手とを右の方へかたぶけ、ふり出して左の方へふりいれべし。右へふり出す時は、右の足をふみ、左のあしをうかし、左へふりいるゝ時は、左の足をふみ、右のあしをうかすべし。手のひらを下へばかりむけべし。是皆陽より陰にむかふ自然の道理なり。但和讃のつとめはじめとつとめをはりには、かならず一同に合掌すべし。此外には何の模様も付べからず、身がら〳〵のまゝにて、只たふとやうれしやとのみ思ふべし。

○念（賛）

音頭和讃をとなへかけ、同行念佛をあはすふしひやうしあり。

○祭　文（祭）

音頭祭文を誦し、同行念佛にてはやすふしひやうしあり。

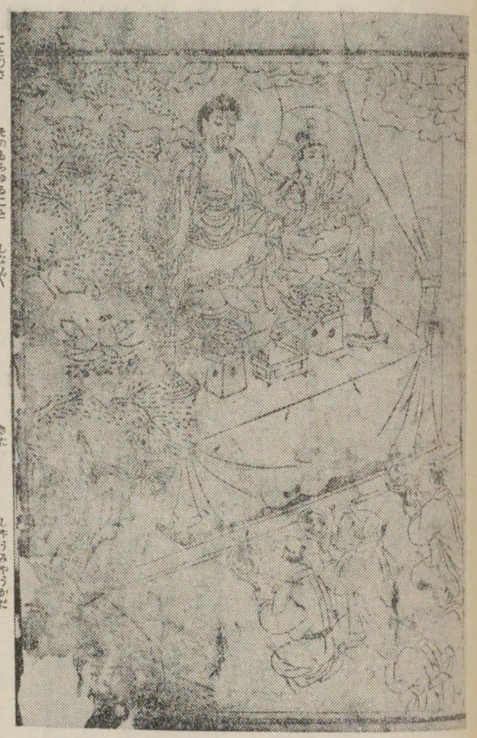
○音　聲

（一本音聲以下なし）

陰陽自然の調子をやはらけ、聲明に似たるふしなり。

○虚　字

天地ひらけ神代はじまりてより、大和言葉おのづからおこりて、人にながれしか唐國の字書渡りてより、それに和訓を付て、ならはしおこなへる事久し。其用事、品々にして言葉のあまれるは、或は上中下を略して用ひ、其たらざるは、うつほ字をくはへおぎなひもちゆ。たとへば水中の土を、泥といひ、是が訓を、ひぢりこといひ、又どろとよむ。ひぢりこのひぢは、水にひたちの略語なり。古歌に袖ひぢてむすびし水などゝ云ふにてしるべし。りはうつほ字にして心なし。こは粉なり。こまかなる土の、水にひたりて、やはらぎとろけたるなり。下略してどろとのみ云、和歌のならはしも、三十一文字のむすびあはせに、のぞきくはゆるたぐひめづらしきにあらず。松枝をまつえだといへばやさしき句作りとならざる故に、まつがえと用ひ來れり、聲明伽陀のふしはかせ、そのならひ多し。今此和讃念佛も、ふし調子にかけて唱る時は、其音聲、とゞこほる所出來りて、其加へたすくべき音も、自然に其中に生るものなり。慈覺大師入唐して、引聲の阿彌陀經引聲の念佛を傳來したまひしが、此法は極樂界の八功德池の波の音をうつせる調子にして、文珠菩薩ならびに法道和尚より、うけさづかりたまひしとなん。歸朝の後は、常に樂にあはせておこなはれしに、



猶其あまるいとまを惜みて、尺八にあはせて獨り吹たまひけれ共、成就如是功徳荘厳と云所にいたりて、音韻さらにかなはず、ある時常行堂の辰巳の松の扉にして、彼所を吹あはせんと、苦しみたまひしを、虚空に聲してやの音をくはへよと告ありければ、よろこびそれより、成就如是や功徳荘厳と吹たまひければ、しらべとゞこほる所なかりしとなん。古事談是に例するに、此ならひ法にたがはぬ事と信じ、和讃念佛、上下の句ごとに、よの音をくはへ、又讃の句中にも、なもじをつれてたすけなす事、おのづからおこれり。幸に、やとよと、あひかよふ音なれば、かの縁も遠からじとは思へど、なほも思慮浅からずして、眠に付し夢のうちに、空に聲ありて、よの音をくはへたすくる事、おそれとすべからず。上はほどこし、下はなまれとぞ告られける。是又おろかの夢なれば、我こゝろわかちがたくして有智の人に語りて尋ねければ、與はあたまへにしてほどこすと訓じ、譽はほまれにして嘉譽の例成べし。此和讃念佛を、人にほどこしつとめしむる時は、人おのづから念佛して、五種の嘉譽

かならずかうむるべし。然らば是此行法は、ほまれをほどこす法ならしといひさられき。

陽　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

陰　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

陽　たすけたまへやあみだぶつ

陰　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

（以下十三行一本）

「一音頭人はのこらずよみおほえ、ひやうしをそろへて人のこゝろをいさますべし。若しぎしきならざる時は、五だん三だんづゝもつとめさすべし。

一うばかゝ達は五だん三だんづゝもおほえて、しわざまぎれのくちずさびにも、茶のみあそびのまじはりにも、この歌をうたうておねぶつし給へ。

一男女のわらんべにも、一ツ二ツ宛もをしへて、たはふれごとにもうたはすべし。若しくさかりのたぐひもきゝおほえて、うきくさぎれのくちずさびにも、この歌をうたはゞ、いつとなくこの世後の世の功徳をえべし。佛心より流れいでたる、みのりの歌の聲なるがゆゑなり。是又佛經のこゝろなり。しんずべしたふとむべし。」

釋迦佛の教の法にしたがひて
罪ふかき身を彌陀にまかする
彌陀尺迦のうけとり給ふ此身をば
諸天諸神も守り敬ふ
佛神の守り敬ふ身にしあれば
横病横死厄難ぞな□

心行自然和讃

至心十念

光明遍照　十方世界　每時ノ行法開口
念佛衆生　攝取不捨　先可レ稱二此文一也

△第一　念佛大綱

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○あみたほとけのいにしへに
（以下一本名號なし）
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
まつせのしゆじやうをあはれみて
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○五こうしゆいのそのうへに
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○だいひのごぐわんをたてたまふ
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○そのぐわんじやうじゆのおんために
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○てうせのくぎやうをなされける
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○なんさのふさのごくろうは

南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○いまのわれらがためぞかしよ
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○すでにごしゆぎやうこふつもりよ
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○十こふいぜんのかみなづきよ
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○つきのなかばのあけほのによ
南無阿彌陀佛ヨ
南無阿彌陀ヨ
○あみだほとけとなりたまふ
南無阿彌陀佛ヨ
南無阿彌陀ヨ
○ごくらくじやうどのしやうごんもよ

南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○おなじくこんりうなされつゝよ
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○そのちゆうわうのうてなにはよ
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○よそほひたかくざしたまふ
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○そのときわれらがわうじやうのよ
南無阿彌陀佛ヨ
南無阿彌陀ヨ
○みちをばきはめおかれたりよ
南無阿彌陀佛ヨ
南無阿彌陀ヨ
○さてもわれらがにせのみをよ
南無阿彌陀佛ヨ

南無阿彌陀ヨ
○すくふほとけはあみだぶつよ
南無阿彌陀佛ヨ
南無阿彌陀ヨ
○たのむこゝろをよまめやかに
南無阿彌陀佛ヨ
南無阿彌陀ヨ
○まうすばかりをよしるべにて
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○ゆくもさとるもこのそんの
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
○ぐわんとごねんのちからなりよ
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ
たすけたまへやあみだ佛よ
南無阿彌陀佛ヨ　南無阿彌陀ヨ

十念
△第二　女人疑滞（にょにんぎたい）
南無阿彌陀佛ヨ
南無阿彌陀ヨ
○南無阿彌陀佛ヨ
南無阿彌陀ヨ
○ぜんにんあくにんおしなべてよ
をとこおうなもへだてなくよ
○もらさぬごぐわんときゝながらよ
さてはとおもひたち（発）がたしよ
○なかにおうなのつたなさよよ
いまのすがたをしさかへてよ
○あまやはふしのみともなりよ
こゝろもすこしき（発）よくしてよ
○たのまばほとけもいまはとてよ

うけひきたまふことならん
○まことおうなはをとこより
あくごふふかくうまれつき
○ほとけののりのにはごとに
三じゆ五しやうとはぢしめり
○そのつみとがはまれひとの
こゝろのうちにしられたり
○まづよくふかくはらあしや
そしりいつはりじやぎじまん
○あいよくえようだてひとめ
そのほかおもひとおもふこと
○なしとなすことおしなべて
いみならずとはおもはれず
○げにはぶつじん三ぼうの
にくみたまふもことはりに
たすけたまやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

十　念

△第三　女人求法　踊念佛

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○このにごりたるしやばでだに
かうやこんぼうひえのやま
○ふじやゆどのゝだけ〳〵も
けつかいざんとてのほられず
○そのほかたふときのりのには
かけさすだにもいとはるゝ
○まして十はうじやうどには
とほそをとぢていれられず
○ぢごくとがきとちくしやうの
みつのみちよりほかはたゞ
○しゝてゆくだにかたなくて
あきれはてたるおなのみや

○ましてむじやうはひにそひて
つゞまりきたるつゆのみの
○おちつくかたもいぶせくて
いとゞこゝろもみだれがみ
○とくべきのりのなきまゝに
いかゞはせんとかなしみて
○こゝやかしこのちしやほふし
だうたうがらんののりのには
○たづねめぐりてきくほどに
ゑんくわうだいしのながれくむ
○ちしやのみのりのえんにあひ
ごぐわんのゆらいをきゝえたり
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

十　念

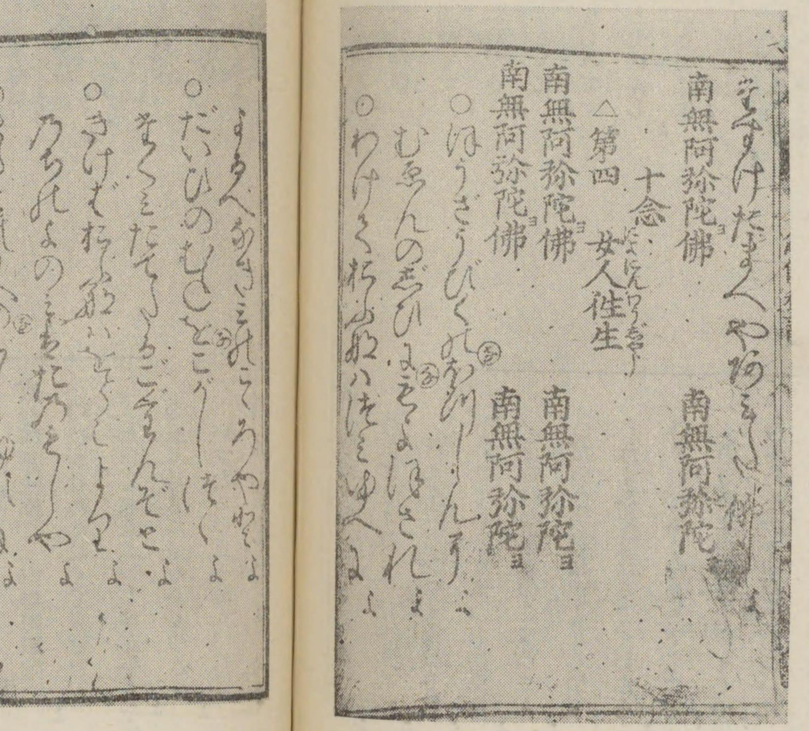
△第四　女人往生（にょにんおうじょう）

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○ほふざうびくのほつしんに
むえんのじひにもよほされ
○わけておうなはつみゆゑに
よるべなきみのこゝろやと
○だいひのむねをこがしつゝ
たくみたてたるごぐわんぞと
○きけばおうなはをとこより
のちのよのみはたのもしや
○またそのうへのごしゆいに
おもへばおうなはぐちふかく
○なにゝつけてもうらおもひ
もしやいかゞとうたがはゞ
○なんぎやうくぎやうえきなしと
ふたゝびごぐわんをたてたまふ
○をとこはひとつのごぐわんさへ
たのめばもるゝひとぞなし

○ましてほとけのおうなには
わけてなさけをかけおびの
○むすぶちぎりのちかひだに
ふたゝびまでのぐわんなれば
○たのむこゝろのひとすじを
せつしゆのみてにうちかけて
○ふたつのごぐわんにてをひかれ
はなのうてなに
のぼるなり
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

十念

△第五　安心決定



南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛　南無無彌陀
○おなのみをさへわがみだは
わけてなさけのふかければ
○たりきのちからつよくして
もらさですくひたまふゆゑ
○しよぶつほさつにほめられて
てうせのごぐわん
となのるなり
○ましてをとこはよ
のつねに
こゝろのはるゝか
たもあり
○かみやほとけにま
もられて
ぶつしゆのえんも
ふかければ

○のりをきくにも
うたがはで
ねがふこゝろも
いさましく
○みだもよろこび
おぼさんは
うちかためたる
のちのよや
○これをおもふに
あみだぶの
あまねきじひの
しられたり
○おうなをだにももらさねば
ましてをとこはいとやすし
○あくにんだにももらさねば
ましてつみとがうすきをや
○すこしまうすももらさねば

十念

△第六　臨終正念

ましてひまなくとなふをや
○かゝるあまねきの
りみつる
よにあふひとはた
のもしや
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛
○さてはをとこもおなのみも
あやうげもなくおもへども

○なべてのひとのさいごには
　やまうのくるしきのみならず
○しくくはいりてたへがたく
　つくりおきたはつみとがの
○むくひのがけもせめきたり
　まづあくだうへひかんとす
○ひとかたならぬさわりにて
　びやうしやしやうねんみだるれば
○やたけごゝろもおよぶまじ
　ひとのちからもかなふまじ
○しかはあれどもらいかうを
　ほとけのかねてぐわんずれば
○ときをたがへずそのまへに
　しやうじゆとともにけんじつゝ
○じひをくはへてたすくれば
　こゝろみだるゝことともなく
○ほとけのいりきつよければ
　つみのむくひもきえうせて
○しやうじゆのみかげあり〳〵と
　おがむとすればごくらくの
○はなのうてなときくからに
　みだたのむみのたのもしや
　たすけたまへやあみだ佛
　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

十　念

△第七　光明攝取

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○ひかりあまねくてらせども
　わけてねんぶつしゆじやうをば
○おさめとるとぞきゝつるを
　いかなるゆゑとおもひしに
○むかしのごぐわんにもよほされ
　つねにまもりてとくこよと
○いのちをはるそのときは
　みづからきたりてむかひとる
○かたぐ〳〵わうじやうごくらくの
　みちはあやうきことなきに
○さすがにごれるよにすむを
　こゝろやすくはおもはじと
○はるかにせつしゆのみてをのべ
　ひかりのなかにさしこめて
○てをはなたじとまもらるゝ
　ほとけのじひのわりなさよ
○いけらんほどはあみだぶの
　ひかりのなかにこもりゐて
○いのちをはらばごくらくの
　はなのうてなにうつろはん
○さればかまひてたれ〳〵も
　つねにひかりのなかにある

十　念

△第八　念佛生蓮（ねんぶつしやうれん）　踊念佛（をどりねんぶつ）

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○こゝちわすれでまめやかに
　くちにほとけのみなをよべ
　たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

こがねのみだうたちならぶ
○こゝにゐながらごくらくの
もはやしやうじゆのかずにいり
○こゝろはつねにはなのうへ
うまれてゆけばなかにすむ
○けらくたのしみかぎりなし
ろくつうじざいのみとなれば
○おやこつれあひともちいん
よゝになじみしひと〳〵の
○うきみこゝろのなかまでも
たちそふやうにみきくゆゑ
○かまひてねんぶつおこたらで
はやくきたれときねんする
○うてなのこしてまつまでも
えんあるひとをまづすれば
○ひとばかりなるちぎりをも
ひとつはちすとおもふべし

たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

十　念

△第九　至心發願

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○さてもくやしやながきよに
かゝるみのりにあはずして
○ろくだうししやうをはせめぐり
からきくげんをせしことよ
○さてもうれしやいまさらに
かゝるごぐわんにあひあふて
○このみそのまゝあらためて
たやすくじやうどへゆくことよ
○さてもあやうきるてんやと

おもへばみのけよだつなり
○さてもたふとやありがたと
いへばなみだもとゞまらず
○とみもまづしもさきのよの
いんぐわのほどにかぎりあり
○うさもうれしもけふばかり
こゝろとむまいゆめのよに
○けふよりしてはおねぶつを
くちとこゝろにわすれまい
○かならずほとけもおやくそく
たがはでむかひとりたまへ
○かへすゞ〳〵もごほんぐわん
あやまちたまふなあみだぶつ
○とてもかくてもこのみをば
まかせまうすぞあみだぶつ
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

十　念

△第十　合掌　至心勸請

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○くどくあまねきおねんぶつ
ゑかうまうすぞおうけやれ
○大恩教主○釋迦尊
西方願主○彌陀尊
○觀音勢至諸聖衆
六方證誠護念佛
○微塵刹土○諸三寶
三國傳燈自他祖
○彌陀化身善導公
勢至權迹圓光師
○念佛相承諸上人
人々有緣○善知識
○佛法守護○梵釋四

和光神祇○諸冥道
○皇帝聖化○無究盡
將軍國守○武運長
○天下和順○災不起
國豐民安同歸西
○現在兩親得往生
同行同伴信增進
○六親眷屬前七世
親疎結緣一蓮生
○法界衆生○共發心
同生極樂證菩提
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

十　念

△第十一　至心廻向
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○あゝねがはくはぶつぐわんの
じひのむらなきちからにて
○わらはがたむけたてまつる
かみはおんあるほとけたち
○しもはうえんとけちえんと
ほふかいしゆじやうにいたるまで
○あまねくとゞけさせたまへ
ひとつうてなのうへにおき
○おなじくさとりをひらかせて
ともにほとけになしたまへ
○かへすがへすもあさましき
かゝるあくごふかきみは
○やたけごゝろをつくすとも
ごくわんのちからによらずんば
○いかでわうじやうごくらくも
ゑかうもとゞきまうすべき

○とにもかくにもあみだぶつ
はからひたまへこのうへは
○おんをむくふもたすかるも
いけるあいだもしすときも
○らくをうけるもさとるをも
うえんむえんをすくふをも
○まかせまうすぞごほんぐわん
たのみまうすぞあみだぶつ
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

十　念

△第十二　合掌歡喜踊躍（念念佛）
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○さてもうれしやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛　しもみなこれにならへ

ぶつともはふともしらぬみが
○たのむばかりのしるべにて
ごくらくじやうどへゆくことに
○さてもうれしやあみだぶつ
ぜんともあくともしらぬみが
○くちにまかするおねぶつで
はなのうてなにのぼること
○しなばじやうどのはなのうへ
いきばねぶつのこふつまん
○とてもかくてもこのみには
おもひわづらふことぞなし
○さてもうれしやかゝるよに
こゝろのどかにうちくらし
○ほとけのむかひをまちまうけ
ちらとするまにごくらくの
○はなのうてなにうつらうて
ながきけらくをせんことよ
○いまよりのちはよのなかの

ぎりもこうぎもごせのため
○とせいかせぎのはたらきも
　ねんぶつとなふるためにせん
○おやこつれあひしんるいも
　いとむつまじくかたりあひ
○ともにねぶつをいさませて
　おなじくじやうどへつれゆかん
○わするな〳〵おねんぶつ
　つゆよりもろきみをもちて
○むなしくときをうつすなよ
　けふにもしれぬぞなむあみだ
○いまにしすとものちのよの
　くろうはないぞみなひとよ
○こゝをうばかゝがつてんか
　まかせきつたはあみだぶに
○このうれしさをわすれては
　ほとけもほいなくおほさんに
○みだれごゝろをそのまゝで
　まぎれながらもなむあみだ
○かみもかぐらのうたはやし
　ほさつもはうきのまひをどり
○うたへやうたへねぶつうた
　をどれやをどれよろこびて
○むかしいこくのゑいけいは
　みつのらくだにまひをどる
○ましてこのよものちのよも
　うちまかせたるけらくをや
○ねがへやねがへごくらくを
　ぢゞもばゞもとゝかゝも
○よめもむすこもわらんべも
　しゆうもひくわんもおしなべて
○となりほとりのおいわかい
　まうせやまうせおねんぶつ
○ぜにもいらぬぞなむあみだ
　南無阿彌陀佛（ヨ）　南無阿彌陀（ヨ）　しもみなこれにならふべし
　こめもいらぬぞなむあみだ

○ひまもとらぬぞなむあみだ
　きこんもいらぬぞなむあみだ
○ちしやもぐにんもこのみちは
　たのむばかりがのりののり
○ぎけをつけぬがふかぎけ
　もやうのないがよきもやう
○むまれながらのいきところ
　くちをひらいてでまかせに
○ぜんあくしよえんのきらひなく
　しわざするにもなむあみだ
○ねにもおきにもなむあみだ
　たつにもゐるにもなむあみだ
○これほどやすきごせのみち
　ねがはでいつのよをまたん
○たのむこゝろをまなこにし
　まうすねぶつをあしにして
○いそげやいそげごくらくを
　たのめやたのめごほんぐわん

○むかひにござるそのあひも
　しばしのうちぞなむあみだ
○よろこべよろこべなむあみだ
　けつぢやうわうじやうなむあみだ
　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
　阿彌陀佛　阿彌陀
　阿彌陀佛　阿彌陀
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

願以此功德　平等施一切
同發菩提心　往生安樂國

至心十念

右十二だん行じ終り、至心廻向十念相續して、どち〳〵よりゐ、そこはかとなき物語して、退散する時、又第一

段の大綱を一をどり、但五首をくはへをどりながら、家へ家にかへるべし。時によりて五首斗もうたふべし。

△第十三　暇乞

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛
（一本あみだほとけのいにしへに
○ぐわんとごれんのちからなり）

○いざやともだちひもくるゝよ
よもふけるよ
ちぎりてかへろやどゝ〳〵へ
○こよひしゝなばたれとても
しばしうてなのうへでまて
○もしもいのちのうちならば
あすまたをどりなぐさまん
○いつかかうもやごくらくの
そでをつらねてゆきかへり
○さらばさらばもかたねぶつ
とかくまかすぞあみだぶつ

たすけたまへやあみだ佛

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛

十　念

珍重〳〵さらば〳〵

一本
「野州芳賀郡椎簑村綱川氏がもとにて、これを詠じ、十月十四日の夜初てこれをつとむ。同じく十五日にこれを記して以て一巻とす、若書寫し受持し男女をさそはん人は緣起幷に十二だんの妙旨を察して、佛祖のおんこゝろをたがへず、しかも衆機に應じて方便すべし。若はかろしめ、若は謗ぜん人は、善導圓光をうかゞひ、彌陀釋迦諸佛の善巧に達して疑謗を消すべし。あへて予をせむることなかれ。乞此歌念佛當國において流行すること、人壽十歳の時を期せんとす。仰願はくは三寶諸天神祇冥道護持のちからをくはへて退轉なからしめたまへ。敬白」

爰に綱川氏信心胸にみち、渇仰外にあらはれて一ツの大願を發す、誓らくは、某生涯は申すもおよばず、遺跡相續をかぎりとして、一ケ年に四度づゝ、眷屬ならびに隣家の男女をさそうて、此法事をとりおこなひ、萬代の子孫ともに生死の苦海を出、一佛淨土の快樂をきはめん餘薫四方に遍し、法界の有情おなじく安養寶林の花のもとにあそばん。若遠孫此願行を退轉せば即時に田園散亡し、氏名失却せん。仰願はば三寶諸天神祇冥道常に家内に影向して、諸障をはらひ六親和合にして願行退轉なからしめたまへ。願主敬白　圓通寺二十三世良安上人附法。

迎譽淨運　綱川氏
臺譽妙蓮　同　妻

元祿十二己卯天十一月十五日（譽レ之）

一本
「跋　竊に　以　は此歌念佛の行相しばらく、是淺近なるに似たれども、心行自然の利益は極て是深奥なり。但し天竺にては陀羅尼といひ、和朝にては歌とよぶ。國風柔しといへども共にこれ惣持にして風をうつしてこゝろをあらふ方便なり。いはんや別願不供の善巧大悲究極の方便を歌によそへてひらくをや。眞に是往生の人の身持なり。相傳なり。聽法なり。智識なり。よき同行なり。世間出世の珍寶なり、若うたはざる人は現當の寶を失ひ、うたふ人は二世のさいはひをえべし予既に此歌を詠じ、筆をとりそむるよりこのかた、靈夢一つにあらず、疑謗をおそれて是をのせず。是佛祖のおんこゝろにかなひ、時機に應ずる方便なるべしと獨り吟じて補をうるほす。感歎隨喜のあまり淺才の筆の跡をはぢず、世情をはかることなく、風の吹にまかせ、浪のよるにしたがうて是をひろむ、願らくは四海浪しづかにて國もおさまるときつかぜ、枝をならさぬ御代ながく、この歌とし〳〵に流布して、國のならはし人のくちづさみにもなれかしとなり。
同十八日に野僧加祐推養村白譽生蓮の草庵にしてしるし侍り

此外に祭りの方便あり。定則にあらざるゆゑに別紙に是をしるす。萬人をさそはんとおもはゝ、かならずこの方便をならふべし。」

合掌　祭　天神影向文　地祇加被

天下和順　日月清明　風雨以時　災厲不起
國豐民安　兵戈無用　崇德興仁　務修禮讓

○さいはひささよろこびや　しもみな
南無阿彌陀佛　これにならへ
天下泰平たいへいや
○國土あんをん民ゆたか
さてもめでたやうたねぶつ
○亭主もかゝも子もよめも
六親けんぞくおしなべて
○宿世の善根かいほつし
三寶因果をしんずれば
○釋迦のみのりにしたがふて
彌陀のごぐわんに身をまかす
○他力の舟にうちのりて
生死の海をわたるなり
○大悲のつなにとりすがり
南無阿彌陀佛をほにあけて
○諸佛護念のおひかぜに
極樂淨土のきしにつく
○これほどめでたき家内には
梵天たいしやく四大てん
○日月諸星もあまくだり
六十餘州のかみ〴〵も
○百重千ゑにとりまいて
まもりよろこび給ふなり
○まして家内におたちやる
ゑびす大こくおさうぜん
○うがやかま神ふくろくじゅ
うらしま太夫やほていどの
○地神かうじんとしとく神
三ぼうかうじん七ふくじん
○水神火神にいたるまで
本體るしやなのけんなれば
○本地の名號とのふるを

よろこび給ふもことわりに
○いまゝでまもりたがひあり
このたび生死をいづるよと
○ゑこり〳〵うちわらひ
ゆるぎいでゝまひをどる
○ゑびすだうもゆつさめく
おかまのまへもざんざめく
○さてもめでたやこの家は
幾千萬代さかふべし
○諸佛も常に影向し
諸天善神守護すれば
○横病横死のなんもなく
惡鬼あく神にげされば
○福德さいはひいりみちて
こゝろにかゝることもなし
○まして因果をしんずれば
分限知足のさとりをえ
○いつもこゝろを大ふく人

あんをんけらくに世を渡る
代〴〵ねんぶつ修善して
孫〴〵淨土にうまるべし
○三禪天の妙らくも
はてには五すいのうれひあり
○いまこのをどりのたのしみは
このよもながきのちのよも
しゝそん〳〵にいたるまで
たえせぬけらくのうた念佛
○よろこべ〳〵みな人よ
をどれやをどれうきたちて
○三界六道たゞおもひ
おもひたゆれば四生なし
○うたやをどりにさそはれて
分別けたくのかけもなく
○うきくわすつへと打わすれ
ふくべのかるさにうんなつた
○半日七世はかずでもない

多劫も現前一念に
○三千十界唯一心
人情おほうて自他をみる
○しばらくわすれた境界は
かんけんどうろの人形で
○かみもうぢこもへだてなく
佛と衆生のおもひなし
南無阿彌陀佛の聲ばかり
こゝろはごくらくぐ〳〵だ
珍重〳〵さいはひ〳〵
夫婦中能　六親和合
衆人愛敬　福徳自在
息災延命　子孫繁昌
信心不退　念佛相續
臨終正念　決定往生
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛
謹上再拜　敬白

十念

夫和光同塵は結縁のはじめ、八相成道は利物のをはり、今すでに、累世のけちえん淳熟して、大悲本懐の尊號を修す。三佛同心の本意にかなひ、本體しやなの神慮をよろこばしむ。もつとも謹請再拜すべし。

音頭人は、神樂太皷をならして、祭文を誦し、亭主六親ならびに、同行は至心合掌して、十方を禮念し、仰で深恩を報謝し、伏て守護を乞奉るべし。

此祭は定則とすべからず。機を見、時をしりて、方便をたれべし、又あるときは此おもむきを、物語して、男女のこゝろを誘引すべし。

一本「抑五劫思惟の善巧、本願成就の奥藏、三佛同心の本懐、大悲究極の方便は、末法萬年特留念佛の化相に顯れたり。今此歌念佛幷にをどり祭文等の方便を信用して身づから音頭を執、眞實に自利利他せんとおもはん人は、內には堅固の誠心を專として、外にはなぐさみの風情を現じ、唯十念相續の時、深心の至誠をもよほすべし。かならず殊勝の道相をこしらへて、如法の行儀をたゞすべからず。ひとへに心行自然を甘心し人口流轉をよろこぶべし。よく〳〵他力の宗風をさぐりえて、自熟熟他の方便に趣べし。夢幻泡影のこの身のために名利をむさぼり、電光朝露の生死のために妄慮をとゞめて、永劫の苦因をたくはふることなかれ。嗚呼もどかしき哉、但し予がごときの格にもれたる無智のもの、兼ては在家の男女にしめす。まつたく位階にかゝはり、寺院に住する智人をいさむるにあらず。若自然に信用せん人は、如法に勤修して機嫌をわすれ玉ふべからず。

△一枚起請和讃（一枚起請　元祖骨髓和解）

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀
○彌陀本願のねんぶつは
上世末代もらさねど
○わけて末法萬年の
極惡衆生をほんとせり
○きえん熟せる折からに
彌陀はいこくの善導と
○勢至菩薩はこの國の
圓光大師とあらはれて
○佛願正意の安心を
ひらいてすゝめ給ふゆゑ
○萬人おなじくこれにきし
いこく本朝のりみてり
○うるの無常をあらはして
やそじの滅をしめすとき
○加茂の明神韋提布の
請に應じてさらばとて
○ひろめしのりをひきむすび
一枚起請をあらはして
○末世の邪義をふせがるゝ
ごはうべんこそたうとけれ
○そのねんぶつのあんじんは
義解と模様のいろもなく

○もろこし和朝の智者達の
　さたする觀のねんならず
○學文けぎのこうつみて
　さとりをそゆることもなし
○たゞし三心四修などは
　よにむつかしくきこゆれど
○となふる人のこゝろにて
　さばくりたもつことならず
○念佛となふる人もたゞ
　往生うたがひなしとのみ
○おもひしめたるこゝろねに
　自然とこもるとくなるを
○こけとぎしんと不廻向の
　三つの病のある人の
○まれにもあらばあたへんと
　あらはし給ふくすりなり
○また智者達のふるまひを
　せずしてねがふこゝろばへ

○いろ〳〵けぎをくはふれど
　宗致をしればいとやすし
○たゞ智者ながら愚者ながら
　身がら〳〵のまゝにして
○助給へとおもふこそ
　尼入道におなじけれ
○これぞ五劫のたくみにて
　人をもらさぬのりゆゑに
○釋尊諸經にほめてとき
　諸佛證據にたち給ふ
○このほかねんぶつ安心に
　よふかきこゝろはなきぞとて
○二世までかけてちかはるゝ
　元祖のじひのわりなさよ
たすけたまへやあみだ佛
南無阿彌陀陀　南無阿彌陀佛

一本「此一紙古へより今にいたるまで諸宗の道人或は信じ或は讃すといへども、各々宗意にとりいるゝがゆゑにその解多は佛願の正意にかなはず、又解釋をなし、抄記をあらはすといへども、文義繁多して、却て祖意をかくす。あに大師の御本意ならん。いましばらく和讃になぞらへて、和解をなし、佛祖の心肝をひらいて、和讃に符合せしむ。

問辯

或人問ていはく、五劫善巧の稱名殊更に簡易なるを歌に詠じてうたふことなんぞや。又文證ありや、又舊例ありや、予答ていはく、念佛を歌となすとおもふべからず。安心を歌によそへて、自然の心行をもよほすとしるべし。いはんや此歌は汚染僞虚の歌詠にあらず清淨眞言の妙法を詠じて、暢發和解の音聲を學び、陰陽自然の調子をうたうて、歌嘆稱揚の聲明を行ず又踊るは歡喜踊躍の儀をしめし、遶は圍遶渇仰のこゝろを表す、既に十方來生の菩薩は、和雅の音を暢發して、最勝尊を歌嘆す、曾更見世尊の凡夫は謙敬して聞て奉行し、踊躍して大い歡喜す。諸寺諸山の聲明行道も、佛界の儀式をまなぶにあらずしてなんぞや、若少分文をいたさば、滅然泰天樂暢發和雅音歌嘆最勝尊供養無量覺彼土曾更見世尊則能信此事謙敬聞奉行踊躍大歡喜此土善導和尚經論に依て、六時禮讃を集記し歌嘆稱揚の行法をすゝめて、心行をたすく。是則五念五正の中の讃嘆門にして、往生の正行なり。但し稱揚の言葉は漢語は、震旦の歌にして、下愚の甘心もよほしがたし。梵語は月氏の歌にして、上智尚その理をあぢはふることあたはず。いはんや世澆季に屬し、人性おろかにして直に厭離欣求の安心をおこし、五念五正の起行にもとづくことかたし。これがために讃文を和歌に詠じ、聲明を世風に和して、自然の心行をもよほす。看々萬人懷き易く、人心感ずるにたれり。あに佛意佛願に相應せざらんや。又舊例をたづねば、昔執師子國の老翁は、釣を拍子になぞらへて、念佛をしへ、後善導の少康はわらんべをそゝのかしをどりめぐりて稱名をひろむ。上人又和歌を詠じて人心をさ

そひたひましことあり。空阿彌陀は和讃をつくり、常に誦して念佛す。これよりこのかた文讃を誦して念佛することはじまれり。いはんや時にのつとり、機に應じ、處にしたがつて、教門の權説を施し、欣慕の機情を誘引することは、二尊遣迎の方便にして、四義の隨一なり。但し格はしばらく教門の指南、不格にして、格に應ずる是眞の格式なり。又浄槃會の和讃・舍利和讃、惣じて家々に和讃を詠じて、歌嘆稱揚の法事を行じ、自行化他の方便となす事、古今の式なり。別しては空也上人の歌念佛、遊行上人のをどり念佛、雲居禪師の歌念佛等、是皆世風になぞらへ、物によそへて人心をさそふ方便なり、今あらためてあやしむことなかれ。抑此心行自然和讃念佛は歷代相傳の趣に依りて萬機普益の願意を詠ず、若此和讃を信用せん人は、うたやをどりにさそはれてうき世わすれておもしろく、身づからうたふ小歌の聲、かへりてわがみに入心たゝきうごかされて、たふとしときく、きけばすなはち罪業も常に滅し、むせびたる妄念もうちはらはれて、むねもあきこゝろもゆる〳〵となるとなり。うたふくどくきくくどく、ふたゝびつみをめつすらん。亘益こそ返々甘心せられておぼゆれ、けに稱名はなにゝよそへてもさる物にこそあんめるを、これまでとなへこゝろみて念佛の氣味しりたる人いとまれなり、假一向不信の男女無智のわらんべなりとも、此歌をくちずさまば順次順行の兩益にもるゝもの有るべからず。鸚鵡のくちまねし、林鷄の嗽水を呑し、尚往生す。いはんや人類をや、眞にこれ人々流傳心行自然は大悲究極の方便なり。既に是不信無行の男女、尚心行自然の益にあづかる。いはんや信心念佛の行者心行相續の方便にたれり。無智無解の道俗尚心行相續の益を蒙る。いはんや有智信悟の道人正觀淳熟の方便にたれり。假學解區々なりとも、此方便を修せば、おほえず情識をあらひ、自然に佛加を蒙り、一聲に萬劫を經て、命斷に不退を究竟し、一念に三祇を越て、須臾に果極を證せんこと此方便にしかじ。又問ていはく、願主の氏名をのすること機嫌をしらざるに似たり。又緣起かするの三

首の和歌ついでなきにあらずや。予答ていはく、法譬因緣の三說によらずんば、男女の仰信もよほしがたしこれがために始には譬說を以てし、末には因緣をくはふ。但し當時は人情の機嫌あるべけれども、向後は信をとるものをよるべし。いはんや智者信者は結緣をあいすがゆるに、是をきらふべからず、且亦一念の隨喜一遍の廻向見る人きく人一佛淨土の結緣もらさじがためなり、三首の和歌のことは善導の御釋現生護念增上緣の意にして、傍意の方便なり、是則緣起の中の現益を證すとしるべし。嗚呼たゞ野菜の目錄を學して、料理とあぢはひをしらず、名相に着して人情おもくしたまふものかな、此外俗間の妄說塵をはらふがごとし。たゞせば隨ておこる。なんぞ會釋をまうけん。たゞ機緣のひくにまかせて、誇と不信とをもどくべからず。」

和讃講會法船之序

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛

○そも〳〵講會のおんゆらいよ
あをいで是をたづぬれば
○あまてる神のおんながれよ
ひがしをてらす大ごんの
○第五の御代の君きよく
兩輪ののりを世にしきて
○二世のけらくをあたふるはよ
これぞひじりのみよならんよ
○なかに淨土の一もんは
時にかなへるのりなればよ
○わけて弘通のおんためによ
宗祖導師の位をあけてよ
○圓光大師とおくりなしよ
大僧正ににんぜらるよ
○ときに僧正おんじひのよ
むねのたくみのあらはれてよ
○世にめづらしき念佛の
講會ののりをひろめんと

○心岩密にそいをうけ
　月に三會をもよほして
○幾千萬のけ(左)ちえんは
　わりなきじひのて(左)だてなり
○ときにかなへるおねぶつの
　ごえんのさそふ(左)講なれば
○みやこいなかにいたるまで
　むすばぬのりのに(左)はぞなし
○中につきてもこの里は
　圓に通ふ(左)のりの水
○ながれうるほふ人ごゝろ
　さそふ和讃の歌にきし
○自然に信をもよほして
　みなをとなへぬ人ぞなし
○折から講會の式をきゝ
　わたりに舩(左)とよろこびて
○道俗貴賤(左)へだてなく
　老若　男女おしなべて

○前亡靈位にいたるまで
　一蓮倶會の(左)帳にいり
○月に一度の講會には
　和讃念佛共行して
○むすびかさぬる講衆の縁
　同行淨土をゑかうする
○いまよりのちこの和讃
　たはふれごとにうた(左)ふとも
○自然に功德(左)周遍して
　たがひに利益をかふむらん
○常にほとけにまもられて
　おゝ〳〵淨土にうまれゆき
○甘露の雨を(左)ふらしつゝ
　法界衆生をうるほさん
　たすけたまへやあみだ佛
　南無阿彌陀佛　南無阿彌陀

十念

此講會の和讃は、十九夜歌念佛の講會をあらためて、百萬遍の講式を擧び、和讃念佛の講會をもよほして、一蓮倶會の因緣をむすぶ、其名に入の信人、芳賀郡風戸村林藏寺の會に、千五百餘人。七井村正法寺の帳に入者、千八百餘。同村觀音院の講に入者。二千五拾餘なり、講衆より、帳序を一讃にして、其趣をしらしめん事など講ずる。有にまかせてこれをつゞりあたふるものなり。其里々は、名越派大澤圓通寺の隣村なるがゆゑに、法薫むなしからざる事をあらはす。まどかにかよふの句其儀なりもし機緣熟せる里々に、此和讃流行せば此式をまなびたまへかし。

元祿十三庚辰二月十四日

一本「此和讃は椎養村にしばしがほどとゞまりいたるにほとけの道なけきあはする友もなきいとさびしさのやるかたなく、おもひいづるにまかせて是を詠じくちずさみ侍るを、男女たふとみうらやみて是をならひ、わらんべなつきしたしみて是をうたふ。よつて緣起をあらはし、跋をしるせば隣家をさそうて家々に是をつゞめ、人口につたへて里々に是をおこなふ。又祭りの方便をくはへ、元祖の起請を和解す、既に疑謗の浪たちて問辯あらはれ、漸く講會の船うかびて帳序を詠ず。しかるに流傳の和讃書寫てん〳〵してそのあやまりおほし。來て正ほんをもとむるにひとりにあらず。今やむことをえずして校合清書し七科を合て遂に一部となす。若書寫せんとおもはん者は此本をもつて正とすべし。

元祿十三庚辰歲五月二十九日

絕筆廻向曰

願以此功德　平等施一切
同發菩提心　往生安樂國」

夫傳へきく、加祐法師は、自利を專として、利他の繁昌を事とせず。恭敬名利をいとうて殊勝の道相を現ずる事なし。身を雲にして跡を一つ所に定めず、心を水にして人情にかゝはる事なし、然るに去る秋の比より、三經一論の奥儀を開て百七十首の和讃を詠じ讃嘆正行の聲明になぞらへて、陰陽自然の調子を和す。或時はわらんべ

をさそひつれて、踊りながらともにうたひ、或時は聖衆につらなるおもひをなして、閑室に獨り吟ず。こゝろと和讃に隨從して、計度の煮情をわすれ、願と護念に攝せられて、惣心を淨域に消す。聞人是を羨、みる人是に懐くよりて流行する事、村々里々にみてりとなん。爰に寛照もと密乘の頓大を學び、兼て教外の脫心を愛す。あるひは止、あるひは、修するといへども、いまだ了竟する事あたはず、退縁をおそれ、隔生をなけくのところにはからざるに此和讃を得て、屢これをみるに、他力の宗風を解し、しばゝ〳〵これを修するに、念佛の氣味をあじはふ、順次出離のなけき、今爰に止ぬ、寔に是八萬四千の法門の外にして、然も一切佛道速得究竟の方便なり。何れの宗かこれをきらはん。誰の人か是を修せざらむ。彌陀別願の名號を諸經に讃說し、諸宗にわきばさむ事、尤ゆゑあるかな。抑此和讃は梵語の唄葉を翻じて、漢語の朱軸となすにゝやはらけ、偈頌を和歌に詠ず、佛界の軌則を學んで、聲明行道をなすになぞらへ、行道を神をどりによそへ、聲明を世風に和す。たくめるかな此方便處と時と機とかなうて、感應水月にひとし。おそらくは是緣熟にたゝかれたるの自然の應用ならん。みよ〳〵村々里々にながれ行事風の草をなびかすが如し。老若男女の信じ行ずること、渇して水をのむが如し。是又在家の男女のみにあらず。諸宗の寺院隱者禪門等或は自信じ行ずる人あり。或は證讃して、男女の心行をすゝむる人あり。是皆道心の人、正見の人也。或は又道俗競うて誹謗なし方便破壞して仇をなす物あり。其いふこと、あるひは新義なりと謗じ、狂相成と笑ふ。或は當今は佛法世にみつれば、さまでの方便益なしとのゝしり、或は寺院の隣村は、わさんを勤めずとも不足なしと慊ふ、或は在家は苦しからず出家學匠は信ずべからずと制し、或は宗旨の行法ならざるゆゑに、檀中の男女行ずべからずといかる。或は信ずる人の短をうかゞひ、行ずる人に難をくはふ。是皆愚癡偏執我慢嫉妬不信虛假の輩、天魔に附詫せられて、かくのごとくの狂言をなす。嗚呼いたむべし。かなしむべし。惜いかな此方便獅子身中の蟲にほろぼされて、空しく塵中にうづもれん事を。これがために方便をめぐらして、漸正本をもとめ、工人に命じて、梓にちりばめんとするに、世財とぼしうして自力にかなはず。檀衆をもとめんとするに、いまだその緣にあはず。こゝろざしを空うして、功を後の人によす。若こゝろざしあらん人、予が志願の功をみてば、是人天福分の少善にあらず、廣く二尊三佛の化儀をたすく、あに無邊の大善にあらずや。是すなはち開板は、和讃の流傳をたすけ、和讃は念佛の心行をすゝむ。念佛は往生の得脫をきはめ、往生は諸佛の本懷にかなふ。希は此こゝろざしの行ところ、其功むなしからざる事を。干時元祿十三庚辰の歲林鐘下旬

佛子寬照謹誌

武江

增上寺表門前　林十郎兵衞彫刻

自行自然和讃

終

第六順禮歌（御詠歌）

一 西國三十三番順禮歌

一番　紀伊國那智山如意輪堂
普陀落や岸打つ浪はみ熊野の
那智のお山にひびく瀧つ瀬。

二番　紀伊國紀三井寺
ふるさとをはる〴〵こゝに紀三井寺
花の都も近くなるらむ。

三番　紀伊國粉河寺
父母のめぐみも深き粉河寺
佛の誓たのもしきかな。

四番　和泉國槇尾寺
み山路や檜原松原分け行けば
槇尾寺に駒ぞ勇める。

五番　河内國藤井寺
まるより賴みをかくる藤井寺
花のうてなに紫の雲。

六番　大和國壺阪寺
岩をたて水をたゝへて壺阪の
にはのいさごも淨土なりけり。

七番　大和國岡寺
けさ見れば露岡寺のにはの苔
さながら瑠璃の光なりけり。

八番　大和國泊瀨寺
いくたびも參る心ははつせ寺
山も誓もふかき谷川。

九番　奈良南圓堂
春の日は南圓堂にかゞやきて
三笠の山にはるゝうす雲。

十番　山城國宇治御室戸千手
夜もすがら月を御室と分け行けば
宇治の川瀨に立つは白浪。

十一番　山城國醍醐堂
逆緣ももらさで救ふ願なれば
巡禮堂はたのもしきかな。

十二番　近江國岩間寺

水上はいづくなるらん岩間寺
岸打つ浪か松風の音。

十三番　近江國石山寺
後の世を願ふ心は輕くとも
佛の誓重き石山。

十四番　大津三井寺
いつ入るや浪間の月は三井寺の
鐘のひびきに明くる湖。

十五番　山城國今熊野
昔よりたつとも知らぬ今熊野
佛の誓あらたなりけり。

十六番　京の清水寺
松風や音羽の瀧は清水の
むすぶ心は涼しかるらむ。

十七番　山城國六波羅
重くとも五つの罪はよもあらじ
六波羅堂に參る身なれば。

十一番　山城國六角堂
わが思ふ心のうちは六つのかど
ただまろかれと祈るなりけり。

十九番　山城國革堂
花を見て今は望もかう堂の
にはのちぐさも盛りなるらむ。

二十番　山城國良峯寺
野をもすぎ山路に向ふ雨の空
良峯よりもはるゝ夕立。

二十一番　丹波國穴生寺
かゝる世に生れあふ身のあなうやと
思はでたのめ十聲一聲。

二十二番　津國惣持寺
おしなべて高きいやしきそうじゝの
佛の誓たのまぬはなし。

二十三番　津國勝尾寺
重くとも罪に祈るは勝尾寺
佛を賴む身こそやすけれ。

二十四番　津國中山寺

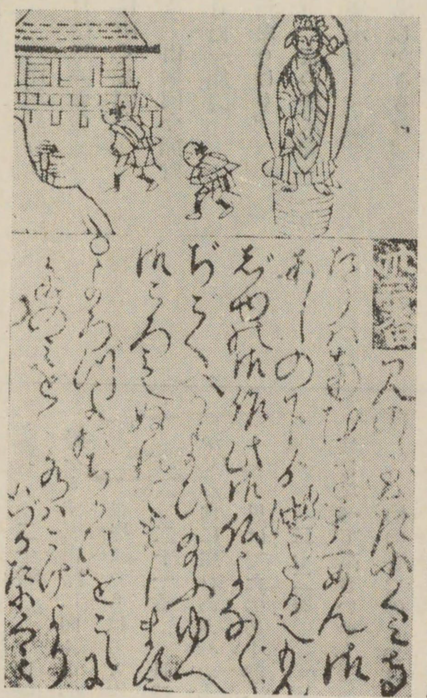
野をも過ぎ里をも過ぎて中山の
寺へ參るも後の世の爲。

二十五番　播磨國清水

あはれみや普きかどにしなく〳〵の
なにをかな
みのこゝに
清水。

二十六番
播磨國
法華寺

春は花夏はたちばな秋は菊
いつも絶えせぬ法の花山。



二十七番　播磨書寫山

はるゞ〳〵と登れば書寫の山おろし
松のひびきもみのりなるらむ。

二十八番　丹後國成相寺

波の音松のひびきもなりあひに
風吹きわたる天の橋立。

二十九番　丹後國松尾寺

そのかみは幾代へぬらん便りをば
千と世をここにまつ
のをの寺。

三十番
近江國
竹生島

月も日も波間に浮ぶ竹生島
舟に寶をつむこゝろ
せよ。

三十一番
近江國長命寺

やちとせや柳に長きいのち寺
はこぶ歩みのかざしなるらむ。

三十二番　近江國觀音寺

あらたふと導き給へ觀音寺
遠き國より運ぶあゆみは。

三十三番　美濃國谷汲寺

よろづよの誓をこゝに賴みおく
水は苦より出づる谷汲。

（西國廿三番順禮緣起）

二　四國八十八ヶ所御本尊御詠歌

第一番　阿波國板野郡靈山寺　釋迦如來
靈山（りやうせん）の。釋迦の御前に。めぐりきて
よろづの罪も。消えうせにけり。

第二番　同國同郡極樂寺　阿彌陀如來
極樂の。彌陀の淨土へゆきたくば
南無阿彌陀佛口癖にせよ。

第三番　同國同郡金泉寺　釋迦如來
極樂の。寶の池を。思へたゞ
黃金のいづみ。澄みたゝへたる。

第四番　同國同郡大日寺　大日如來
ながむれば。月白妙の。夜半なれや
たゞ黑谷に。黑染の袖。

第五番　同國同郡地藏寺　地藏菩薩
六道の。能化の地藏。大菩薩
みちびきたまへ。この世後の世

第六番　同國同郡安樂寺　藥師如來
假の世に。ちきやうあらそふ。無益なり
安樂國の。守護をのぞめよ

第七番　同國同郡十樂寺　阿彌陀如來
人間の。八苦をはやく。離れなば
到らんかたは。九品十樂。

第八番　同國阿波郡熊谷寺　千手觀世音
薪とり。水くま谷の。寺にきて
難行するも。後の世のため。

第九番　同國同郡法輪寺　釋迦如來
大乘の。誹謗も咎も。ひるがへし
轉法輪の。緣とこそきけ

第十番　同國同郡切幡寺　千手觀世音
欲心を。たゞひとすじに。切幡寺

後の世までの。障とぞなる。

第十一番　同國麻植郡藤井寺　藥師如來

色も香も。無非中道の。藤井寺

眞如の波の。たゝぬ日もなし。

第十二番　同國名西郡燒山寺　虛空藏菩薩

後の世を。思へば恭敬。燒山寺

死出や三途の。難所ありとも。

第十三番　同國名東郡　一の宮十一面觀音

阿波の國。一の宮とは。ゆふだすき

かけてたのめや。この世後の世。

第十四番　同國同郡常樂寺　彌勒菩薩

常樂の。岸にはいつか。到らまし

弘誓の船に。乘りおくれずば。

第十五番　同國同郡國分寺　藥師如來

薄く濃く。わけ〳〵色を。染めぬれば

流轉生死の。秋のもみぢ葉

第十六番　同國同郡觀音寺　千手觀世音

忘れずも。導きたまへ。觀音寺

西方世界。彌陀の淨土へ。

第十七番　同國同郡井門寺　藥師如來

面影を。うつしてみれば。井戸の水

掬べば胸の。垢や落ちなん。

第十八番　同國勝浦郡恩山寺　藥師如來

子を産める。その父母の。恩山寺

訪ひがたき。ことはあらじな。

第十九番　同國那賀郡立江寺　地藏菩薩

いつかさて。西の住居の。わが立江

弘誓の船に。乘りて到らん。

第二十番　同國勝浦郡鶴林寺　地藏菩薩

茂りつる。鶴の林を。しるべにて

大師ぞるます。地藏帝釋。

第二十一番　同國那賀郡大龍寺　虛空藏菩薩

大龍の。常に住むぞや。けに窟（いはや）

捨身もんぢは。守護のためなり。

第二十二番　同國同郡平等寺　藥師如來

平等に。隔のなきと。聞くときは

あら賴もしき。佛とぞみる。

第二十三番　同國海部郡藥王寺　藥師如來

みなひとの。病みぬる歲の。藥王寺

瑠璃の藥を。與へましませ。

第二十四番　土佐國安藝郡東寺　虛空藏菩薩

明星の。出でぬるかたの。東寺

暗き迷ひは。などかあらまじ。

第二十五番　同國同郡津寺　地藏菩薩

法の船。入るか出づるか。この津寺

迷ふわが身を。乘せてたまへや。

第二十六番　同國同郡西寺　藥師如來

往生に。望をかくる。極樂は

月の傾むく。西寺の空。

第二十七番　同國同郡神峰寺　十一面觀音

み佛の。誓ひのこゝろ。神峰（かうのみね）

刃の地獄。たとへありとも。

後の樂しみ。有明の月。

第二十八番　同國香美郡大日寺　大日如來

露霜と。罪を照せる。大日寺

などか歩みを。運ばざらまし。

第二十九番　同國最岡郡國分寺　千手觀世音

國を分け。寶を積みて。建つ寺の

末の世までも。利益のこせり。

第三十番　同國土佐郡一宮　阿彌陀如來

人多く。立ち集まれる。一の宮

むかしも今も。榮えぬるかな。

第三十一番　同國長岡郡五臺山　文殊菩薩

南無文殊。三世の佛の。母ときく

我も子なれば。乳こそ欲しけれ。

第三十二番　同國同郡禪師峰寺　十一面觀音

靜かなる。わが源の。禪師峰寺

浮ぶ心は。法の早船。

第三十三番　同國吾川郡高福寺　藥師如來

旅の道。うえしもいまは。高福寺

後の樂しみ。有明の月。

第三十四番　同國同郡種間寺　藥師如來

世の中に。蒔ける五穀の。種間寺

深き如來の。大悲なりけり。

第三十五番　同國高岡郡清瀧寺　藥師如來

澄む水を。汲めば心の。清瀧寺

浪の華ちる。岩の羽衣。

第三十六番　同國同郡青龍寺　不動明王

わづかなる。泉に住める。青龍寺

佛法守護の。誓ひとぞきく。

第三十七番　同國同郡岩本寺　阿彌陀如來

六つの塵。五つの社。あらはして

ふかき新田の。神のたのしみ。

第三十八番　同國幡多郡蹉跎山　千手觀世音

補陀洛や。こゝは岬の。船の竿

執るも捨つるも。法のさだやま

第三十九番　同國同郡延光寺　藥師如來

南無藥師。衆病悉除の。願こめし

參るわが身を。たすけましませ。

第四十番　伊豫國南宇和郡觀自在寺藥師如來

心願や。自在の春に。花咲きて

憂世のがれて。住むやけだもの。

第四十一番　同國北宇和郡龍光寺十一面觀音

このかみは。三國流布の。密教を

守りたまはん。誓とぞきく。

第四十二番　同國同郡佛木寺　大日如來

草も木も。佛になれる。佛木寺

なほ賴もしき。鬼畜人天。

第四十三番　同國東宇和郡明石寺千手觀世音

聞くならく。千手の誓ひ。不思議には

大盤石も。輕くあげいし。

第四十四番　同國上浮穴郡大寶寺十一面觀音

今の世は。大悲の惠み。すがらさん

終には彌陀の。誓ひをぞ待つ

第四十五番　同國同郡岩屋寺　不動明王

大聖の。祈る力の。げに岩屋

石のなかにも。極樂ぞある。

第四十六番　同國下浮穴郡淨瑠璃寺藥師如來

極樂の。淨瑠璃世界。訪へば

受くる快樂は。むくひならまし。

第四十七番　同國同郡八坂寺　阿彌陀如來

花を見て。歌詠むひとは。八坂寺

讃佛乘の。緣とこそきけ。

第四十八番　同國溫泉郡西林寺　十一面觀音

彌陀佛の。世界を尋ね。聞きたくば

西の林の。寺へ參れよ。

第四十九番　同國同郡淨土寺　釋迦如來

十惡の。わが身を捨てず。そのまゝに

淨土の寺へ。參りこそすれ。

第五十番　同國同郡繁多寺　藥師如來

よろづこそ。繁多なりとも。怠らず

諸病なかれと。望みいのれよ。

第五十一番　同國同郡石手寺　藥師如來

西方を。餘處とは見まじ。安養の

寺に參りて。受る十樂。

第五十二番　同國和氣郡太山寺十一面觀世音

太山へ。登れば汗の。出でけれど

後の世思へば。なにの苦もなし。

第五十三番　同國同郡圓明寺　阿彌陀如來

來迎の。彌陀の光の。圓明寺

照りそふ影は。夜な〳〵の月。

第五十四番　同國越智郡延命寺　不動明王

曇りなき。鏡の緣と。ながむれば

殘さず影を。映すものかな

第五十五番　同國同郡別宮　大通智勝佛

このところ。みしまに夢の。覺めければ

別宮とても。おなじ乘跡。

第五十六番　同國同郡泰山寺　地藏菩薩

みな人の。參りてやがて。泰山寺

來世の引導。賴みおきつゝ。

第五十七番　同國同郡八幡榮福寺阿彌陀如來

この世には。弓矢を守る。八幡なり

來世は人を。救ふ彌陀佛。

第五十八番　同國同郡仙遊寺　千手觀世音

立ちよりて。されのだらに。やすみつゝ

六字を唱へ。經を讀むべし。

第五十九番　同國同郡國分寺　藥師如來
守護のため。とても崇むる。國分寺
いよ〳〵惠む。藥師なりけり。

第六十番　同國周布郡横峰寺　大日如來
たてよこに。峰や山邊に寺建てゝ
普く人を。救ふものかな。

第六十一番　同國同郡香苑寺　大日如來
後の世を。怖るゝ人は。香苑寺
とめてとまらぬ。白瀧の水。

第六十二番　同國同郡一の宮　十一面觀世音
五月雨の。後に出でたる。玉の井は
白壺なるや。一の宮河。

第六十三番　同國新居郡吉祥寺　毘沙門天王
身のなかの、あしき誹謗を。うち捨てゝ
みな吉祥を。望み祈れよ。

第六十四番　同國同郡前神寺　阿彌陀如來
まへは神。うしろは佛。極樂の
よろづの罪を。摧く石槌。

第六十五番　同國宇摩郡三角寺十一面觀世音
おそろしや。三つの角にも。入るならば
心を圓く。彌陀を念ぜよ。

第六十六番　讃岐國阿波三好郡雲邊寺　千手觀世音
はる〳〵と。雲のほとりの。寺に來て
月日をいまに。麓にぞ見る。

第六十七番　同國豊田郡小松尾寺　藥師如來
植ゑおきし。小松尾寺を。眺むれば
法の教への。風ぞ吹きぬる。

第六十八番　同國同郡琴彈山八幡宮　阿彌陀如來
笛の音も。松吹く風も。琴彈くも
歌ふも舞ふも。法のこゑ〳〵。

第六十九番　同國同郡觀音寺　聖觀音
觀音の。大悲の力。强ければ
重き罪をも。引上けてたべ。

第七十番　同國三野郡本山寺　馬頭觀音
本山に。誰か植ゑける。花なれや
春こそ手折れ。手向にぞなる。

第七十一番　同國同郡彌谷寺　千手觀音
惡人と。行き連れなんと。彌谷寺
たゞ假初も。善き友ぞよき。

第七十二番　同國多度郡曼荼羅寺　大日如來
わづかにも。曼荼羅おがむ。人はたゞ
ふたゝびみたび。歸らざらまし。

第七十三番　同國同郡出釋迦寺　釋迦如來
迷ひぬる。六道衆生。救はんと
尊き山に。出づる釋迦寺。

第七十四番　同國同郡甲山寺　藥師如來
十二神。味方に持てる。軍には
おのづと心。甲山かな。

第七十五番　同國同郡善通寺　藥師如來
われ住まば。よも消えはてじ。善進寺
深き誓ひの。法のともしび。

第六十六番　同國那珂郡金倉寺　藥師如來
まことにも。金佛倉を。開くれば
眞言加持の。不思議なりけり。

第七十七番　同國多度郡道隆寺　藥師如來
願ひをば。佛道隆に。入れはてゝ
菩提の月を。見まくほしさよ。

第七十八番　同國綾歌郡道場寺　阿彌陀如來
躍り跳ね。念佛申す。道場寺
拍子を揃へ。鉦を打つなり。

第七十九番　同國同郡高照院　十一面觀音
常樂の。憂世のなかを。尋ぬべし
天王さへも。さすらへぞある。

第八十番　同國綾歌郡國分寺　千手觀音
國を分け。野山を凌ぎ。寺々に
參れる人を。救けましませ。

第八十一番　同國同郡白峰寺　千手觀音
霜寒く。露白妙の。寺のうち
御名を唱ふる。法のこゑ〳〵。

第八十二番　同國綾歌郡根香寺　千手觀音
宵の間の。たへふる霜の。消えぬれば。
後こそ鐘の。勤行の聲。

第八十三番　同國香川郡一の宮　聖觀音
讃岐一の。宮の御前に。仰ぎきて
神の心を。誰かしらゆふ。

第八十四番　同國木田郡屋島寺　千手觀音
梓弓。屋島の宮に。詣でつゝ
祈りをかけて。勇む武士。

第八十五番　同國同郡八栗寺　聖觀音
煩惱を。胸のちくわにて。八栗をば
修行者ならで。誰か知るべし。

第八十六番　同國大川郡志度寺　十一面觀音
いざさらば。今宵はこゝに。志度の寺
祈りの聲を。耳に觸れつゝ。

第八十七番　同國同郡長尾寺　聖觀音
足曳の。山鳥の尾の。長尾寺
秋の夜すがら。彌陀を唱へよ。

第八十八番　同國同郡大窪寺　藥師如來
南無藥師。諸病なかれと。願ひつゝ。
參れる人は大窪の寺。

三　秩父靈場三十四ヶ所觀世音御詠歌

第一番　誦經山妙音寺　聖觀音
ありがたや。一卷ならぬ。法の花
數は四万部の寺のいにしへ

第二番　大棚山眞福寺　聖觀音
巡りきて。頼をかけし。大棚の
誓もふかき。谷川の音。

第三番　岩本山常泉寺　聖觀音
補陀洛や。岩本寺と。拜むべし
峰の松風。響く瀧つ瀬。

第四番　高谷山荒木寺　十一面觀音
あらたかに。參りて拜む。觀世音
二世安樂と。誰も祈らん。

第五番　小川山語歎堂　準胝觀音

父母の惠みもふかき。語歎の堂
大慈大悲の。誓たのもし。

第六番　向陽山卜雲寺　聖觀音
初秋に。風吹きむすぶ。をぎのだう
宿借りの世に。夢ぞ覺めける。

第七番　青苔山法長寺　十一面觀音
六道を。かねてめぐりて。拜むべし
また後の世を。聞くもうしぶし。

第八番　青泰山西善寺　十一面觀音
たゞ賴め。まことの時は。西善寺
來り迎へん。彌陀の三尊。

第九番　明星山明智寺　如意輪觀音
巡りきて。その名を聞けば。明智寺
心の月は。曇らざるらん。

第十番　萬松山大慈寺　聖觀音
ひたすらに。賴みをかけよ。大慈寺
六つの衢の。國かはるべし。

第十一番　南石山常樂寺　十一面觀音

罪咎も。消えよと祈る。坂氷
朝日はさゝで。夕日かゞやく。

第十二番　佛道山野坂寺　聖觀音
老の身に。苦しきものは。野坂寺
いま思知れ。後の世の道。

第十三番　旗下山慈眼寺　聖觀音
御手にもつ。蓮の簫。のこりなく
浮世の塵を。簇の下寺。

第十四番　長覺山今宮坊　聖觀音
昔より。立つともしらぬ。今宮へ
參る心は。淨土なるらん。

第十五番　母巢山藏福寺　十一面觀音
巡りきて。その名を聞けば。明智寺
嬰子の。母巢の森の。藏福寺
父もろともに。誓もらすな。

第十六番　無量山西光寺　千手觀音
西光寺。誓を人に。尋ぬれば
終の栖かは。西とこそ聞け。

第十七番　寶正山定林寺　十一面觀音

あらましか。思ひ定めし。林寺
　鐘聞きあへば。夢ぞ覺めける。
第十八番　神門山長生院　聖觀音
たゞたのめ。六族ともに。大悲をば
　神門にたちて。救けたまへる。
第十九番　飛淵山龍石寺　千手觀音
天地を。うごかすほどの。龍石寺
　參る人には。利生あるべし。
第二十番　法王山岩上寺　聖觀音
苔莚。敷きてもとまれ。岩のうへ
　玉の臺も。朽ちはつる身を。
第二十一番　要光山觀音寺　聖觀音
あづさゆみ。いる矢の堂に。詣できて
　願ひし法に。當たるうれしき。
第二十二番　西陽山榮福寺　聖觀音
極樂を。こゝで見つけて。わらうだう
　のちのよまでも。たのもしきかな。
第二十三番　松風山音樂寺　聖觀音
音樂の。御聲なりける。小鹿坂の
　調べにかよふ。峰の松風
第二十四番　光智山法泉寺　聖觀音
天照す。神のはゝその。色かへて
　なほも降りぬる。雪の白山。
第二十五番　岩屋山久昌寺　聖觀音
水上は。いづくなるらん。岩屋堂
　朝日雲なく。夕日かゞやく。
第二十六番　萬松山圓融寺　聖觀音
尋ねいり。結ぶ清水の。いはゐだう
　心の垢を。すゝがぬはなし。
第二十七番　龍河山大淵寺　聖觀音
夏山や。繁木が本の。露までも
　心へだてぬ。月の影森。
第二十八番　石龍山橋立寺　馬頭觀音
霧の海。立ち重なるは。雲の波
　類ひあらじと。渡る橋立。
第二十九番　笹戸山長泉院　聖觀音
わけ登り。結ぶ笹の戸。押開き
　佛を拜む。身こそたのもし。
第三十番　瑞龍山法雲寺　如意輪觀音
一心に。南無觀音と。唱ふれば
　慈悲深谷の。誓たのもし。
第三十一番　鷲窟山觀音院　聖觀音
深山路を。かきわけ尋ね。行きみれば
　鷲の窟に。響く瀧つ瀨。
第三十二番　石船山法性寺　聖觀音
願はくば。般若の船に。法をえて
　いかなる罪も。浮ぶとぞ聞く。
第三十三番　延命山菊水寺　聖觀音
春や夏。冬も盛りの。菊水寺
　秋をなゝめに。送る年月。
第三十四番　日澤山水潛寺　千手觀音
万代の。願をこゝに。納めおく
　苔の下より。いづる水かな。

四　阪東靈場三十三ヶ所觀世音御詠歌

第一番　大藏山杉本寺　相模國鎌倉郡鎌倉町　十一面觀音
賴みある。知邊なりけり。杉本の
　誓は末の。世にもかはらじ。
第二番　海前山岩殿寺　同國三浦郡田越村　十一面觀音
立寄りて。天の岩戸を。押開き
　佛を拜む。身こそ賴もし。
第三番　祇園山田代寺　同國鎌倉郡鎌倉町　千手觀音
枯木にも。花咲く誓。田代寺
　世をのぶつなの。跡ぞ久しき。
第四番　海光山長谷寺　同國　同郡同町　十一面觀音
長谷寺へ。參りて沖を。眺むれば
　由井の汀に。たつは白浪。
第五番　飯泉山勝福寺　同國足柄下郡豐川村　十一面觀音
叶はねば。救けたまへと。祈る身に
　船に寶を。つむは飯泉。
第六番　飯上山長谷寺　同國愛甲郡小鮎村　十一面觀音

飯山寺。立ちそめしより。盡きせぬは
　入相ひゞく。松風の音。
第七番　金目山光明寺　同國中郡　金目村　聖觀音
何事もいまは叶ひの。觀世音。
　二世安樂と。誰か祈らん。
第八番　妙法山星谷寺　同國高座郡　座間村　聖觀音
障りなす。迷ひの雲を。吹拂ひ
　月もろともに。拜む星の谷。
第九番　都幾山慈光寺　武藏國比企郡　平村　千手觀音
開くからに。大慈大悲の。慈光寺
　誓もともに。深き岩殿。
第十番　岩殿山正法寺　同郡同村　高坂町　千手觀音
後の世の。道をひきみの。觀世音
　この世をともに。救けたまへや
第十一番　岩殿山安樂寺　同國同郡西吉見村　聖觀音
よしみよと。天の岩戸を。押開き
　大慈大悲の。誓たのもし。
第十二番　花林山慈恩寺　同國南埼玉郡慈恩寺村　千手觀音

慈恩寺へ。參る我身も。たのもしや
　うかぶ景色を。見るにつけても
第十三番　金龍山淺草寺　淺草　聖觀音
深き咎。いまより後は。よもあらじ
　罪淺草へ。參る身なれば。
第十四番　端應山弘明寺　神奈川　弘明寺町　十一面觀音
此度は。君のおほせの。弘明寺が
　江戸品川を。うらに見てゆく。
ありがたや。ちかひのうみを。かたむけて
　そゝぐめぐみに。さむるほのやみ。
第十五番　白岩山長谷寺　上野國群馬郡久留馬村　十一面觀音
誰もみな。祈りごゝろは。白岩の
　長谷の誓。たのもしきかな。
第十六番　五德山水澤寺　同國同郡伊香保村　千手觀音
たのみくる。心も清き。水澤の
　深き願を。得るぞうれしき。
第十六番　出流山滿願寺　下野國下都賀郡寺尾村　千手觀音
故郷を。はる〴〵これへ。立出づる
わが行末は。何處なるらん。
第十八番　日光山中禪寺　同國上都賀郡日光町　千手觀音
中禪寺。登りて拜む。湖の
　歌の濱路に。立つは白浪。
第十九番　天開山大谷寺　同國河內郡城山村　千手觀音
名を聞くも。惠大谷の。觀世音
　導きたまへ。知るも知らぬも。
第二十番　獨鈷山西明寺　同國芳賀郡益子町　十一面觀音
西明寺。誓をこゝに。尋ぬれば
　終の栖は。西とこそ聞け。
第二十一番　八溝山日輪寺　常陸國久慈郡黑澤村　十一面觀音
迷ふ身が。いまは八溝へ。參りきて
　佛の光。山もかゞやく。
第二十二番　妙福山佐竹寺　同郡同村佐竹村　十一面觀音
ひとふしに。千代をこめたる。佐竹寺
　霞がくれに。見ゆる群松。
第二十三番　佐白山正福寺　同郡西茨城郡笠間町　千手觀音
はる〴〵と。登りて拜む。佐白山
　いつも絕えせぬ。松風の音。
第二十四番　雨引山樂法寺　同國眞壁郡雨引村　十一面觀音
常陸なる。佛の山を。うち越えて
　雨引寺へ。急ぐこの旅。
第二十五番　筑波山大御堂寺　常陸國筑波郡筑波町　千手觀音
大御堂。鐘は筑波の。音にたて丶
　片夕暮に。國ぞ戀しき。
第二十六番　南明山清瀧寺　同國新治郡山ノ莊村　聖觀音
わがこゝろ。いまより後は。濁らじな
　清瀧寺へ。參る身なれば。
第二十七番　飯沼山圓福寺　下總國海上郡本銚子町　十一面觀音
このほどは。よろづのことを。飯沼に
　聞きもならはぬ。波の音かな。
第二十八番　滑河山龍正院　同國香取郡滑川町　十一面觀音
音に聞く。滑河寺の。袈裟淵
　網衣にて。救ふなりけり。
第二十九番　海照山千葉寺　下總國千葉郡千葉町　十一面觀音
千葉寺へ。參るわが身も。たのもしや

岸うつ波に。船ぞ浮むる。

第三十番　平野山高倉寺　上總國君津郡鎌足村　聖觀音

はるゞ〳〵と。登りて拜む。高倉や

　淵にうつらふ。あさはなるらん。

第三十一番　大悲山笠森寺　同　長生郡水上村　十一面觀音

日は暮るゝ。雨はふるのゝ。道すがら

　かゝる旅路を。たのむ笠森。

第三十二番　音羽山清水寺　同國安房郡國吉村　千手觀音

濁るとも。千尋の底は。澄みにけり

　清水寺に。結ぶ閼伽桶。

第三十三番　補陀洛山那古寺　安房國安房郡那古町　千手觀音

補陀洛や。よそにはあらじ。那古寺

　岸うつ波を。見るにつけても。

五　釋迦如來三十二相御詠歌

第一番　高頂肉髻無見相　三會寺

辿りきて。仰ぐ高頂。肉髻の

　御相たふとし。鳥山の寺。

第二番　髮毛右旋梵天相　最勝寺

御髮の。右に旋く。御姿を

　菅田の寺に。拜むうれしさ。

第三番　眉間白毫右旋相　東泉寺

羽澤の。和泉はつきじ。とことはに

　白毫ひかる。御佛の德。

第四番　獅子頰輪威嚴相　青蓮寺

青蓮寺。その名も清し。御佛の

　師子頰輪の。嚴かにして

第五番　牛王眼睫不亂相　長福寺

篠原や。繁き浮世の。煩ひも

　不亂の御眼に。やどるよしなき。

第六番　眼晴紺青分明相　能滿寺

たのもしや。能滿願の。誓には

　無下の眼の。紺青のいろ。

第七番　四十齒齊逾雪相　藥王寺

四十數の。御齒の齒並の齊へる

　五德と齊ふ。世をこそいのれ。

第八番　美潤齊齒平等相　遍照院

遍照の光をいまに。子安寺

　御齒うるはしき。御佛ぞます

第九番　齊齒綴密無隙相　龍泉寺

とことはに。誓もらさぬ。御相かも

　齊齒綴密に。おはす御佛。

第十番　四牙鮮白鋒利相　歡成院

太尾なる。歡成院の。御佛の

　四牙鮮白ぞ。降伏の相。

第十一番　舌相廣長覆面相　長光寺

御佛の。廣長舌の。御法をば

　慕ひぞまつる。大曾根の寺。

第十二番　常得上味適悅相　圓應寺

圓應寺。舌相妙味。得給ひし

　御佛拜む。この身たのしき。

第十三番　梵音和雅等聞相　光明寺

梵音や。和雅なる御聲。いまもなほ

　光明寺に。聞くぞうれしき。

第十四番　體相縱廣等量相　西方寺

西方の。尊き姿に。たとへける

　御容いとも。かしこかりけり。

第十五番　容儀洪滿端嚴相　宗光寺

洪滿の。御相をいまも。宗光寺

　光の影に。仰ぎけるかな。

第十六番　七處充滿愛樂相　東觀寺

東觀寺。七處充滿。愛樂の

　惠み普し。參れひとゞく。

第十七番　縵腕悉皆充實相　林光寺

御佛の。縵腕まどか。充ち滿つる

　御力をこそ。たのみまつらめ。

第十八番　胸臆身半獅子相　寶塔院

寶塔院。これぞ胸臆。身半の

　御相と聞くも。尊とかりけり。

第十九番　身色光耀金體相　萬藏寺

黃金なす。御光こゝは。とことはに

　浮世の暗を。照らす御光。

第二十番　皮膚細軟離塵相　無量寺
白露や。汚に染まぬ。蓮葉の
　それより清き。御佛のはだ。
第二十一番　毛孔一生右旋相　觀音寺
觀音寺。毛孔一生、右旋なる
　御相ぞ法の。姿なりけり。
第二十二番　身毛上靡妙色相　長王寺
長王寺。參りて拜む、御佛は
　身毛上靡、こうじようのさう。
第二十三番　陰相藏密象王相　福聚院
象密の。慚愧懺悔の。報果にて
　福壽の因に、滿つる功德ぞ。
第二十四番　兩臂修直摩膝相　東漸寺
東漸寺。その名はうれし。御佛の
　修直摩膝の。御手ぞ此土へ。
第二十五番　雙臨漸次織圓相　觀護寺
いざ拜め。雙臨漸次　織圓相
　小山の里に。おはす御佛。

第二十六番　足跟廣長稱跌相　圓光寺
廣長の。足跟これぞ。御佛の
　御跡を慕へ。榎の下の里。
第二十七番　足趺修高稱跟相　舊城寺
舊城寺。足趺修高。稱跟の
　御姿とはに。あらたなるかも。
第二十八番　指間網縵金色相　慈眼寺
第二十八番　身毛上靡妙色相　長王寺
たのもしや。あまねく誓ひ。漏らさじと
　慈悲の御手には、網縵の相。
第二十九番　諸指圓滿繊長相　長泉寺
長泉寺。御指圓滿。繊長の
　御姿ゆかし。中山の里。
第三十番　手足柔軟勝餘相　長源寺
川井寺。手足柔軟、勝餘相
　みなもとながき。誓ひたのまむ。
第三十一番　千輻輪文圓滿相　普光寺
あまねくも。照らす光りは。千輻輪
　御惠とはに。あらたなるらむ。

第三十二番　足下平滿等觸相　定泉寺
世の道を。ふみ修むれば。田谷の寺
　足下平滿、等觸の相。

六　地藏大菩薩四十八體御詠歌

第一番　佛身繩目地藏　壬生　壬生寺
高大の。御法をのべて。六つの輪は
　こゝの佛の。寶なりとぞ。
第二番　菩薩身水上地藏　綾小路大宮　光林寺
水上に。浮べる影の。緣きけば
　西の御國ぞ。いとゞなつかし。
第三番　辟支佛身雀森地藏　四條大宮西　更雀寺
鳥だにも。囀る法の。場なれば
　緣結ばぬ、人ははかなき。
第四番　聲聞身養老地藏　同　上東隣　語眞寺
憐みの。深きあまりに。のこしおく
　老を養ふ。法の教へを。
第五番　梵王身萬人講地藏　錦小路大宮　休務寺
萬人に。限りやはする。御佛の
　誓の海に。はかりなければ。
第六番　帝釋身延命地藏　大宮蛸藥師　成圓寺
法の身の。壽延ぶる。それのみが
　露の命も。保つ誓ぞ。
第七番　閻魔王身幸福地藏　智惠光院下立賣　昌福寺
けにやこの。佛の惠み。うけぬれば
　富も榮も。長き玉の緒。
第八番　毘沙門身見返地藏　下立賣千本　勝巖院
生ける身の。よそほひしめす。見返りの
　佛の御影。たのもしきかな。
第九番　日天身妻取地藏　下立賣千本　祐正寺
假初の。色のゆかりの。契のみ
　結ぶばかりと。人なおもひそ。
第十番　月天身腹帶地藏　鍋町六軒町　報土寺
わきて世の。たゞならぬ身を。憐みの
　深きあまりに。結ぶ腹帶。
第十一番　火曜星身跡追地藏　御前通一條　超圓寺
第五番　梵王身萬人講地藏　錦小路大宮　休務寺
第六　順禮歌　四六九

契をば。結ぶ堅田の。觀世音
　また立ちならぶ。跡追のかけ。

第十二番　土曜星身毘陽野地藏　一條通紙屋川
津の國の。毘野の古寺。ふりすてゝ　地藏院
　九重てらす。法の燈。

第十三番　木曜星身玉體等身川崎地藏　七本松一條
すべらきの。玉の姿に。御佛の　清和院
　影等しきは。またためしなき。

第十四番　金曜星身淨土引接地藏　淨福寺一條
徒し世の。願を滿つる。それのみか　淨福寺
　つひに誘ふ。御佛の國に。

第十五番　水曜星身六臂地藏　智惠光院一條智惠光院
身ひとつを。六つの衢に。たむけしと
　世に類なき。御佛のかけ。

第十六番　日曜星身釘抜地藏　千本上立賣石像寺
世々ふとも。ゆるぎもやせじ。うらみ釘
　佛の御手に。取るぞかしこし。

第十七番　月曜星身天神同體地藏　千本頭蓮臺寺

ちはやふる。神の社と。思ひしに
　またうへもなき。花の古寺。

第十八番　羅睺星身逆川地藏　同蓮臺寺內
仇となる。人だに救ふ。しるしには　地藏院
　さかさま川と。名乘る御佛。

第十九番　計都星身木槿地藏　上御靈室町西林寺
いにしへの。木槿をとめし。法の場
　西の林の。名さへたのもし。

第二十番　天輪聖王身土止地藏　寺町上御靈西園寺
横河なる。流れをこゝに。土止めて
　法の數々。うちもおさむる。

第二十一番　小王身王城地祭地藏　同上三丁佛陀寺
すべらぎの。花の都を。誰らんと
　たつる誓の。いとも妙なる。

第二十二番　長者身水落地藏　百萬遍山內了蓮寺
御佛の。惠みのはやき。なぞらへに
　たかまの水の。落つる姿を

第二十三番　居士身鎌倉地藏　眞如堂南地藏堂

神樂岡。鈴の音に添ふ。六つの輪や
　うち振りすます。長き眠を。

第二十四番　宰官身米野地藏　三條白川橋尊勝院
大海の。一つ雫か。米めぐみ
　黄金の倉と。寺をいふなり。

第二十五番　婦女身衣通姫地藏　東山通二條西方寺
いにしへの。衣通姫の。本の身に
　かへし光は。世々に照りそふ。

第二十六番　比丘身夢見地藏　二條西寺町三福寺
雲のうへ。結びし夢に。隙晴れ
　のこる御影や。三つの幸ひ。

第二十七番　比丘尼身袖取地藏　三條大橋東法林寺
袖取りて。とめてしもがな。迷ひ子の
　暗き闇に。迷ひ入りなば。

第二十八番　優婆塞身那落化現地藏　寺町三條上矢田寺
いふならく。奈落に沈む。苦しみを
　はてしも知らず。代り浮くてふ。

第二十九番　優婆夷身西院川原地藏　新京極誓願寺
　結びし岩田。帶安く解く。

第三十番　天身常盤華地藏　新京極裏寺町光明寺
いとけなき。童べの爲に。父となり
　母ともなりて。救ふ御佛。

第三十一番　龍王身醒井地藏　同町東側妙心寺
枯木だに。花咲くてふの。誓あれば
　摘みにし樒。むべ常盤なり。

第三十二番　夜叉身弟兒地藏　同町南向ヒ常樂寺
長き世の。夢醒ケ井の。水掬び
　人は妙なる。心覺らん。

第三十三番　乾闥婆身鯉地藏　新京極蛸藥師蛸藥師寺
咲けば散る。かみがたなれど。撫子の
　花の弟兒を。守る御佛。

第三十四番　阿修羅王身腹帶地藏　同所北隣西光寺
流れなば。つひに水屑と。なるものを
　ふくみあたへし。鯉は名も誰そ。

第三十五番　伽留羅王身枕反地藏　同所錦上善長寺
身二つに。分くる誓の。清ければ
　結びし岩田。帶安く解く。

六つの輪の。杖に導く。假の世や
　假の枕を。反すにも知れ。

第三十六番　緊那羅王身染殿地藏　四條京極角
いにしへも。いま後の世も。限りなく　十住心院
　救ふ心は。深き染殿。

第三十七番　摩睺羅王身目病地藏　建仁寺四條
みるめなき。あまたの人の。歎きには　仲源寺
　代り病ふ。法の昔。

第三十八番　醫王身鬘掛地藏　六波羅堂
たらちねの。親の屍を。かくしつゝ　六波羅蜜寺
　鬘掛けしは。賤の女のため。

第三十九番　藥草王身夢見地藏　八坂塔ノ内
罪なきに。沈む牢屋の。くるしみを　法觀寺
　露に喩して。人を救けし。

第四十番　商人身身代地藏　東山靈山
かけまくも。かはる御影や。越方の　正法寺
　罪の報ひの。逃れなければ。

第四十一番　農人身勝軍地藏　同清水本堂
名も高き。音羽の山の。軍神　清水寺
　その勳に。御代ぞ治まる。

第四十二番　象王身玉章地藏　東福寺山内
花の色、さもあらばあれ。玉章の　退耕庵
　たえぬ光や。五菩薩の影。

第四十三番　獅子王身獅子地藏　大佛耳塚前
東路の。大井の川の。漲りに　專定寺
　獅子となりてぞ。人渡すなり。

第四十四番　牛王身乳房地藏　下寺町裏町
嬰子を。わきて惠みの。いちじるき　福田寺
　乳房の求め。叶はぬはなし。

第四十五番　馬王身駒止地藏　下寺町五條
駒止めし。佛はいつか。駒の身と　蓮光寺
　化しても救ふ。誓ありとぞ。

第四十六番　大地形身手引地藏　同北隣
かけまくも。かはる御影や。越方の　極樂寺
世を載する。土の姿を。あらはして
　菩薩の惠み。限り知られず。

第四十七番　山王形身來迎地藏　同北隣
御判いたゞく。極樂の印。　新善光寺

第五番
山谷を。はるゞ〳〵越せば。善光寺
　この世あの世の。土產血脈。

第六番
義光の。彌生は花よ。親も子も
　たゞ人ならぬ。佛なるらん。

境七番
遠くとも。一度參れ。善光寺
　救け給ふぞ。彌陀の誓願。

第八番
若きとて。末を長きと。思ふなよ
　無常の風は。時をきらはず。

第九番
一度は。消ゆる命と。思ふなよ
　罪造るなよ。後の世の爲。

第十番
明日ありと。思ふこゝろの。あだ櫻
　曇りなき。身は晴れやらん。彌陀如來

七　信濃國善光寺御詠歌

第一番
埋もれて。難波の池の。彌陀如來
　背に負ひます。本多義光。

第二番
心ざす。國は信濃の。邊にて
　臼に据ゑます。これぞ淋しき

第三番
身はこゝに。心は信濃の。善光寺
　導きたまへ。彌陀の淨土へ。

第四番
曇りなき。身は晴れやらん。彌陀如來
　いとゞなほ。仰げばたかし。蘇迷盧の
山の姿と。尊まれぬる。

第四十八番　大海形身泥附地藏　同北隣
四十あまり。八つの姿に。めぐりあひて　本疊寺
　御法の海の。深きをぞ知る。

夜の嵐は。吹かぬものかは。

第十一番

彌陀たのむ。心のうちは。曇りなき
　佛も去らぬ。身をも離れず。

第十二番

急げひと、彌陀の御船の。通ふまで
　乘りおくれなば。いつか渡らん。

第十三番

極樂へ。つとめてはやく。出でたなら
　身の終には。參るものなり。

第十四番

唱ふれば。こゝに居ながら。極樂の
　衆生の數に。入るぞうれしき。

第十五番

先だてば。後れる人を。待ちあはせ
　花の臺に。名をばのこして。

第十六番

ありがたや。玉の簾を。まきあけて
　念佛の聲を。聞くぞうれしき。

第十七番

阿彌陀ほど。慈悲な佛は。なけれども
　たのまぬものは。救ひとられず。

第十八番

極樂の。鐘のひゞきに。目を覺まし
　五色の雲に。添ふぞうれしき。

第十九番

待ちかねて。歎くと告げよ。皆人に
　いつもいつとて。急がざるらん。

第二十番

いさのうみ。清き流れの。あらはれて
　われは濁らぬ。水にやどらん。

第二十一番

法の船。知るも知らぬも。わたすべし
　西へ行くべき。船の便りに。

八　京都六阿彌陀御詠歌

第一番　東山眞如堂

世に超えし。大願力の。尊とさよ
　慈悲のほかなる。不可思議の慈悲。

第二番　東山永觀堂

南無阿彌陀。とばかり聞くぞ。身を變へぬ
　この世ながらの。佛なりけり。

第三番　東山清水阿彌陀堂

清水の。瀧へ參れば。自ら
　現世安穩。後世極樂。

第四番　東山安祥院

阿彌陀佛。誓の船に。身をよせて
　他力の風に。まかせてぞ吹く。

第五番　京極安養寺

三つの罪。五つの障り。深くとも
　捨てぬ佛の。誓たのめば。

第六番　新京極誓願寺

極樂に。壽命無量に。ながむれば
　樂しみもまた。盡きぬことなし。

九　武州六阿彌陀御詠歌

第一番　西福寺

なの字から。巡りはじめし。そのもとぎ
　一世のうちの。緣となるらん。

第二番　惠命寺

むがうへは。御法の船で。越す沼田
　二度もとの。道へ向はん。

第三番　無量寺

ありがたや。阿彌陀の淨土。西ケ原
　三界衆生。殘るものなし

第四番　興樂寺

みながいま。この世で種を。蒔け田端
　しかも佛果に。實のるうれしさ

第五番　常樂院

たくさんに。唱へし口の。このしたや
　いつともなしに。開く蓮臺。

第六番　常光寺

佛體を。巡りしまひし。龜戸や
六身南無や。あみだぶつ〳〵。

一〇 山城國六道地藏尊六所御詠歌

第一番　六地藏　伏見城山東
浮き沈み。六地を巡る。六地藏
大悲の袖の。乾く暇なし。
第二番　鳥羽　上鳥羽村
雨風も。厭はで渡す。鳥羽の堂
御法の船の。楫にまかせて。
第三番　桂　下桂村
信心は。月の桂の。地藏尊
六つの衢の。闇路照らしぬ。
第四番　常盤　太秦常盤村
常盤なる。松の願の。色見えて
梢の月を。拜むうれしさ。
第五番　鞍馬口　寺町頭
宿替へて。御菩薩もいまは。鞍馬口
入りくる人を。導きにけり。
第六番　山科　大津街道
巡りくる。人も願の。數あれば
慈悲も積るや。山科の堂。

一一 諸佛御詠歌

山城國柳谷　千手觀世音
御佛の。なびく柳の。谷水は
汲むに老いせぬ。藥なりけり。
奥の院
うらゝかや。柳も風に。なびかれて
佛の御影。うつる谷水。
第一番　奈良二月堂十一面觀世音
ありがたや。不思議は一か。二月堂
若狹の水を。迎ひ汲みとる。
第二番
行ひの。法の燈。ありければ
二世安樂を。祈るなるらん。

第三番
世を救ふ。ひろき惠みは。瀧つ瀨の
流れてたえぬ。法の水かな。
第四番
きさらぎの。堂におさむる。順禮歌
くりかへしよむ。瀧の白糸。
第五番
煩惱の。垢をすゝぎて。二月堂
萬の病。癒す瀧つ瀨。
西國　手引觀世音
あらたふと。手引きたまへる。觀世音
高き賤しき。人も擇まず。
京都　清水　奥院　千手觀世音
瀧つ瀨は。たえず流るゝ。清水を
結ぶ誓は。奥の白浪。
子安　千手觀世音
胎内に。宿しよりも。頼みつる
子安の堂へ。參る身なれば。

近江國　立木　觀世音
濁る世の。人を立木の。そのまゝに
捨てぬ誓を。頼むばかりぞ。
大和國　生駒山　十一面觀世音
十惡の。この身を捨てず。このまゝに
寶の山に。入るぞうれしき。
大阪　圓珠庵　十一面觀世音
假の世に。癡で苦しむ。人あらば
大慈大悲と。頼め救はん。
大阪　大福院　十一面觀世音
蘆そよぐ。鹽瀨の波の。いつまでか
浮世のなかに。浮びわたらむ。
攝州　吾彦山　厄除聖觀世音
殘なく。身の障をば。はらはなん。
緣吾彦の。寺に詣でゝ。
おなじく
波わけて。捧げし龍の。たなごゝろ
いまに佛の。臺とぞなる。

羽前國　湯殿山　聖觀世音
彼の岸に。願をかけて。大綱の
　引く手に漏るゝ。人はあらじな。
京都　三十三間堂　千手觀世音
數ふれば。ながき三十路の。三つのまに
　御法の聲も。數まさりして。
淺草　聖觀世音
深き咎。いまより後は。よもあらじ
　罪淺草へ。參る身なれば。
和泉國　堀越　觀世音
世のなかに。癒で苦しむ。人あらば
　大慈大悲を。たのめすくはん。
津の國　中山寺　奥の院
極樂の。東門ひらく。觀世音
　我を忘れて。唱へこそすれ。
おなじく
紫の。雲こそなびけ。行きて見ん
　吾彦の峰に。神ぞまします。

攝州　中山寺　石唐戸
極樂の。東門ひらく。觀世音
　我を忘れて。行きすごすなよ。
河內國　野崎　十一面觀世音
聞くならく。野崎の寺の。そのむかし
　江口の君の。名のみのこれる。
瑞光寺　觀世音
諸人の。賴みをこゝに。くぢら橋
　直なるこゝろ。守りたまはん。
攝津國　摩耶山　十一觀世音
摩耶の名を。佛の母と。聞くからは
　これぞまことの。慈悲の水上。
紀伊國　あぢの　觀世音
あら尊と。弘むる法や。花の山
　登ればこゝろの。暗も明けなん。
名古屋　大須　寶生院　觀世音
ものゝ數。拜み巡りて。罪深き
　我身もやがて　佛なりけり。

大和國　高市郡　小房　觀世音
たゞたのめ。大慈大悲の。觀世音。
　小房の里の。あらんかぎりは。
おなじく
かりのよに。癒で苦しむ。人あらば
　大慈大悲の。賴み救はん。
山城國　字治郡醍醐　一言寺　十一面觀世音
たゞたのめ。佛に虛は。なきものぞ
　二言いはぬ。一言寺かな。
山城字治　黃檗龍興院　子安　千手觀世音
自ら。こゝろ凉き。宇治川の
　淸き流れに。うつる月影。
準提觀世音
ありがたや。滿ちし願を。一筋に
　繰返しつゝ。祈る行末。

一二　弘法大師御詠歌

紀州伊都郡　高野山　奥院　弘法大師

ありがたや。高野の山の。岩蔭に
　大師は今に。在しまします。
おなじく
高野山。結ぶ庵に。袖朽ちて
　苔の下にぞ。有明の月。
弘法大師　御茶湯
立寄りて。お茶の功德の。足休め
　この世の功德。先の世のため。
東寺　弘法大師
空海の。心のうちに。唉くはなは
　彌陀よりほかに。知る人はなし。
仁和寺　弘法大師
わけのぼる。花の嵐の。梢より
　御室の山に。月ぞかゞやく。
西賀茂　神光院　弘法大師
あいけうの。誓をたのむ。西賀茂の
　神の影ある。寺に詣でゝ。
武藏國　大師河原　厄除大師

ありがたや。南無厄除の。平間寺
　大師の誓。あらたなりけり。
大阪　太融寺　弘法大師
發祥の。室としいへど。わが住めば
　有爲の波風。寄せぬ日ぞなき。
おなじく
はるゝ〳〵と。尋ね北野の。太融寺
　花の臺に。紫の雲。
大阪　玉造善福寺　どんどろ大師
高野山。御影仰ぎて。寄る人は
　萬の願。滿つとこそ聞け。
近江國信樂　玉桂寺　厄除大師
ならびなく。不思議はまさに。あらたなり
　惠み受けざる。人はあらまじ。
女人高野　大和國　室生山　弘法大師
身は高野。心は東寺に。在します
　大師は室に。有明の月。
おなじく

わが身をば。高野の山に。とゞむとも
　心は室に。有明の月。
紀伊國　熊野　弘法大師
空海の。教への道は。一束ね
　彌陀の淨土へ。共に南無阿彌。

一三　圓光大師二十五靈所御詠歌

第一番　美作國　誕生寺
二幡の。天降ります。椋の木は
　世々に朽ちせぬ。法のしもあと。
第二番　讃岐國　法然寺
おほつかな。誰か云ひけん。小松とは
　雲をさゝふる。高松の枝。
第三番　播磨國　十輪寺
生れては。まづ思ひでん。故郷に
　契りし友の。深き誠を。
第四番　攝津國　如來院
身と口と。意の外の。彌陀なれば
　我を離れて。唱へこそすれ。
第五番　攝津國　勝尾寺　二階堂
柴の戸に。明暮かゝる。白雲を
　いつ紫の。色にみなさん。
第六番　大阪　天王寺　念佛堂
阿彌陀佛と。こゝろを西に空蟬の
　もぬけはてたる。聲ぞ涼しき。
第七番　大阪　一心寺
阿彌陀佛と。云ふよりほかは。津の國の
　難波のことも。あしかりぬべし。
第八番　紀伊國　報恩講寺
極樂も。かくやあらまし。あらたのし
　はや參らばや。南無阿彌陀佛。
第九番　大和國　當麻奥院　往生院
阿彌陀佛と。申すばかりを。つとめにて
　淨土の莊嚴。見るぞうれしき。
第十番　大和國　天香久山　法然寺
香久やまや。麓の寺は。狹けれど
　高き御法を。說きて弘めん。
第十一番　奈良大佛　念佛堂
冴え晴れぬ。光のあるを。おしなべて
　へだてがほなる。朝霞かな。
第十二番　伊勢國　欣淨寺
やはらぐる。神の光りの。影滿ちて
　秋にかはらぬ。短夜の月。
第十三番　京の清水　奥の院
清水の。瀧へ參れば。自ら
　現世安穩。後生極樂。
第十四番　京の小松谷　正林寺
千歲ふる。小松のもとを。栖にて
　無量壽佛の。迎へをぞまつ。
第十五番　京都伏見　源空寺
一聲も。南無阿彌陀佛と。云ふ人の
　蓮のうへに。登らぬはなし。
第十六番　山城國　粟生　光明寺
露の身は。こゝかしこにて。消えぬとも

心はおなじ。花の臺ぞ。

第十七番　山城國　嵯峨　二尊院

足引の。山鳥の尾の。垂り尾の
　長々し夜を。祈るこの寺。

第十八番　おなじく　愛宕　月の輪寺

月影の。至らぬ里は。なけれども
　眺むる人の。心にぞすむ。

第十九番　京都　法然寺

たゞたのめ。よろづの罪は。深くとも
　わが本願の。あらんかぎりは。

第二十番　京都　誓願寺

極樂は。遙けきほどゝ。聞きしかど
　つとめて至る。ところなりけり。

第二十一番　山城國　大原　勝林院

阿彌陀佛に。染むる心の。色にては
　秋の梢の。類ひならまし。

第二十二番　山城國　百萬遍　知恩寺

われはたゞ。佛にいつか。あをひ草
　心の隅に。かけぬ日ぞなき。

第二十三番　京都　淨華院

雪のうち。佛の御名を。唱ふれば
　積れる罪も。やがて消えぬる。

第二十四番　京都　黒谷　光明寺

池の水。人の心に。似たりけり
　濁り澄むこと。定めなければ。

第二十五番　京都　華頂山　知恩院

草も木も。枯れたる野邊に。たゞひとり
　松のみのこる。彌陀の本願。

順禮歌（御詠歌）終

第七　補遺

寒念佛の讃

判官ほめ

一　判官に巡り逢うたの嬉しさよ。此處は半途の事なれば御馳走申す様もなし。さらば〳〵さんさらば。死して冥土へ行くときは、彌陀の淨土で逢ひ申さん。

同

一　判官に巡り逢うての禮儀なし。互に六字をせめければ、彌陀の光を共に被むる。

同

一　判官に巡り逢うたの嬉しさよ。判官殿の申す聲。春にとつては鶯の、櫻の小枝に羽を休め、初音をいだすにさも似たり。我等が念佛の聲聞けば、向ひ小岩の岩鼈蹶、上葉下葉を揉み合せ、風に揉めたる風情して、申しながらも心恥かし。南無阿彌陀。

他村の念佛ほめ

一　歸命頂禮此村に、念佛の道場立つと聞く。我等も彌陀を念ずれば、我等が念佛にむらあらば、出でて教へよ南無阿彌陀。

同

一　此村に彌陀の光の立つと聞く。我等も彌陀を念ずれば、彌陀の光の殊勝さよ。

他所の念佛に御地聲に逢ふ讃

一　判官の直の御地聲嬉しさよ。念佛申しいざ立たん。

他所念佛呼込みての讃

一　判官殿を呼込て、何の風情も是なきに、共にと唱へる稱名を、珍膳坐具と思召せ。

酒の讃

一　念佛の御座へとでる御酒は、三千世界を潤ほせる甘露の法雨を學びつゝ、一酒戴く其人は、十惡五逆の罪除く。

同

一　念佛の御座へと出る御酒を、一種戴く其人は、命壽命も永からん。

判官ほめ

一　歸命頂禮此村に、命の道場立つと聞く。我等も彌陀を念ずれば、彌陀の光は同じ事。我等が彌陀にむらあらば、出でて教へよ南無阿彌陀。

茶の讃

一　歸命頂禮此の御茶は、宇治の無上の小葉の茶か。旅の疲れで呑みや覺えぬ。

同

一　歸命頂禮此のお茶は、せいけんごとうの藥にて、無量の病を速く癒す。御茶の御禮は伊勢船に、積みや重ねて出し申さん。

同

一　歸命頂禮十七が、十二の小袖を着飾りて、心あるまにたてた茶を、旅の疲れで呑みや覺えぬ。

煙草の讃

一　花の御座へと出た煙草、たてかけんこか長崎か。さても見事なお葉むきや。莖をとらせて疊ませて、關小刀で刻ませて、白金烟管につぎこんで、唐絲火繩に火をつけて、吸へば甘露の花煙草。嗅げば壽命の種となる。

煙草

一　煙草の本地を尋ぬるに、美人の御墓へ參りては、名もなき草の生えてあり。それを煙草と名を附けて、

刈て萎いて木枯して、日本の人の慰みに。

村ほめ

一 歸命頂禮此村は、入は七口出は八口、入はよく見よ出場に迷ふな。

同

一 此町に祝の松とて三本あり。本には蔦がはえかゝり末には鷗が巢をくひて、十二の子供を產み育て、此町榮えと常に轉る南無阿彌陀。

辻の讃

一 歸命頂禮寒念佛。車地藏にいながれて、諸國巡りて辻に立ちよる。南無阿彌陀。

大辻の讃

一 津の國の難波の里と申するに、後世人一人おはします。冥土の沙汰は何をする、寒の念佛と申しつゝ、

日には三度の乞をとる。小寒大寒積りきて。

寺の大門

一 申し來て大門委しく眺むれば、杉や椹を植ゑまぜて沈や麝香の匂珍らし。

供養の讃

一 善男善女の集りて、供養とこそは御立ちあり。供養したる其人は、死して冥土へ行く時は、彌陀尊の來迎で、彌陀の淨土へ參るべし。

辻の讃

一 歸命頂禮此辻は、何たる人の踏み初めて、役の行者の踏み初めて、娑婆なる人の導くは、是は行者の容なり。死したる人の導くは、是は行者の光なり。

道陸神

一 歸命頂禮道祖神、宿世結びの神なれば、諸國巡りて辻に立ちよる。南無阿彌陀。

町ほめ

一 歸命頂禮此町は、縱が十五里横七里、七里の西の高見世の、葛籠皮籠の蓋はづし、沈や麝香の匂珍らし。南無阿彌陀。

寺の門

一 極樂の前に立ちたる黄金門。鍵ではさらに開かぬ門阿彌陀佛の六字で開きよる。

鎭守

一 鎭守樣。四つの柱は法華經で、中は極樂南無阿彌陀。

廣庭

一 廣庭さして申しきて、庭の懸りを眺むれば、切石立石手懸石、伽羅松唐松瑠璃の花、櫻の小枝の鶯は、ほうんけ經と鳴く時は、花と散りよる南無阿彌陀。

寺の讃

一 歸命頂禮大寺を、立ちより委しく眺むるに、唐より唐木を引下し、九十九間に御立あり。立巡り、破風の切目を眺むれば、世界の諸鳥が集まりて、此寺榮えと常に囀る。南無阿彌陀。

六地藏

一 歸命頂禮六地藏。何とて庭に御立ちある。衆生を救はん其爲に、庭に立ちよる。南無阿彌陀。

藥師の讃

一 歸命頂禮藥師樣、本地を委しく尋ぬるに、一の北橋うち渡り、三の屋中を詠むれば、唐の鰐口掛け並べそれより內をながむれば、金襴緞子の幕を吊り、それより奥を眺むれば、櫻色した兒達は、右の手には筆を持ち、左の手には帳を持ち、八日に十二日、二十二日の堂舍衆を、殘らず帳におつけある。是ぞ藥

師の本地なり。

橋の讃

一　有難や此橋は、善する人の渡るには、佛の來迎おはします。惡した人の渡るには、數多の大蛇が下り出で、渡らんやうもさらになし。念佛申しいざ渡らん。

寺の前の橋

一　歸命頂禮極樂の、前に掛けたる黃金橋。渡りて見れば極樂の、奥見えて南無阿彌陀。

同

一　歸命頂禮極樂の、前に掛けたる此橋は、寒の念佛をつめにとり、古き塔婆を橋にかけ、念佛申しいざ渡らん。

一　歸命頂禮佗たる善者の掛けたやら。善する人の渡るには、六尺二分に見て渡る。惡した人の渡るには、絲より細く見て渡る。念佛申しいざ渡らん。

一　歸命頂禮極樂の前に掛けたる黃金橋。佛の渡る橋なれば、念佛申しいざ渡らん。

山澤の橋の讃

一　山澤の澤に掛けたる一つ橋、二人渡れば中途せむ。しばし待ちやれあと念佛。

里道の橋

一　歸命頂禮車橋。踏みやしづめて眺むれば、君の御所立つ。南無阿彌陀。

一　歸命頂禮此橋は、人馬を渡す橋なれば、念佛申しいざ渡らん。

一　極樂の前を流るゝ七瀨川。七世も八世もあれとかし親に逢ふせはたゞ一世。

一　極樂の御門の脇の桐の木は、鸚鵡鳥の羽を休め、日だに暮れゝば月と見え候。南無阿彌陀。

孝養の讃

一　親の孝養してもどる後立返り見てあれば、荻も薄も皆靡く、昨日見し人はと問へば、なしと答へて聲もせず、ゆゑなき人を親として、片夕暮の蟲よたゞ、鳴くより外の事はなし。絲有山の絲薄。見外れてをや思ふらん。昔の親の戀しさに、淺茅が原に出て見れば、いつも斷えせぬ墓印、親の御墓へ參りては、親の孝養する時は、七寶蓮華の花開く、後立返り眺むれば、蓮の花が降りかゝる。誰が通ふと人間はゞ我が通ふと申すべし。是が明日の稼ぎには、老と白髮を稼ぐなり、それより月の稼ぎには、塚と卒都婆を稼ぐなり。

他所念佛に御地聲に逢うて立つ讃

一　歸命頂禮友達衆。何と御座敷居好くとも、念佛申しいざ立たん。

達磨讃

一　釋迦と達磨の御立ちて、諸國佛法弘めける。達磨の御恩は有難や。

廟所の讃

一　道芝を踏みや枯らすは咎なれど、有緣無緣のそのために、あるは念佛一返も、又は五返も十返も、毎日唱へ持つなら、己身成佛南無阿彌陀、

同

一　信濃の淺間の菩薩達。六十六國へ天降り、廟所で念佛申さるゝ、それを衆生の請取て、たゞいまと申す念佛の、果きて成佛南無阿彌陀。

同

一　歸命頂禮此墓へ、皆參るは傷もなし。出でて請取れ

みな佛。

神の鳥居

一　歸命頂禮申しきて、鳥居を委しく眺むれば、二本の柱は仁王經。笠木は釋迦の涅槃經、額は法華經八の巻。文字を表しお立ちある。

目蓮の讃

一　抑も目蓮尊者殿。目蓮ほどの子を持ちて、何して地獄に落ち給ふ。出家の體とて子を持ちて、よい寺、よい經、よい衣、是がな我子の目蓮に、吳れたさばやと願ひつゝ願積りて山と成る霧が積りて咎となり尊者は地獄に落ち給ふ。目蓮此由聞召し、地獄探しを致さんと、地獄の數は多けれど、一百三十六地獄探し見給ひ侍らへども、尊者は地獄にましまさず。地藏菩薩を頼みつゝ、無間の地獄を見てたべよ。三尺三寸の劍を持ち、劍の先へと差上げて、是がな目蓮尊者と、目蓮此由御覽じて、尊者の代とて吾をば地獄に落してたび給へ。目蓮地獄に落ち給ふ。出家の體とて有難や。釜はこくさい破して退き。九品淨土と成し給ふ。

鳥居の讃

一　歸命頂禮白鳩の、神の華表に羽を休め、參り道者に福を與へる。

內大門の讃

一　歸命頂禮申しきて、大門委しく眺むれば、千本の松も桐もなし。萬本の松も桐もなし。

一　神の前なる黃金橋。念佛申しいざ渡らん。

石燈籠

一　歸命頂禮石燈籠。衆生を救けん其爲に、小庭に立ちてありければ、四方輝やく南無阿彌陀。

明神の讃

一　歸命頂禮明神の、四本の柱白金で、社壇黃金で盛り輝く、南無阿彌陀。

同

一　歸命頂禮此森へ、今朝の朝霧七たちも、思ふ殿子を千度參らせん。

同

一　歸命頂禮此森へ、森の細道踏み分けて、是へ參るも後の世の爲。

神知らぬ森

一　歸命頂禮此森は、伊勢か熊野か御三島か、社々が白金で、森が輝く南無阿彌陀。

同

一　歸命頂禮此森は、伊勢か熊野か御三島か、九十九社南無阿彌陀。

きだ橋

一　歸命頂禮極樂の、前に掛けたる黃金橋。渡りて見れば極樂の、近く見え候南無阿彌陀。

井の讃

一　歸命頂禮此井戸は、何たる德者が堀りけるよ。泉涌き候南無阿彌陀。

家ほめ

一　扨も果報の御亭樣、御家の懸り眺むれば、八つ棟作りに檜皮葺き、九十九間に御立ちある。大工を申せば大阪の、東の國に名を得たる、飛禪內匠が末弟子が、墨、金持ちて棟梁し、名所〳〵の大工衆が、三百餘人で御立てある、柱を申せばみな唐木、物に上手の事なれば、萬の生物あり〳〵と、今の樣にぞすかさるゝ。

座敷ほめ

一　念佛ゐるこれの御庭敷眺むるに、千疊敷とうち見えて、あいのすがらや疊緣、色を揃へて御敷あり。床の掛物眺むれば、名筆揃うて御掛けあり。鐵砲から弓千挺、鑓が千筋、南無阿彌陀。坪の懸りを眺むれば、千草萬木植ゑ交ぜて、萬の諸尊が舞遊び、此家榮えて常に囀るは、さても目出たき舘かな。

名主ほめ

一　歸命頂禮名主殿。今が盛りとうち見えて、四方の築地銀で金の門を御立てある、門の脇なる唐模木末の梢が金にて、庭や輝く南無阿彌陀。

衆ほめ

一　是の御亭樣今盛り。金の足駄を御履きある。金揚枝を手に持ちて、浦へ遊山と御立ちあり。戊亥をさして眺むれば、棟を揃へて藏七つ。三つは錢藏。四つは米藏。南無阿彌陀。

木戸

一　歸命頂禮申しきて、是の御木戸を眺むるに、去年は竹の杉木戸御立ちあり。今年は金の門開く。

殿屋ほめ

一　歸命頂禮殿屋殿葛籠皮籠の蓋はづし、沈や麝香の匂ひ珍らし。

天王ほめ

一　歸命頂禮天王。四つの柱は銀で、中の二木が金にて町が輝く南無阿彌陀。

藥師

一　藥師を念ずる其人は藥師の御山へ參りつゝ、登りて拜めば釋迦達磨、十二の花籠手に持ちて、瑠璃の淨土へ入ると見た。藥師を念ぜぬその人は、四百四病の苦を請けて、無間地獄に落されて、または石の河原の地獄に落ち、微塵骨破のごとなりて、石のあはぢと生るべし。

菓子の讃

一　歸命頂禮天竺の、月盖長者と云ふ人の、靈山會乘の釋迦如來。彌陀三尊の來迎に、百味の菓子を調へて供養したる功力にて、やまふ平癒するとかや。菓子は高きも賤きも、心慰むものなれば、菓子を施す奇特さよ。

大日の讃

一　歸命頂禮大日の、本地を委しく尋ぬるに、膝また膝まづき、七寶蓮花の橋本に、日々堂を銜りては、普賢堂にて生るべし。

佛知らぬ堂の讃

一　歸命頂禮此堂は、目で見てだにも有難や、彌陀か藥師か觀音か。我等凡夫の事なれば、無明の性を悲しみて、後生菩提の其爲に、念佛申して廻向する。來世は必ずとくと佛になされたび給へ。

鬼王

一　仁王の本地は是とかや。一つに閻魔の御乘ある。二つには仁王の御立ちある。三重の塔の見事さよ。すんたんからりの鈴の音。立寄り御堂を眺むるに、判官殿と辨慶が、辻切めさる繪もござる。扨も畫いたるかのふかな。（畫能）

不動の讃

一　歸命頂禮不動樣。何とて瀧に御立ちある。衆生を救はん其爲に、瀧に立ち候南無阿彌陀。

法華經の讃

一　歸命頂禮法華經は、一部八卷四七品、六萬九千三八字、本門迹門二つにて、三諦不思議を明するぞ。十界一如の方便に、無量の世界の佛菩薩、みな一乘の

御法には、六道四生の衆生まで、一人も成佛せぬはなし。有難かりける御經かな。

釋迦の和讃

一　歸命頂禮釋尊は、實成久遠の佛なり。衆生濟度の其爲に、淨飯王の太子となり、御年十九と申するに、檀特山へ入給ひ、受苦の修行の功積り、臘月八日の有明に、八相成道し給ひて、一切諸經を說き給ふ。華嚴阿含に方等經、般若法華に涅槃經。一代諸經の其中に、卽空卽假卽中は、彌陀三尊を明さるゝ。念佛申せみな衆生。

釋迦の讃

一　抑も釋迦のみいてんは、震旦國に花が降り、或は諸佛が、花を摘み、已に天より樂奏し、晝夜六時の微妙は、曼荼羅華の花が降る。おとくししうの花なれば、此花かへりて迎ふべし。娑婆に念佛はじまりて地獄に蓮華の花開く。貴國淨土の花なれば、此花かへりて拜むべし。我今生死の花の春、梵天迦陵の御聲には、涅槃最後の法門宣べ給ふ。檀特山の麓には五百餘人の御僧達、餘多の諸經を案ずるに、六字に勝る事はなし。法門說きて其後は、ほどなく涅槃に入給ふ。其後釋迦の御弟子達、聲を不惜泣き給ふ。

佛檀の讃

一　參り來て、東をさして詠むるに、須彌佛檀の其上に御本尊樣御立ある。またもその脇見てあれば、金作りの佛樣、千體そろへて御立ちある。

茶の間

一　茶の間をさして眺むれば、四樣四人の御僧達御茶の差引見事なり。其數知れぬ兒達の、御茶の通ひの見事さよ。奥に御座ある住持樣、寶珠の玉を手に持ちて、みな水晶を爪繰りて、去來諸共に極樂へ。

月水の讃

一　此世に作る女人達。月に一度の障あり。流れ水にて濯ぐなら、卽ち水神汚すなり。湯殿水にて濯ぐなら大地へ零す地神を汚すのみならず、地下に交はり火にくばる。不見菩薩を汚すなり。これが積りて血の池に、深さが四萬由旬、廣さが四萬二由旬八萬由旬の其上に、絲より細き橋をかけ、七十五人の鬼共が此橋渡れと呵責する。呵責さては悲しさに、底へくゞりて見てあれば、蜚の毒蛇めが、我も〳〵と呑みかゝる。それがあまりの悲しさに、陸へ上りて出でつれば、鐵砲そろへて押出でる。是を聞くより女人達、血盆經を持ちあれ。

關所の讃

一　里を出て番所の懸りを眺むれば、銀柱金門閂海老錠差下し、金の塀を掛並べ、扨もゆゝしき御番所や。見附の懸り眺むれば、筒金から弓千挺鑓千筋南無阿彌陀。突棒刺股數知れず。上段懸り眺むれば、大將殿とうち見えて、萠黃匂の直垂に、萠黃縅の鎧着て三枚冑の緒を締めて、金作りの太刀帶き、塗籠籐の弓を持ち、鬼門に向つておはします。下段懸りを見てあれば、三百餘人の殿原が思ひ〳〵に鎧着て、思ひ〳〵の太刀帶き、矢倉ひまなく開け給ふ。かほどゆゝしき御關所を、彌陀の光でいざ參らん。

富士の本地

抑も駿河の富士山の、本地を委しく尋ぬるに、せんき四年三月金輪際より夜の內に、出現したる山とかや。嶺には孔雀鳳凰の、棲ませ給へる池もあり。高さが四萬由旬なり。嶺を這ふことはいざ知らず。麓は淺間大菩薩。蔓を並べて立ち給ふ。誠にあらたの御山よ。善する人の參るには、彌陀三尊の來迎で、平地の如く登り行く。大惡人の登るには岸も險しく見て登る。登りて四方を見てあれば、三千世界の白海も、たゞの一目に見えわたる。嶺に登りて眺むれば、凡夫の眼には見えねども、五方淨土を擧びつゝ東に藥師西に彌陀、南に觀音北に釋迦、中に大日如

來なり、方(はう)參りて眺むるに、事おろそかにあらざるや。あはれ佛の誓願に、大惡人にあるとても、此の富士山に參るなら、十惡五逆の罪消えて、五方淨土へ救ふべし。

觀音の讃

一　是より西方西にこそ、紫雲靉き三つ立ちて、中なる雲は鮮かに、觀音勢至と見え給ふ。

六　字

一　南無と六字を唱ふれば、八萬四千の罪消えて、すぐに淨土へ參るべし。

二　天

一　歸命頂禮參りきて、山門遙に眺むれば、白金柱(しろがね)が十三本、黄金柱(こがね)が十三本、黑金柱が十三本、三十九本の淨土なり。黄金垂木に瓦葺き、扉は法華經八の卷兩脇眺むれば、光輝く四天王、兩へ分れて御立ちあり。是が淨土の御門なり。

四方がため

一　抑も淨土を尋ぬるに、東方瑠璃光の、是は藥師の淨土なり。南は南方補陀落の、觀音菩薩の淨土なり。西は西方極樂の、阿彌陀如來の淨土なり。北は北方金剛の、是は釋迦の淨土なり。下には九品の曼荼羅敷き居給ふにありてこそ、九品の極樂淨土なり。かほどの淨土にありながら、何して後世は願はざる。後世を願へや皆衆生。

燈明の讃

一　さし出で東を眺むれば、彌陀の朝日は射渡り、高き御山はまつ照し。日蔭の陰りを急ぎ給ふ。四ツの頃にもなりぬれば、日明燈明輝きて、二方二天を照し給ふ。晝の頃にもなりぬれば、こん天たいの上に出で、六字の名號唱へ給ふ。八ツの頃にもなりぬれば須彌山を廻りては、不斷の法を說き給ふ。七ツの頃にもなりぬれば地神荒神の御神にも、此世未來を守り給ふ。御日(おひ)の暮六ツにもなりぬれば、蔭は射せども雲隱れ、今日も暮日となり給ふ。

八幡の讃

一　歸命頂禮八幡の、本地を委しく尋ぬるに、西方極樂阿彌陀如來でおはします。古神(いにしへ)代の其の時に、八幡菩薩と現れて、衆生を救はせ給ひける。三社の神祇のそのうちに、第二の八幡大菩薩。

花の讃

一　ものゝあはれをとゞめしは、父子の年が五十七、母子の年が四十七、死して行く人十七よ。とぶらふ御僧が廿七。父の讓りの加賀紬、とうじやう姫は死して行く、是も御僧に參らせる姫の菩提はあきらかに助け給へや御僧樣。母の讓りのます[かゞみ]、とうじやう姫は死して行く、是も御僧に參らせる、助け給へや御僧樣。姫が[　]膚守り命と共に緒が斷れて、殘りしものには是ばかり、是も御僧に參らせる姫の菩提をあきらかに、たすけ給へや御僧樣。あまり我子の戀しさに、阿彌陀の鉦を襟にかけ、四寸撞木を手に持ちて、諸國巡りて見てあれど、我子に似たる人もなし。あまり我子の戀しさに、花の御寺へ參りつゝ、花をつく〴〵眺むるに、開きた花は散りもする。蕾の花の散る時は、よしや我子もあのごとく花は散りても木の本へ、又來る春は咲きもする。鳥は古巢へ歸るとも、我子の行衞さらになし。

同

一　極樂の鶯が花の小枝に晝寢して、花の散るを夢と見て、夢の如く往生した。

石女(うまづめ)讃

一　抑も伊豆の箱根山爰で拜めば山一重、參りて拜めば山二重、一重山は釋迦如來。一重山には時鳥、我は冥土へ通ふ鳥、誠冥土の鳥ならば、冥土の樣子を語

れ聞か、我は若鳥知らねども、語らばよきにお聞きあれ。藥師の笈肩にかけ、阿彌陀の前の胸札に、冥土の數をかぞふるに、一百三十六地獄、中にもあはれの地獄には、無間地獄に寒地獄、餓鬼道修羅道畜生道、紺屋地獄に鍛冶地獄、石女地獄でとぐめたり七月死するに苦が御座る。金の鎖でつながれて、池を掘れとて呵責する。閻魔の前の二の門に、七本の竹とておいてある。是を掘れとぞ仰せける。掘らんとすれど爪たゝず。夜は三本の竹の根を、晝は四本の竹の根を、掘れや扱けやと呵責する。竹は劍なり葉は刃、扱がんとするに手は切るゝ、丈なる髪を振解し、七本の竹に押搦み、ゑいやと扱けどよも扱けじ。恐しの我妻や、寄りて諸共扱くならば、かほどの苦患よもあらじ。我が娑婆にありし時、井戸を掘れども水も出ず。蓮をはなせど花咲かず。植木をすれど梢出ず。我が娑婆にありし時、金を積みて持つたより、財寶寶持つたより、養子の子なりとしおくなら、かほどの苦患よもあらじ。是を聞くより皆人も、養子の子なりとなさるべし。

地藏菩薩

一　抑も地藏の誓願に、ふんもん世界の衆生をば皆一心に思ふべし。釋迦の御弟子の眞似をして、墨で衣を染めたれど、心の墨に染まらねば、佛となるはいと難し。養子持たぬ女人の死す時は、春の野邊へ捨てられて、月日にさらされて、よつてとぶらふものもなし。朝夕撫でし黒髪を蓬の下の塵となす。骨はへんほの土となり、苔の下にて朽ち給ふ。

玉手箱

一　玉手箱二人の親を跡におき、中の懸子は何國ならん。伊豆にはいかでかなはぬ旅に赴く。南無阿彌陀。

十王堂の讃

一　賽の河原のさいだん寺、三途河姥子の御立ちあり。御眼の模様見申せば、日月天の光なり。齒口の模様見申せば、みな水晶の如くなり。爪は七寸五分なり通る亡者のえな衣を、七十五枚お帶きあり。ひらんじはしとおかけある。

浮土寺の讃

一　西東北と南と御立ちある。戊亥辰巳の淨土寺。彌陀の光の御立ちあり。彌陀の光の通見えて、すぐに淨土へ參るべし。

身がための大事疫病の所へ行く時是をよむ

一　あさづまや身には劍の鎧着て惡魔を拂ふ劍の刺股。

同歸る時よむ

一　尾嶺は八ツ谷は九ツ戸は一重我行く先はあらゝぎの里。

同身がため

一　我身をば石の岩家に籠めおきて拂ひ淨むるこゝろ清かれ。

疫病おつ立ての讃

一　阿彌陀の御法のはけしさに、四百四病の惡神も、立去り給へ南無阿彌陀。たとへ天魔厄神も彌陀の光に免じつゝ、立去り給へ南無阿彌陀。

上田地方寒念佛和讃

一　奇妙項禮長谷は、今年始めて田を作り、しかも春田が當り田で、なんたらこまにも八穗一で、八穗で一石取るならばこれのお背戸へ藏七ツ、藏の番人誰々と一に大黒二にゑびす、三にお地藏がお立ちやる。なんまいだんぶつ。なんまいだ。

春駒唄

春の初めの春駒なんぞは、夢に見てさへよいとや申す、まして現が乘馬の駒に、年よし世よし蠶飼よし蠶飼にとつては美濃國よ、身延の國や、尾張の國や桑名郡や、小野山腰でとめたる種は、さてよい種ぢ

や。種つぎ申せば越前種にときばら種や、茨城種や三處の種を寄せ集め、飼女の女郎衆へお渡し申す。飼女の女郎衆は褒め喜んで、淺間嶽なる厚綿なんぞ手にさへきりりとしたしめこんで、したゝめ申せば暖め申す。左り袂に三日三夜、右り袂に三日三夜、兩方合せて六日六夜、三日に籠引四日によどむ、五日にさらりと出させ給へ。何で掃こやら掃くべき羽根は、空跳ね鳥長立鳥の、八ツの風きり手に持ちそろへて、一羽根はけば千籠に飼蠶、二羽根はけば萬籠に飼蠶、三羽根はけば皆はき集め、扨又此の蠶に何がな食はしよ。宿の兒娘小足駄はいて、綾の前垂に綿の襷、是より南は皆桑畑戊亥の方にとさしたる枝を、しんまと籠めてさら〳〵扱いて、手で押揉んであの蠶にはらりこの蠶にはらり、いとゑりばらり〳〵と皆蒔き散らし、其蠶此蠶の桑食すやうは、物によく〳〵譬へてみれば、昔源氏の馬屋に立つた、名馬の駒はまきや二方、朝日に向いてはもとどりもとどりと夕日に向いてはそらそよ〳〵と喰ふにも似たり、這ふにも似たり、四時に休んで眞實蠶飼、たけに休んでたつたとまさり、ふなに休んでふんたん不斷蠶飼、庭に休んで俄に育ち、四度の起臥難癖無うて蠶簿にのぼりて作りし繭は、天の河原の瀬に積む石に、重さも似たり、堅さも似たり。綿繭千石糸繭千石、種繭ともに三千石よ。美濃國は綿刹上手。尾張の國は糸取上手、上手上手が寄集つて、四方百間の糸部屋建てゝ、二拾五釜へさらりと入れて、七日七夜に綿刹き揚けて、七日七夜に糸取り揚けて、六十六枠さらりと移し、たいまん國の長者娘の、綾も織り候綿も上手、姉も上手妹も上手、一繭織りて所は鎭守、產土神様へと御簾に上ける。二繭織りては熊野は三社、權現様へと御簾に上ける。三繭織りては御伊勢は内宮、外宮兩社に御簾に上ける。殘りし絹を葛籠に詰めて、馬でやらうか車に積もか、馬に付ければ七十五反。車に積んでよいさら〳〵と、たうと車に皆積み重ね、京に上けよか大阪へやろか、京や大阪の商人衆が、扨もよい糸よい絹地かや。織と強地を褒め喜んで、さらば此糸買取るならば、戊亥の方へと錢藏七ツ、金藏七ツ、糸藏七ツ、蠶飼長者とさんやめでたくなりにけり。

地藏和讃

歸命頂禮地藏尊、昔は凡夫の女人たり、母の邪見にましまして、死して地獄に落ち給ふ。苦惱を救はん爲にこそ、誓願立てし自らが、罪苦の衆生を度脫せり。御緣を結んで賴むべし。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊、氷の上に魚躍り、雪の中なる筍を得たる例の物語。天地は心なけれども、孝ある人を憐めり、いはんや我等が孝の道、捨てめや地藏の御願力。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。母の容を木に刻み、生沒書いて名を遺し、めくらの父を養うて、三皇五帝と呼ばれしも、親孝行の故ぞかし。我等も二親敬うて、かの古を營まん。まして地藏のほんきやうも、是第一と誦するから、親に孝ある我々を、などか他目に見給はん。哀愍攝受垂れ給へ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。ばんだい帝王法を垂れ、百行五常の源も、三世の諸佛教へしも、親孝行の道ぞとよ。しかるに世間の人多く、我子我妻秘藏して、親をば不孝の輩は、天に憎まれ神も捨て佛もひみんいかばかり、深く愼み改めよ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。唱ふる御名も親の爲、勤めし功德なほもまた、二世安樂と祈るなり。地藏菩薩も昔より、親孝行を肝要と、なせる御心深き故、流轉の我等に至るまで、親兄弟と思召し、漏らさず助けとり給ふ。御願のほどぞ有難き。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊、儒家の經史が三千卷。何を目當と尋ぬるに、親孝行を隨とせり、佛の八萬聖教に、多

くは孝を褒め玉ふ。極樂上品往生も、萬善具足の戒行も、地藏菩薩の因地にも、孝を名づけて第一と、心にかけし甲斐ありて、地藏鑽仰の昔より、果報住地と仰がれて、我等が爲に導師なり。しからば世間の我人も、親に孝行よく務め、花の臺に至るべし。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。膝を離れぬ嬰子も、息絶えぬれば野邊の露、妹背親しき仲だにも、宵の月とや諸共に無常の雲に影隱る。かゝるあはれの世の中に、誰かは心とゞまらん。いつか實相常住の、快樂の床に至るべき。導き給へ地藏尊。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。身を觀ずれば水の泡、命のもろきを喩ゆれば、降る雪よりもなほ早し。消えていづくへかへるらん名のみ殘れる苔の下、訪ふ人もなき曉は、峰の木枯音凄く骨をば雨にと晒されて、深き草野に埋もるゝ、かゝる骸（かばね）のなれの果、見るにつけてもいつかさて、三界火宅を出離して、地藏菩薩の御手を受け、安養極樂界中へ、同行同緣諸共に、かくる半座上下臺、永劫不退の位を得、金剛堅固の身とならん。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。あはれ拙き我等かな。今地敎化の導師とは、夢にもいまだ知らずして、曠劫生死に流轉して、迷ひ來るぞ悲しけれ。今より後は地藏尊。他は賴まじ一筋に、賴む心を知邊にて、輪廻の衢を早く出で、四德の都に入る時は、じやうさん菩提疑はず。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。五塵六欲胸に積み、迷ふ心のうちながら、地藏の御名を唱ふなり。至信不信隔てなく平等結緣利益にて、助け給へや我々を。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。一日地藏の名號を、唱ふる功德多くして、俱胝劫のそのうちに、あらゆる菩薩の名號を唱へしよりも優れりと、十輪經に說き給ふ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。民の農事を憐みて、雨を祈れば忽ちに、甘露下りて五穀なる、病を患ふ人々は、信じてまさに苦惱止む、あるとあらゆる願ひをば、充たし給はる有難や。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。廣目女人の古は、我等と等しく凡夫にて、度脫衆生の慈悲深く、本誓願力堅うして、遂に菩薩となり給ひ、今此の娑婆に緣厚く、將して罪苦を救ひ給ふ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。神通方便無量にて、女人の難產難死をば、光をうつす月影の、草葉の露におく如く、皆々平產遂げ給ふ。子安腹帶地藏尊。靈驗多くあるを知れ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。（喜見）きけんの付屬を重んじて、順逆ともに漏らさじと、末法當時の世に出でて、極十惡を救ひ給ふ。一たび名號唱ふれば、五逆無間の罪消えて、永く三途の道塞ぐ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。さても悔しや我等が身。流轉の迷路にさまよひて、業煩惱の山高く、無明の林繁りて輪廻の花は散りもせで、菩提の木の實いつかさて、實のりて歡喜を開くべし。たゞ願はくば地藏尊。一稱一念緣（ゆかり）にて、生死の絆（きづな）を切り斷ちて、無漏の大果を得せしめよ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。たとへ五逆の罪人も、常に地藏を念じなば、自ら地獄に入り給ひ、衆苦に代らん御願力、骨を碎き身を投げて、恭敬供養を致すとも、大悲の深恩盡きがたし。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。人間百年いみじきも、五欲の樂は厭き足らず、無明の酒に深く醉（ゑ）ひ、末長き世と覺え

ども、いかで無常を免れん。さて願ひとよ後の世を貴賤貧福苦樂とて、人には品を分てども、死ぬるばかりは同じ道。死しての後に行く先を、思計らぬ心こそ。我身乍らもあさましや。地藏菩薩は慈悲深く二世の導師と願立てし、迷ふ我身をそのまゝに佛の國へ連れ給ふ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。地藏の名號唱ふれば、一念稱名德高く宿殃重罪消滅し、現世安穩快樂にて、命も長く、病なし。水火盜賊横死まで、皆々除き守護なさる。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。老も若きも諸共に、地藏菩薩に歸依すべし。末法萬年世に出でし、生界度人の願深く二世の所求をも滿足し、畢竟成佛なし給ふ。智者も愚人もおし並べて。誰かは誹り僞かん。仰いで深く信ずべし。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。名を聞き姿を見るだにも、利益無量と說き給ふ。廣大善根具はれば、此緣永く盡きずして、龍花會場の曉は、地藏菩薩と諸共に、彌勒佛の世に出でて、成道作佛の記を受くる。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。大悲の願力數々に、菩薩は餘多ましませど、五逆の罪人救くるは、地藏菩薩に如くはなし。さて幸の我等かな。いかなる宿善深ければ、かゝる御法に値ふ事の、嬉しさ深き袖の露、こぼるゝ涙今日の日も、暮るゝ命は入相の、鐘諸共に果てし後、獨り暗路を行く時は、地藏菩薩の導きを、かねて頼みし我なれば、救ひとらせ給ふべし。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。生るゝ時は身を守り、死ぬる時には導師にて、今生後生萬端を、地藏菩薩に任せおく假に御緣を結びしも、常に信ずる輩も、自身他身衆生界、佛性眞地を開悟して、六道生死の家を出で、かの極樂の花の上、我等栖家と定むべし。必ずひいて行き給へ。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。無佛の導師と聞くからに、六筋の衢に迷ふ我、導き給ふ地藏尊。忉利の付屬も說きいたり、菩薩の敎化を受くるなり。本願必ず誤たず、我等を救ひ給ふべし。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。賽の河原の孤子は、幼き身とて父もなく、賴む腹さへあらざれば、地藏菩薩を賴りにて、衣の裾に縋付き、明くれば婆婆の父戀し、暮るれば母の顏見たや、逢はせてたべと悲しめば、地藏菩薩は憐みて、慈悲の御手にて懷きよせ、婆婆の父母我なりと、諫め取る手の賴もしき、利益のほどぞ身に染みて、かたじけなさに涙かな。南無地藏大菩薩〳〵。

歸命頂禮地藏尊。今この施主の供養佛。天の甘露かわうぜんか。飢を凌いで力を得、佛も已に說き給ふしやくし供養第一と、功德も永く盡きざらん。南無地藏大菩薩〳〵

善光寺如來和讃

歸命頂禮我朝の三國一の彌陀如來。由來を悉しく尋ぬるに、昔釋迦牟尼如來様、天竺毗舍離國大林精舍に說法し、其時月蓋長者とて、七珍萬寶藏に充ち、寶に不足はなけれども、さらに我子の無き事を、常に歎きが深ければ、やうやう五十路に姬一人、浮世に稀なる生付き、夫婦の寵愛かぎりなし、然るに長者の生付き、慳貪邪欲に迷ふ故。念佛唱ふる心なく然らば厄神國に入り、萬民五種の熱病を、受けて果てしはなさけなし。月蓋長者の一人子も、此惡病を受け惱み、已に命の際となる。夫婦の人も悲しみて急ぎ釋尊御前にぞ、參りあはれの御慈悲に、我子の命救はせて、救け給へと涙ぐむ。釋尊長者に宣はく汝が一人の子だとても、救ふ方便世にあらば、三千

世界の衆生だに、いかで救けざるべきぞ。生者必滅婆婆世界、常の習と是を云ふ。早く我家へ歸るべしおしつけ我子は最後ぞと、佛の教にありければ、長者夫婦も地に伏して、佛の誓に叶はずば、家に歸りて何かせん、歎き叫ぶも道理なり。釋尊不愍に思召し、重ねて長者に告け給ふ。汝等深く歎く故、病苦をまぬがれ得させんぞ、急ぎ我家へ歸るべし。これより西方十万の、億土に極樂あるぞかし、是に阿彌陀のおはします、御名は何と宣ふぞ、無量壽佛と拜むべし。急ぎ歸りて西方の、彼の尊容を祈るべし。月蓋大きに喜びて、我家に歸りて香花を、捧げて南無や彌陀如來、信心十念する間に、極樂世界の阿彌陀佛、十萬億土の數知れず、相好こそは顯はれし。月蓋長者の西の門、立たせ給ひて光明は、國中照し給ふ故、惡病忽ち本復す。死したるものは蘇る。長者あまりの有難さ、感涙肝に銘じつゝ、又釋尊の御前にぞ、參りて此土に此佛、とゞめて末世の衆生をば、濟度しばやと申しける。釋尊奇特に思召し、龍

宮界の御寶の、閻浮提金請受けて、阿彌陀如來を鑄寫して、今日の本の信濃にて、川中島の善光寺、三國一の彌陀樣と、是を世界で觀念す。月蓋命終る時我願はくば來世には、國の王とぞ生れ來て、誰に恐れず此佛、附添ひ祈る佛法を、世界に授け給ひける其後阿彌陀如來は、大唐へ移らせ給ひし其時は、月蓋長者と云ふ人は、たくさい國の主なり。さうさん王と名乘り得て、唐土へ佛法弘めたり。さうざん命終る時、來世は貧しき身と生れ、諸人に念佛勸めんと、念願空しからずして、今此世の百姓に、義光とぞは生れきて、さうさん王より十二代、後の聖明天王の、御時如來天王に、告けて宣ふ我をゝば、日の本へこそ送らるゝ、天皇始め萬民の御別をぞ悲しめど、佛勅しきりにありければ、力及ばず御船を、しつらへ御乘せ奉る。日月星の光なく、萬の生類畜類も香の煙や魚類や、虫まで悲しむ顏をあけ、御船を慕ひ濱邊にも、群がる草木も枝を垂れ、葉凋みては悲みの、色をなをすも有難や。川の流もとゞまりて

天地鳴動して、專へに釋迦の御入滅。すでに御船を漕ぎ出す。上下萬民一同に、聲をばかりに歎きしはあはれと云ふもおろかなり。紫雲靉き花降りて、音樂西の虛空にぞ聞えて四方に響きける。本朝人王三十の、御代に欽明天皇の、壬申の神無月、十三日の申の刻如來の船は津の國の、難波の浦に着きにけり。百濟國の御使、佛像經卷花籠に、幡天蓋を捧げける。天皇叡感在して、蘇我の大臣稻目の、宿彌に申しつけらるゝ、紫宸殿に安置して、供養いたして十九年過ぎて天下に熱病が、流行りて人が皆惱む。物部大臣尾越の、大連と云ふ人が、此の御佛の故也と、內裏へ奏聞致しける。急ぎ失ひ給はんと、鍛冶鑄物師を召集め、七日七夜が其間、鞴にかけて吹け退かし、火炎の中に光明が、なほも輝き給ふ也。さてこそ不思議の人形と、難波の堀江に投げにけり。黑雲內裏の上にこそ、覆ひかゝつて青色の、鬼現れてせいじんす。如來を失ひ奉る、明年帝の御命、とらんと呼ばる聲こそは、鳴る雷の如くなり。暗に違はず翌る年、天皇崩御し給ふぞ、讒言したる人々は、炎の病を生みにけり。口より火炎をはき出し、眼は火玉の如くにて、頭を地になし足をあげ、無間地獄の業洒し、狂ひ死にぞ失せにけり。今年までは、千二百餘年にこそはなりにける。

光明遍照十方世界　念佛衆生攝取不捨。

なまいだ　南無阿彌陀佛　あむあみだ

火ぶせ祈禱讀

一　歸命頂禮愛宕山。本地は將軍地藏尊、前に天狗の御立ちある。常に火焰を守りつゝ日護摩を燒かせ給ふなり。是も地藏の利益なり。

一　歸命頂禮諏訪の宮。信濃の國の鎭守にて、作りを守らせ給ふなり。文殊普賢の御再誕、利生あらたに七不思議、肝に銘じて有難や。

一　歸命頂禮觀貞寺。南無や大悲の觀世音、五逆の罪も

消え失せて、二世安樂に守らんと、誓の深き菩薩なり。

一　歸命頂禮熊野宮。摩訶陀國の大王で、太子后諸共に此日の本に天降り、三社の神になり給ふ。衆生濟度の御誓願。

一　歸命頂禮閻魔王。本地は地藏菩薩なり。見る目かぐ鼻九みやうじん、此の念佛の功德にて、必ず淨土へ送り給へや。

一　歸命頂禮此宮は、天滿自在天の神。その古は菅將相御父御母さらになく、天より獨り天降り、世界の政務をよく治め、神に祝はれ給ひては、手習智慧を授けつゝ、三種の難を明かに、名を顯して德をとる。

一　歸命頂禮神明の、そのかみ天の逆梓で、青海原をかき探し、一つ宇が島となり、のう神國を天照、大神宮とぞ拜すなり。

一　歸命頂禮極樂の、阿彌陀如來の淨土へは、念佛申す輩を、救はせ給ふ觀世音。禮し給ふ大勢至、誓願空しからずして、救け給へや如來樣。

一　歸命頂禮地藏尊。等覺無垢の大悲達、其數あまたましませど、大慈大悲の深き事、地藏菩薩に如くはなし。

右九ツの讃九品の淨土の心也

回向の讃

一　歸命頂禮此念佛、志ある手向なり。十三佛へ上げ申す、施主の靈の後世の爲。

一　一切生靈生極樂上品蓮台上正覺菩提行願不退轉天引導三途及法界。

一　かけ念佛おんとき

惣回向の文

一　願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國。

阿彌陀和讃　不合什レ成ル所ニテ此讃可然シ

一　諸法實相と聞く時は、峰の嵐も法の聲、萬の法と觀ずれば、苔の朽木も佛なり。佛は三世にましませどかゝる悲願は常になし。

一　悲願行者の釋迦だにも、涅槃の雲に隱れます、まして凡夫の愚では、いかで無常を免れん。無常眼の前に見て、火宅を出よとすゝむれど、貪欲心の深ければ、聞いて驚く人はなし。

一　生るゝ時はたゞ一人、死する暗路に友はなし。死する暗路の友とては、大善根の夕煙。後れ先立つ習とて、親より先立つ子もあれば、弟に後るゝ兄もあり

一　念顚倒する時は、さらに地獄は外になし。

（かけ念佛同向右同斷）

あはれにて菩提心の發る讃

一　歸命頂禮極樂の、賽の河原を見てあれば、一つや二つ三つや、四つよりうちの幼子が、小石を寄せて塔を組む。一塔組みては父の爲、二塔組みては母の爲三塔組む間に日が暮れて、賴むばかりは地藏尊。

屋がための讃

一　歸命頂禮此の館。石据ゑ並べ霜柱氷の梁に雪の桁、露の垂木に雨除けて、板敷つめて障子立て、茅屋の棟の煙まで、豐に末も繁昌する。

一　歸命頂禮此の御酒は、なんと伊丹の諸白か、上田で流行る杜丹酒か、御酒の匂は杉の山、此の大勢に施行酒、是も佛の御方便。

一　歸命頂禮此の御茶は、新茶か濃茶か宇治の茶かお江戸で流行るあべの茶か、

又は常陸の下妻か、縁が勝れて極無上、御茶の匂は富士の山、宿へ歸りて物語、是は御宿の施行なり。

念佛講定

一　念佛出會の節煎茶ニテ寄合可申候。

一　有合候酒又は心ざしに振舞方御座候共、醉申候樣に大酒仕るまじき事。

一　口論堅ク仕間敷候、たとへ仲間にて不調法成事申掛候共、念佛之座にては其沙汰に及まじく、こらへがたき品も候はゞ、其品追而利段ニ可申通事。

> 只今の御心ざし二世功德無量檀波羅密具足圓滿南無阿彌陀佛（西方）
> 手の内唱へ事
> 御家内安全子孫繁昌などゝ唱へべし

役者覺

讃　引

鉦　打

發願文並回向

かけ念佛　　相願惣念佛

次念佛次第

一　南無一切諸佛諸菩薩、諸天善神、地藏、閻王、十五十六地獄、畜生、餓鬼、修羅人天、聲聞、（緣）覺、菩薩、佛界。

一　南無念佛行者、法然上人、代々開山、其外諸宗代々開山、供養の爲。

一　三界萬靈、七世の父母、六親眷屬、法界衆生、有緣無緣、山海の魚類（うろくづ）、草木國土、卽身成佛。

一　南無今日今晩の施主、此の道場村中、聖靈老若男女の爲。（菩提の爲）

一　阿字十方三世佛、二十一切の諸菩薩、陀字八萬衆生みやうかいじ阿彌陀佛。

一　四國三十三番、秩父三十四番（坂東三十三番）日本順禮觀世音菩薩、三國大一善光寺、阿彌陀佛（そん）、極樂上品天蓮（はちす）の臺（うてな）へ御迎はせ給へ。

一　自受十罪五逆消滅、自他平等卽身成佛。

一　迷悟三界悟故十方。（回向文）諸行無常。（本來無東西）生滅々已。寂滅已樂

一　願以此功德。平等施一切。同發菩提心。往生安樂。

念佛和讃

> 歸命頂禮手習の習ふ一字を尋ぬるに親と師匠と天神の朝暮の教あさからず。譬へてみれば三の海其水底もなほ淺し。須彌山（しゅみ）山（せんざん）もなほ低し諸事の教訓淺からん。靈驗あらた天神の恩を報ぜん一もうの友をつらねて願樂し諸人の助力が志一宇に宮居を建立す。

光明遍照（アマネクテラス）ニ十方世界ニ念佛衆生攝（セツ）者不捨（シテ）玉はんなまいだ南無阿彌陀佛

一　歸命頂禮諏訪の宮（前出）

一　歸命頂禮南無藥師。大慈大悲の十二神、五逆の罪も消え失せて、二世安樂に守らんと、誓の深き菩薩也

一　歸命頂禮閻魔王（前出）

一　歸命頂禮此の宮は（前出）

一　歸命頂禮神明の（前出）（未句）救け給へや南無藥師

一　歸命頂禮地藏尊（前出）

一　諸法實相と聞く時は（前出）

一　生るゝ時は只一人（前出）

一　悲願行者の釋迦だにも（前出）

一　歸命頂禮極樂の賽の河原を見てあれば（前出）

一　歸命頂禮此の御茶は（前出）

一　歸命頂禮此寺の、大門懸り眺むれば、七里大門七曲り、杉木に椹を植ゑ交ぜて、間々に商人は、何を商ふ商人は、一に香爐二に花立、三に樒の香を賣る。買手はつてのはての人、賣手は極樂淨土人。廣庭懸り見てあれば、横石立石金石、客殿懸りを見てあれば、一に釋尊二に阿彌陀、三にほくろく四に多寶、五には寶勝六地藏、七に觀音八藥師、九には阿閦の十彌勒、あまた佛のまし〳〵て、衆生救はせ給ふなり。

一　歸命頂禮名主さん。奥の書院を眺むるに、間近親疎の御酒盛、媒地藏の御酌にて銘酒をこそは勸めけり

一　歸命頂禮十七が、柳の下で糸を取る。絹糸取りて何にする。藥師如來の鉦の緒に。

一　歸命頂禮道芝を、踏みや枯らすも咎なれど、藥師如來へ日願にて、浮世をめぐりて門に立つ。

一　歸命頂禮南無藥師。瑠璃光佛を祈るなら、老若男女に至るまで火難水難目の病、除けさせ給ふ此佛。常に信心致すべし。

一　歸命頂禮道芝を、踏みや枯らすも咎なれど、二人の親のその爲に、浮世を廻りて國々の、名所古跡に札納む。

一　歸命頂禮有難や、藥師如來の十二神、此の御佛の威德には、手足胸腹眼の病、好む藥に病辭し、瘧疾寒熱難病を、除けさせ給ひて福德を、授け給ふと御誓願。

一　歸命頂禮有難や。此の御佛はあら不思議、石尊石佛一體で、裏にあたごの立ち給ふ。火難病難産の苦患を除けさせ給ふなり。子のなき人に子を授け、眼を病む人を明かに、靈驗あらたなる故に、佛膳佛具そ幡幡うばんを諸人の助力志、請受け成就乞願ふ、信心深く入り給ふ。

一　歸命頂禮此宮を、社はるかに眺むれば、梅松櫻三木の、中に繁れる天神の、此の神朝暮祈るなら、男女幼き子供には、手習智惠を授けつゝ、命短かき人々に、壽命を與へ給ふなり。諸人愛樂なさしめて、夫婦妹背の緣を組む。常に信心いたすべし。

一　歸命頂禮愛宕山（前出）

一　歸命頂禮十七が（前出）

一　此の舘門の懸りや庭の式諸木名花に類なし。和國に稀な家作り奥殿庫の珠玉には、金銀瑠璃の粧の、梅檀沈水充ち滿ちて、內には佛神守護したり。外には慈悲の善功德、貴賤上下の輩も、出で入る人は群集して、慈悲心四方へ聞えなば、そみん將來御子孫もます〳〵繁昌めでたけれ。

一、八幡山諸人戌亥を守らせて、幼子供の疱瘡や、弓矢の難を除け給ふ。汚れ不淨を拂ひては、常に信心祈るべし。

一　道祖神深夜の道も明かに、商ふ人を導きて、浮世の事の初め知る、葦毛の駒もいさぎよく、驛路の鈴に金銀の、萬寶授く德の神、一足とゞめ拜むべし。

一　此寺は竹田の番匠の御細工、七堂伽藍に成就して、御堂光りしん〳〵と、本尊阿彌陀に釋迦如來、十二の菩薩の御立ちある。

一　藥師さん諸人病苦を救はんと、種々の草木や根を集め、佛藥漢藥粉藥を、用ひば無病となり給ふ。是も藥師の利生なり。

一　歸命頂禮道芝を、踏みや枯らすも咎なれど、二人の親のその爲に、諸國巡り順禮し、秩父三十四番や、西國三十三番や、坂東三十四番所の、觀音諸佛へ札

納め、身は安樂に供養する。

一　歸命頂禮箱根山、麓に立ちし六地藏、參ろとすれば雲かゝる。雲に邪見はなけれども、我身に邪見のある故に、花のやうなる子を殺し、あまりその子を戀しさに、三寸鉦鼓を腰につけ、二寸の撞木を手に持ちて、四國西國廻れども、我子に似たる子もあらじさらばやがて寺參り、寺へ參りて眺むれば、開きし蓮華は散りもせず、摘みし蓮華は散り失せる。卽ち我子もあの如く、念佛申して思ひきり。

一　歸命頂禮金比羅の、そのかみ御本地尋ぬるに、しゆとくそんてい大天狗、讃岐の國に立ち給ふ。民安全に家々の、火難災難難産も、幼子供の疱瘡も、輕くなさしめ給ふなり。（五穀成就の神なれば）常に信心なし給ふ。

一　歸命頂禮此舘、瓦の棟のうつくしさ、數は數萬に平瓦、軒敷瓦唐草に、好み望みに家の紋、小波寄する如くなり。玉散る　も瑠璃の色、破風には魔除け鬼瓦棟の重ねも九重の、都をうつす東大寺、此家にましします御佛は、大佛尊天盧舍那佛、諸人歸依して群集す。

（唱事次第、講定念佛、回向等略）

一　歸命頂禮米子娘が、遙かの道を水を汲む。親孝行の人なれば、天神樣もあはれみて、庭の梅花の其下にお水お授け給ひけり。親に孝ある人はたゞ、何につけても賴もしきな。

一　歸命頂禮十七が櫻の下で糸を取る。其糸取つて何にする、天滿宮の幡の糸。

一　（歸命頂禮）長吉が親孝行の其爲に、雪や霰の降る時も、蓑笠冠り鍬を持ち、竹の林の其中で、竹の子掘りて持歸り、親に手向ける志、三國一に名も聞え、深く神慮を祈るべし

一　（歸命頂禮）長吉が親孝行の其爲に、川へ下りて氷ふむ。氷碎けて魚躍る。捕りて歸りて炊きにして、親に手向ける心こそ、是天神の敎かな。

一　（歸命頂禮）天神の、庭の砂もさく〳〵と、寒紅梅もみどりよく、梅は諸木の親なれば天滿宮の御神木。

一　生るゝ時は只一人、丈立ち諸行する時は、親と師匠と天神の、威德を常に拜むべし。

一　（歸命頂禮）名主さん、奥の所ゐんを眺むれ（つば）梅松櫻橘の富貴美事にいさぎよく、家富み榮えましますも、みな天神の御蔭かな。

補　遺　終

昭和三年七月二十日　印刷
昭和三年八月廿七日　發行

（非賣品）

日本歌謠集成
（4）

著作者　高野辰之　東京市外代々木中山谷一六七
發行者　神田豐穗　東京市麹町區內山下町一ノ一
印刷者　關根慶寬　東京市牛込區早稻田鶴巻町三六二

印刷所　早稻田印刷株式會社

發行所　東京市麹町區內山下町一ノ一　振替東京二四八六一　春秋社　電話銀座五六五二・五六五三

자546